

の此無心。

小兵 イヤモウ、呆れてとんと物がいはれぬ。己も名うての悪黨、さまぐの働きを、商買にして居れど、其又上を行く半兵衛。汝はたくましいものぢやなア。よういうた。出かした。賣つた代物は其方へ取り込み、其代金は只貸してくれいとは、出かした。男ぢや。面白い。こりや一番此金を貸してやらう、といひたいが、マアならぬ。否だ。

半兵 ヤア。

小兵 いうても、坊主小兵衛。さういふ鈍い者と思つて居るか。

半兵 なんのさうではないが、今の入り譯をとつくりと

小兵 イヤ、汝がたにくわにか、つては、此後働き仲間へ己が面が出されぬ。篋棒つくすな。

半兵 すりや、これほどにいうても

小兵 貸す事はならぬ。

ト立ち蹴に蹴る。此時ゴンと暮六つの頭を打つ。半兵衛起き上り

半兵 ヤア。ありやもう暮六つ。

小兵 硯の金を早く取り得。これから腕く、汝がさまわい。

ト引退け、行かうとするを、半兵衛こなしあつて

半兵 非道と知つて非道をするも、お主の爲。

ト後ろより一かせ切る。小兵衛ソツと倒れる。すぐに乗りかゝり、口へ手をあて、咽喉へ突込み、抉る。小兵衛こなし。半兵衛止めを刺し、死骸の懐より財布を取り出し、死骸を片脇へ寄せ、蒲團を取つて来てかむせ、刀の血を拭ひ、鞘へ納め、身拵へして

半兵 もう佐市様へお約束の刻限なれば、ちつとも早く。

ト財布を懐へ入れ、硯を取り出し、花道へ行かうとする。向うより佐市、家來に箱提灯を持たせ走り出て、花道にて行合ひ

佐市 其方は半兵衛でないか。

半兵 佐市様。只今御所へ上りますところ。

佐市 すりや硯はいよく手に入つたか。

半兵 お喜び下さりませ。やうく手に入りし若菜の硯。

ト袋入りの硯を渡す。佐市取つて

佐市 途中ながら大切な御用の品。ソレ、提灯。

家來 ハツ。



ト提灯を差出す。佐市とくと改め見て

佐市 ヤア、こりや、尤も形は式部形なれども、常の瓦にて拵へし、真赤な似せ物。

半兵 エ、。(ト大きに恠りして)すりや其硯は似せ物とな。

佐市 一度ならず、二度ならず、武士を欺く半兵衛、奇ッ怪至極。此趣き御主人へ申し上げ、黒木屋親子の出入りは止め、祟りは追つて、待つてをれ。

ト硯を打附け、行かうとするを

半兵 イヤ、申し、佐市様。

ト硯を取つて留める。

佐市 エ、面倒な。御用の妨げ。

ト振り切り、家來を連れて走り入る。半兵衛さま、こなしあつて、硯を取上げ

半兵 此硯が似せ物とは、さては小兵衛めが。

ト本舞臺へ立戻り、蒲團を取つて死骸を起し、懐中をいろ／＼改め見て

ヤア、こりや外にも硯は……ホイ。

ト控と下に居るところへ、向うより徳兵衛、提灯持つて走り出て

徳兵 サア、約束の暮六つは鳴つてしまつた。身受けの金を受取りませうか。

ト半兵衛下に居ながら

半兵 せめて身受けは、ソレ、三百兩。

ト財布を抛つてやる。徳兵衛取り上げ

徳兵 ドレ、三百兩なら、ちよつと改めて

ト財布を解き、手早く金を改めて、恠りして

ヤア、こりや三百兩ながら、百足小判の似せ金ぢや。

半兵 ヤア、それも似せ金とは。(ト取り上げ見て、恠り)ほんにこれも似せ金。最前小兵衛が改めたに、こりやどうぢや。

徳兵 似せ金を掴ます半兵衛。所詮奉公人も返すまい。此通りを代官所へ。さうぢや。

ト向うへ走り入る。

半兵 コレ、待つた、親方、それでは

ト門口へ追ひかけ出るところへ、五郎吉走り出て来て

五郎 モシ、半兵衛様。親旦那大隅様を、代官所から呼びに来て、河原の人殺しは、いよく彦三様と知れ、行方知れねば人質と、親旦那はすぐに揚り屋へ、お入りなされたわいの。

半兵 ヤア、そんなら親旦那は揚り屋へ。

五郎 此様子を筒井の御親子へも知らさしにやらぬ。ソレ。



ト引返して走り入る。半兵衛向うをキツと見詰めて  
半兵 もうどうあせつても跳いても、叶はぬ時節。此上は町人ながら武士の果。ムウ。さうぢや。

トこれより獨吟になり、半兵衛しほしと内へ入り、納戸より角行燈を出して来て、硯を引き寄せ、右  
の行燈へ書置きを書く。此内始終獨吟にてよろしく、書きしまひ、脇差しを鞘ながら取り上げ見て  
此一腰は其以前、小吟様の父御の、本間彌太夫様より拜領。今町人と成り下つても、大切に所持  
したが、思へば故主と今の主人へ、心盡しも水の泡。あはれ最期は、昔忘れぬ正木半兵衛。

ト諸肌脱ぎ、脇差しを抜き、手拭ひに巻き、グツと腹へ突込み、引き廻すと、向うバタ／＼にて、新兵  
衛提灯を持つて走り出て来て、すぐに本舞臺へ来て内へ入る。

新兵 サア／＼、小吟殿の身受けは首尾よう済んだぞ。(ト半兵衛を見て、悔りして) ヤ、こりや何故に  
半兵衛。

ト駆け寄り、後ろより抱き起し、介抱して  
コレ、半兵衛。何故腹切つたのぢや。様子は／＼。

ト半兵衛こなしあつて

半兵 オ、新兵衛殿か。

新兵 新兵衛ぢや／＼。

半兵 コレ、今死ぬるのは彦三様の人殺しの解死人。又、小吟様の身の上も、思ふに任せず、それに悔

園家の硯の申し譯。事の様子は、行燈の書置き。

新兵 オ、それで様子が解つたが、残念な事しられたなア。小吟殿の身受けは、氣遣ひせまい。坊主  
小兵衛に渡さつしやつた硯の金を、百足小判と摺り替へて、代官所へ行くといふ親方に出會うて、  
身受けは此方へしたわいの。

半兵 ヤ、そんなら小吟様は

新兵 首尾よく身受けは済んでしまつた。

半兵 エ、忝い。まだ其上に合點のゆかぬは、女房が最前の三百兩。

新兵 コレ。それも半兵衛が爲を思ひ、ちつとの内、妹おりくが、島原へ。

半兵 ヤ、／＼。

ト悔りする。新兵衛介抱して居る。奥よりバタ／＼にて、お路走り出て

みち コレイナア。彦三さんは半兵衛さんの死なしやんすを聞いて、どうも生きては居られぬと、書置き  
して、裏から抜けて死に、行かしやんす。小吟さんも留めながら、附いて行かしやんしたわいなア。  
新兵 ヤア、そんなら彦三様も、死ぬる覺悟か。

トこれにて半兵衛キツとなつて

半兵 イヤ、お二人は殺さぬ／＼。



ト身をかまはず駆け出すを、兩人介抱して

新兵 尤もぢやくが、身を跳くと、コリヤ疵が

新兵 イヤ、二人は殺さぬく。

新兵 コレ、手負ひだてら身を跳いては、ならぬぞく。(ト押へて居る。お路うるくして居るを)コレコ

レ。お路様は、爰かまはずと、ちつとも早くお二人のあとを。早くく。

みち サア、どこを當て所に尋ねてゆかうぞいなア。

新兵 マア、委細かまはず、東山々々。

みち そんならすぐに、東山へ。

新兵 ちつとも早う。

みち さうぢや。

トこなしあつて、向うへ走り入る。新兵衛段々弱りながら、すつくと立上り

新兵 どうでもお二人は、殺さぬく。

ト次第に聲もかすかになり、新兵衛ははらくして介抱する。新兵衛こなしあつて、ハツタリと俯向けに轉ける。新兵衛思ひ入れ。

新兵 ネイ。

ト、ちよんく。返し。

本舞臺三間の間、真中に高土手の太夫座、これに常磐津連中並び居る。後ろ打抜き、鳥邊山の模様。清水堂の塔を遠見にして、舞臺先き花道、一面に菜種を引出し、爰に彦三、小吟、お路、兩方より留めて居る。ゴンくにて、道具とまる。

エ、そこ離せく。

申し、彦三さん、マアく待つて、下さんせいなア。

「ゆうべまで、水の出花をひきかへて、今日の彦三が身の知死期、妻の願ひもかのへさる、八阪を過ぎて爰までも、慕ふ菜種の亂れ咲き、花には雨もふり袖の、濡れてこがる、殿御は仇に、なびく枝振り常磐の松と、契りしかひも叢雲に、月々毎の紋日をも、小吟様への心意氣、どうぞわたしも百分一、あやかりたさにいろくと、いうたとして口説いたとして、聞入れて下さんせにや、いつそ覺悟を娘氣の、死なぬ先きから回向の、かねて憂き思ひ、かこつ寐覺めの色三味線に、合はぬ調子の其つらさ、逢うて寐た夜の報いか罪か、法のえにしも花を、る、佛様にも凡夫から、粹な手管の方便は、深いくの妹と脊に、



勤めする身に誠は無いと、譯知らぬ、常の女中へ追従に、結ぶの神の仲人口、  
大事の殿御寐取られて、さぞ腹が立たう、無理ぢやない、ふつつり思ひ切つた  
ぞやと、いうては見たが此胸が、やつぱり思ひ、エ、切られぬ、堪忍してと口  
説き泣き、「おかしやんせ、口車、かけぬかけるの其譯も、よう汲み分けて居  
るわいな、「さう出やしやんすりや此方も意地、せんから馴染みの此小吟、い  
やいや、此方は女夫仲「いや、わしがと、よれつものれつさ  
るおがせ、まとひついたる袖たもと、春に飛びかふ蝶つがひ。

ト三人宜しく振りあつて、小吟、お路、彦三をおはへあるく。此うち向うより小和田屋又助、やつし、  
尻からげ、風呂敷包みを背負ひ、飛脚提灯を提げ、東の揚幕よりお富、赤前垂れ仲居の形にて、駒下駄  
を穿き、扇九と書いた提灯を持つて出て来る。

「いや状使ひのよたんぼう、文の便りや京中で、男まさりの扇九の仲居、顔の  
赤いは前垂れの、うつりやすいが色の癖、其偽りを運びゆく、歸る鴈金来る  
燕、どこを當て所か急ぎ来る。

ト又助、お富、本舞臺へ来る。此内に小吟、お路、彦三を引き合ふ中へ兩人入る。小吟、又助を彦三と

思ひ、引き合ふ。彦三はお富を小吟と心得、手を取つて行く。皆々一時に顔見合せ、恟りして  
又富 エ、何をさつしやる。

お路 ツイ人違ひで

彦三 免して下さい。

とみ ヤア、お前は彦三さん。

又助 ほんに、小吟さんでござりましたか。

小吟 わたしやどうせうぞいなア。(トこなし)。

とみ 向うにござんすは、誰さんぢやと思つたら、小和田屋の又助さん。

又助 此提灯が見えぬか。此方は一目見ても扇九のお富殿と見てとつた。さうして今時分、どこへ行く  
のだ。

とみ 清水の浮無瀬にござんす、お客の處へ迎ひに行て、先きは大的捻ち上戸。それを飲み伏せて來た  
わいなア。

又助 ほんに、今ての座敷持ち。時に、お前方は今時分に……ア、どうやら心中といふやうな

彦三 ア、コレ、そんな事ぢやない。鳥邊山の日親様から、妙見様やら、觀音様やら

ト愚圖々々いふ。



又助 それでは淨土、法華のごたまぜだ。

とみ コレ、又助さん。なんの三人で心中がなるものかいなア。(トお路を見て) シタガ、お前はつひに見ぬ

みち アイ。わたしや此彦三さんの妻

トいはうとするな

彦三 ア、コレ。つまらぬ身ぢやによつて、其方は仲居奉公の新参者。

とみ 其仲居奉公も、勝手に知れねば動まらぬもの。

又助 そりや便り屋の又助も、日々の状態、便客の方から、首尾よう返事を取つて來ねば、色達の機嫌がわるし

とみ サア、お客も機嫌をとり鐘の

又助 朝の歸りが肝心勘文。

〽赤前垂れの明けがらす、可愛い旦と憎い朝、眠い顔にも空笑ひ、翌日の文の便り屋が

又助 うまい返事を

とみ 仲居は機嫌を

〽取るものに取りては、紋日を受取り、物前掛取り、お髭の塵取る、粹と見て取る、手を取る、床取る、徳を取る、酌取り、口取り、下戸、上戸、數取る客にも楫を取る、色取りなんぞは、あそこの隅ではこそ、この隅ではち、つくわん、ゑりくりくぜるを取持ちで、ぜんぞろ、してていせんぞろ、とんからり、どんどんつく太鼓に振る鈴、ひうやひやる吹くは竹笛、合ひの手は中ちつくり、三味の手、て、てん、つるてんを弾かせて下方に、ちりからちりから、たつぼうを打たせて、さつても心が浮いたえ、浮いた浮き世のわざくれは、おじやれ女の一節に、吉田通れば二階から招く、しかも鹿の子のナア振り袖が、ちよいと招く、泊りかえ、泊らんせ、旅籠が否なら木賃でも、ア、とまるぞえ、其上、お寐間のお伽が負けぢやぞえ、やすいもの、振りも吉田の小手招き、酒は天目サアでおほるべいていなやれ、さて、尤もぢや。さまづ押へべいか、肴がない、おや、れ酔うたでおんぢやる、サ、いけぬくぜつなりやくすぐるべいと、づで、つで、このほんかえ。



ト兩人宜しく振りあつて

とみ 仲居の秘密は、此やうなもの。

又助 ヤレ〜。とつけもない事にかゝつて暇どつた。

とみ ほんにわたしも、急な用。

〽皆さんこれにと口輕も、機嫌上戸のあとや先き、しどろもどろに走り行く。

ト三重にて、又助お富、下座へ入る。

彦三 けはしい中へ、いろ〜な者が来て

吟路 そんならどうでも

彦三 ととても長らへ居られぬ身の上。

吟路 アノ、二人ともに

彦三 仲よう連れ立つ、死出三途。

吟路 嬉しうござんす。

〽急きたつ心急さとめられ、又も向うへ代参り。

ト山伏しの合ひ方になり、向うより奇妙院、頭巾着た山伏しの形、錫杖を振つて出て来る。

〽さんげ〜、六根清淨、大峰、八代、金剛童子、大日大事の〽鼻の下、守ら  
せたもふ一代の、本尊とかけの山道も、虚空ひてんと歩み来る。

ト此文句にて、奇妙院本舞臺へ来て、三人を見て

奇妙 ハ、ア、聞えた。夜夜中、美しい女中さん二人に息子さん一人は、なんぞ格氣のいひあがりて、

ひよいとつまらぬ心になつて、花の盛りを、散らさうとは

〽なまぐさばんだ、ばさらな浮氣、大聖不動明王は、外には怒りの茨の枝、内  
には慈悲の花かづら、ざつくの繩の白藤や、利劍に拂ふ鬼薊、實相無漏の早咲  
きは、南枝始めて華嚴經、薬師は瑠璃のつぼ菫、おんとろとの小手毬も、一イ  
ニウ三イ四オ十ウとよんでは、ちよさんさんばい、ちよこんこんぎやう、ちよ  
ろく六字の彌陀の梵字とぞ〽敬まつて曰す。

サア〜、お初穂、心持ち次第。これからは諸人愛嬌、息災延命の、守りをあげませう。

小吟 イエ〜、もうそこどころではござんせぬ。(ト簪を抜いて)これを進ぜうほどに、早う行て下さ



んせ。

ト奇妙院取つて

奇妙 こりやお初穂の代りに、簪とは、女中を守りの辨財天。

ト祭文になる。

「さるほどに、これは又、勿體なくも竹生島、辨財天の御由來、くはしくこれを尋ぬるに、津の國浪花の天王寺、佛法最初の御寺なり、本尊何かと尋ぬるに、青面童子で庚申、聖徳太子の御建立、三水四石で七不思議へ龜井の水の底清し、千代に八千代にさられ石、巖となれや八幡山、八幡に矢橋の渡し守、沖ゆ糸船から眺むれば、女浪男浪の絶え間より、サア、ゆるぎ出でたる島とかや。

彦三 ア、コレ。もうよい。

奇妙 エ、コレ。もちつと聞かしやるは。其辨財天の利益の底を聞かぬはまだ野暮々々。

「辨天様にしつぱりと、抱かれて顔を已待ちとは、豆腐もぐつつりくづにの口舌、嘘の鐵砲放さうと、しやんとかまへし錫杖を、振り立て〜急ぎ行く。

トこれにて奇妙院下座へ入る。

彦三 サア〜、又邪魔の來ぬうちに

吟路 彦三さん。

彦三 お路。小吟。

「はや東雲と三重の帯、三つに搦みしこま結び、鳥邊の煙りと消えぬらん。

ト此文句にて、三人覺悟のところへ、向うバタ〜、新兵衛、濱右衛門を追ひかけ出て、立廻りあつて

新兵 硯の盜賊濱右衛門。

濱右 何をちよこざいな。

ト立廻りにて、新兵衛、濱右衛門を押へ、硯を取る。

彦三 ヤア、其方や新兵衛。

新兵 若菜の硯、手に入りました。

ト彦三に渡す。濱右衛門剣れ起きて立廻りのところへ、又助、下座よりとつて返して、濱右衛門を捕へ

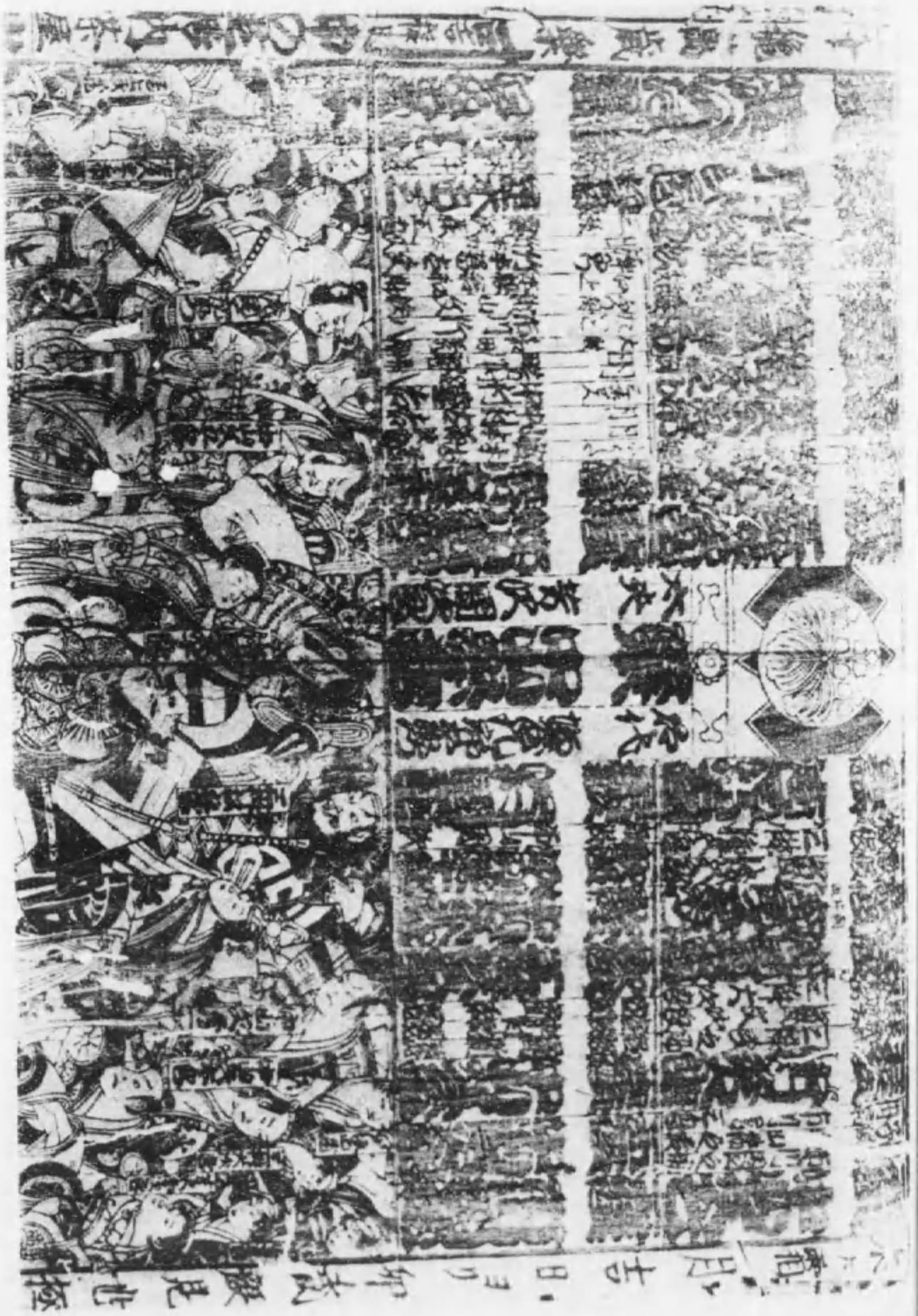
又助 若菜の硯出る上は

新兵 人殺しの科は、半兵衛が切腹。









十條二區歲樂 區名詳見部之末世内本屋

之六 此 吉 日 卯 試 殿 見 也 極



This vertical strip contains four sections of text, each with a large title character and smaller text below. The sections are framed by decorative borders of plants and flowers.

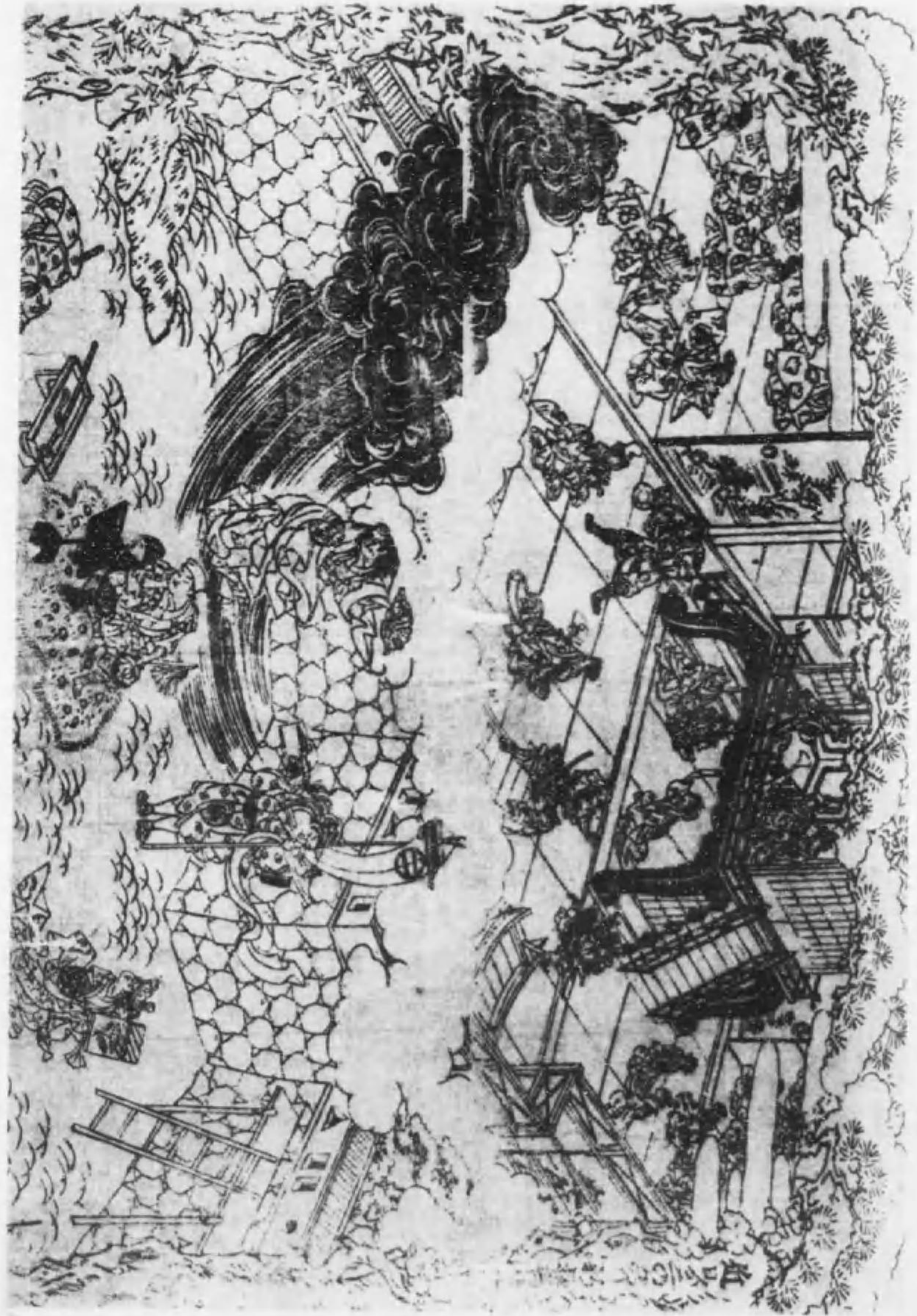
**Section 1 (Top):** The title character is **上** (Upper), with **口** (Mouth) to its right. The text below is dense and small.

**Section 2:** The title character is **大** (Large), with **切** (Cut) to its right. The text below is dense and small.

**Section 3:** The title character is **香** (Scent). The text below is dense and small.

**Section 4 (Bottom):** The title character is **鐵** (Iron). To its right is a circular emblem containing a stylized plant or leaf design. The text below is dense and small.







「青樓詞合鏡」二幕は、寛政九年二月、並木五瓶が四十九歳の春、其専屬であつた葺屋町の桐座へ書きおろした世話狂言である。一番目の「大注連會我門松」が、吉例の會我狂言でありながら、五瓶の發案で、全部幕無しといふ、其頃としては、破天荒な趣向を見せた際、其二番目が此「青樓詞合鏡」で、これがまた宗十郎と菊之丞の女夫役者にびつたりとはまつて、非常に見物の興味を喚起したので、一二番目と相俟つて、三芝居中、第一の大入りを占め、五月まで休みなしに興行を続ける程の成功を得たのであつた。

二番目が成功したのは、宗十郎、菊之丞はじめ、彦三郎、男女藏、三津五郎らが、無人芝居といふので、一層努力して、面白い舞臺面を見せたが爲でもあつたが、五瓶が、是等の俳優の柄にはめて、役々を儲かるやうに活躍させた上に、桐座の芝居茶屋の實況を見せたり、吉原の妓樓の情調をスケッチして見せたり、或は又、其頃頗る有名であつた兩國の三河屋を舞臺面に現はしたりして、巧みに當時の觀衆の嗜好に取入つたのが與つて力あつたのである。南北以後の作者らにこそ珍らしくもない趣向であるのだが、實際、此時代まで、芝居茶屋などの實景を見せて、芝居の鳴り物（しかも世話物にそぐはぬ時代なの）を、すぐ其儘に下座の音樂に利用するなど、いふ事は、殆ど會て無かつたのである。按ふに、かういふ機智的技巧が、其頃の五瓶の作の世話狂言をして成功せしめた原因であるといへる。本卷に併せ收めた「月



武藏野穂 狂言（小さいな半兵衛）もさうなら、「五大力 戀藏（小まん源吾兵衛）」も、「隅田春妓女容性（梅の由兵衛）」も、「富岡戀山開（二人新兵衛）」もさうである。  
 「青樓詞合鏡」は、同じ名題では其後只一度演ぜられた。年月役割り等を書きおろしのと對照して見ると、左の通りである。

年月座名

寛政九年二月、桐座

文化十四年四月、中村座

紀伊國屋文藏	三世 澤村宗十郎	三世 坂東三津五郎
佐野次郎左衛門	三世 坂東彦三郎	三世 尾上菊五郎
万字屋八ッ橋	三世 瀬川菊之丞	中山龜三郎
女房お賤	同	二世 中村大吉
唐物屋小兵衛	嵐 龍藏	五世 松本幸四郎
綠屋松藏	初世 市川男女藏	(此役無し)
伯父善右衛門	嵐 龍藏	市川友藏
万字屋高崎	松本よね三	山科甚吉
丁稚與茂太	中村傳九郎	坂東義助

手代善六	澤村東藏	松本小治郎
大木場の三婦	大谷友右衛門	市川森三郎
澤井數右衛門	松本國五郎	松本金平
越ヶ谷の伊平次	三世 坂東三津五郎	二世 關三十郎

本巻の底本としたのは、早稻田大學附屬圖書館所藏の、二冊物の寫本である。村田といふ人が、自分で謄寫して所藏して居た本らしい。遺憾ながら、参考にすべき同じ脚本を、他には一本も見當らなかつた。

( 渥美清太郎識 )



佐野は八つ橋  
紀文はお賤  
青樓詞合鏡

序幕  
吉原町の段

登場人物 萬字屋八つ橋、同高崎、綠屋女房、お時、萬字屋新造、豊久野、屋敷女中、清瀧。  
新造、難波津。新造、初梅。下女、お種。奴、傳助。萬屋鐵吉。幫間、彦八。同竹吉。遣り手、  
お杉。澤井數右衛門。半田稻荷、實は數右衛門下部、丹助。萬屋甚八。大木場の三婦。綠屋の  
松藏。唐物屋小兵衛。佐野次郎左衛門。紀伊國屋文藏。

第一番目大詰、打込み、呼び納まつて、少し間を置き、拵へ出來次第、小幕の中より  
呼び東西々々。傳馬町三丁目、紀伊國屋文藏様。急用々々。

トいつもの通り二三遍返して呼び、暫くあつて東の方七間より、紀伊國屋文藏、世話の拵へ、羽織にて  
雪駄を持って、木舞臺へ上り、幕の外より縫うて、見物のやうに花道へ入る。二番目の觸れ出て引込み、  
樂屋にて例の懸け聲をあげる。これにて幕開く。



造り物、三間の間二重舞臺、見附け障子。すべて芝居茶屋の見世先きの體にて、萬屋といふ提灯、懸け行燈。こゝに鐵吉、若い衆の形なま。下男二人、下女一人、皆々焼き飯料理拵へ忙がしき體。終始あほりの聲にて

鐵吉 サア、幕が詰まつた。棧敷へもお吸ひ物。土間へも鉢着をやらねばならぬぞ。

下男 コレ、それよりはお見世の方へお膳がゆくぞや。

同 焼き飯も早う拵へてやらねばならず、旦那がお留守ぢやというて、のらをかはくまいぞ。

下女 合點ぢやく。なんぼ旦那がお留守でも、番頭の甚八殿や、息子殿の藏さんがござるもの。

鐵吉 コリヤ。皆無駄をいはずと、方附けてしまはぬかいの。

皆々 イヤ、大かた方附けてしまつたぞ。

トわや、というて居る。奥より清瀧、其外、屋敷女中の仕出し、みな見物にて、手を拭き、出る。甚

八、世話の形なりにて皆に附いて出る。

甚八 もう、幕が明きませう。お越しなされませ。

清瀧 ほんに甚八殿。いつもながら、世話でござるの。さうして御亭主も留守なさうぢやが、先達て頼んでおいた服紗と扇を、どうぞ濱村屋に發向を書かせて下されや。

甚八 それは先き程、樂屋へ持たせて遣はしましたれば、追ッつけ書いて参ります。

女一 序でに、わたしが頼んだ、紀伊國屋へ楊枝差しを。

甚八 それもようござります。紀伊國屋は松花堂、濱村屋は東江流で、それでお客様から常任頼じやうちうみにまゐつて、書いてもらふのも氣の毒でござります。

清瀧 コレ、今度の幕は對面であらうの。

甚八 イヤ、まだ「草摺り」がござります。此幕に訥子が出ますれば、早う御覽なされませ。

女一 わたしらは瀧野屋、坂三津。早う見たいわいなア。

甚八 サア、早う……サア、定七、お連れ申せ。

下男 ハイ。サア、お出てなされませ。

ト皆々し、あつて、清瀧に皆々と下男附添ひ、向うへ入る。

甚八 皆棧敷や土間へ氣を附けてもらはうぞ。又、打出したらお膳が出よう。表二階も、奥二階も、方附けてしまつたがよい。いつもながら忙がしい事ではあるぞ。

ト此うち始終あほりの聲にて、向うより佐野次郎左衛門、好みの形なりにて、文藏と連れ立つて出て

文藏 これはしたり。思ひがけない、旦那、次郎左衛門様。今、芝居のうちで私しを呼びましたのは、



お前様でござりましたか。

次郎 サア、文藏。其方に急に逢はねばならぬ事があつて、傳馬町へ行たところが、此桐座見物と聞いて、すぐに爰へ来て、木戸へ頼んで呼び出してもらうた。

文藏 そんなら私しに。

次郎 ちつと急な事ゆゑ。

此うち始終あほりの聲。

文藏 爰は途中、芝居近所て騒がしい處なれば、

次郎 ア、どこぞ窃かな處へ。

文藏 幸ひ、此萬屋で。サア、お出てなされませ。

ト入替り、兩人本舞臺へ来る。

甚八 これは、紀文様。よう入らつしやりました。御見物にはちと遅うございませうが。

文藏 イヤ、く、據らない連れがあつて、桐座へは今朝から来て居るうち、ちつと此お方に窃かにお話し申したい事があるが、其八殿、奥座敷は明いてあるかな。

甚八 打出すと、お客が込みまするが、今の間は、奥など、二階など、お勝手にお出てなされませ。併

し芝居の囃子が聞えて、やかましくござりませう。

文藏 イヤ、ちつとの間、大事あるまい。モシ、若旦那。

次郎 奥へ行かうか。

甚八 ソレ、お茶、お菓盆を持つてゆけよ。

文藏 コレ、忙がしいのに、何もかまふまい。

ト次郎左衛門を連れて、文藏奥へ入る。向うより傳助、奴にて、手箱を持つて出て来て

傳助 葺屋町の萬屋はこれだナ。築地のお屋敷よりお手紙。ソレ。

ト出す。甚八開き見て

甚八 南無三。明日桐座の棧敷、しかも三軒ものと。(ト頭を掻き)イヤ、モウ、大入り、近頃の大繁昌で、棧敷が自由になりにくうござります。先きへ延されませうまいか。

傳助 イヤ、奥様の御見物なれば、明日の日は延されぬ。殊に、棧敷は西の下、樂屋より役者が通る處がお望みサ。

甚八 サア、さう自由には滅多になりにくうござりますれど、どうぞ働いて見ませうが、もし出来ませと、始まりは殊の外早うござりますれば、仰せ上げられて下さりませ。



傳助 評判がよいから、早い合點。棧敷が間違ふとわるいぞ。きつと働かつしやれ。お客は女中の大勢  
己もお供と出るで。え、かな。承知なりや、ドリヤ、お屋敷へ歸らうか。

トいひく向うへ入る。

下男 コレく、甚八さん。桐座の棧敷は十日も前にせにや出来ぬのに、今のやうにお前受合うて。

甚八 ぢやというて、お出入りのお屋敷、どうも日は延されまい。

下女 それに又、濱町の棧敷、下谷の御連中もいうて来てあるぞえ。

甚八 サア、芝居が込んで来ると、棧敷が自由にならず、お客をしくじらば、困つたものぢやなア。

トこなしあつて、道具廻る。

矢張り二重舞臺、奥座敷にて、文藏、蓑盆を控へ、次郎左衛門に様子聞いて居る體。鳴り物入りの所  
作の拍子にて、道具とまる。

文藏 御覽じませ。芝居の隣りといふものは、やかましくして、大事の話しは出来るものぢやござりませぬ。

次郎 イヤ、文藏。改めていふには及ばねど、其方の親の文右衛門は、おれが親人の家来て、命の恩を  
受けたとやら。其ゆかりで、此次郎左衛門を、其方の深切、段々の世話、忝いぞや。

文藏 ハテ、死なしやつたるわたしが親仁様は、あなたの親御に命の御恩を受けた御家来。すりや此文  
藏が爲にも、大切なお主筋。何の、あなた、おろそかに存じませう。今こそ御流浪のお身の上、

此頃までは、下野の舟橋の御家中、佐野次郎太夫様の御子息、同苗次郎左衛門様、殿様がお預  
りの、お家の重寶籠釣瓶の茶入れ、紛失したるお誤りにて、御勘當の御身。お國でいひ交してござ  
つた奥女中萩野殿、あなたの跡を慕うて此江戸へ。それで遁れぬ不義の科にて、重なる御難儀。

次郎 サア、其いひかはした萩野も、おれが爲に養子親を頼んで、今では吉原の萬字屋で、八つ橋とい  
ふ勤め奉公。

文藏 其貞節を承つて、及ばずながら此文藏めが、金輪際お世話申すも、旦那のゆかりゆゑ。

次郎 どうぞ、國で盗まれた、籠釣瓶の茶入れを詮議して、元の佐野次郎左衛門と歸參すれば、八つ橋  
を身請けして夫婦となり、今の憂さも昔語りに。イヤ、それよりは、文藏。今朝思ひがけなう國  
の母人より、内證にて飛脚、コレ、此狀が来たわいの。

ト狀を出して見せる。文藏取つて、とつくりと讀み

文藏 ムウ。こりやコレ、紛失の籠釣瓶の茶入れを、詮議し出して差上げなば、歸參も叶ひ、御勘當も免  
すとある、阿母様よりの御狀。



次郎 それを其方に見せうと、わざ／＼爰へ尋ねて来た。殊に、お家に御婚禮があれば 彼の籠釣瓶の茶入れを掣引き出と、殿様の仰せ。それゆゑ、先達で、其方に頼んでおいた通り、茶入れを急に詮議して差上げなば、歸参も叶ひ、勘當もゆるるわいの。

文藏 ムウ、成程。シテ、此様子を、八つ橋殿へお話しなされましたか。

次郎 それは如才はない。今朝吉原へ行って八つ橋に、ちよつと話をしたれば、早う文藏様に頼んで、茶入れを詮議してもらへと、可哀さうに彼れも此事で、大抵心遣ひして居る事ではない。

文藏 廓は人の入り込む處。勤めしてござるこそ幸ひ、もし茶入れの詮議の綱もと、八つ橋殿へはかねてとつくりと、いうておきました。

次郎 さうかして、随分客に心を附けるといふて居たが、どうぞ急に詮議のしやうがあらうかの。

文藏 日頃心懸けても、今に知れぬ籠釣瓶の茶入れ。

次郎 世に稀れなる名器。それを文藏、其方の働きて

文藏 サア、何でも火急に、尋ね出さるにやなりませぬ。

ト鳴り物になり、次郎左衛門こなしあつて

次郎 ヤア／＼、あの太鼓は。

文藏 ハア、桐座の芝居でござります。

次郎 ほんにさうぢや。慥かに「草摺引き」。

文藏 モシ。それでは茶入れの事を。

次郎 其方より、どうぞ急に、詮議し出してたもるまいか。

文藏 どうしたものであらうなア。

ト思案する。大ドロ／＼、タテのツケになる。

次郎 アレ／＼、芝居も打出し前ぢやさうな。

文藏 何にしても、爰では思案が出来ませぬ。お前は、マア／＼、お先きへお歸りなされませ。

次郎 イヤ／＼。もう暮れるに間もなければ、おりや爰からすぐに吉原へ行って、八つ橋に、其方に逢うた様子をいはねばならぬ。コレ、必ず茶入れの事を。

文藏 詮議に如才はござりませぬ。それに附けても、八つ橋殿に私しも

次郎 逢ひに行きやるか。……ほんに、其方の相方高崎が、どうぞ連れて来てくれいと頼んで居たが、なんと今から、猪牙で一所に行かうか。

文藏 イヤ、マア、あなたはお先きへ。私しはまだ用事がござりますれば、見合はして、あとから参り



ませう

次郎 それなら先きへ行て、縁屋に待つて居るほどに、文藏、早う出ておぢや。

文藏 サア、ようござります。

次郎 コレ、肝心の茶入れの事を頼むぞや。八つ橋も其様子を、イヤ、高崎にも其方がおぢやるとい  
ておくぞや。

文藏 ハテ、どうともなされませ。

次郎 よしく。……ドリヤ、吉原へ行かうか。

ト違寄せになり、次郎左衛門こなしあつて奥へ入る。文藏あと見送つて

文藏 まことに、泰平の御代の有り難さ。武家に育つて茶の湯、俳諧、色事より外……ほんに、佐野次  
郎左衛門といへば、どうか男達か、立派な御用達であらうと聞ゆれど、女にまさつた和らかなお  
生れ付き。今の御流浪、おいとしや。(ト始終違寄せ) 時に、どうぞ籠釣瓶の茶入れを詮議し出し  
て、元のお身に、と口ではいへど、世に稀れな船橋家の御重寶、たとへ在り所が知れても、迂濶  
には取返されぬ、若旦那の今のお身の上。さすれば金づく。買ひ戻すにも大名道具。よもや端た  
金では。……こりや、金の都合を、急にせねばならぬか。(トこれをキツカケに、打出しの太鼓に

なる)アレ、もう芝居は打出した。(ト案じながら糞をつぎ)これまでの物入り、内の女房の手前、偏  
屈な伯父者人といひ、商賣の勘定くるめて、旦那へ貢ぎ。(トいひく糞を吸ひつけ)また其外に大  
枚の……ハテ、ムウ。

ト煙りを吹いて、思ひ入れ。これにて道具ぶんどす。

造り物、五十間、大門になり、清掻にて道具とまる。

ト女郎買ひの仕出し、向うより出て、段々大門口へ入る。いつもの懸け聲の駕一挺出て、大門のこなた  
にておろし

駕昇 サア、旦那、参じました。

ト淨井敷右衛門、羽織、侍ひにて、駕より出て

敷右 中々早かつたわい。

駕昇 急げとあつたゆゑ、駈けました。また明朝お歸りを待ちまする。

敷右 いかにも歸りを待て。大儀々々。

駕昇 ハイ。

ト駕昇き引返して、向うへ入る。敷右衛門あたりを見て



數右 駕昇きが急いだゆゑ、見世の出るのにはまだ早からう。暫くこれにて、見合せずばなるまい。

ト片脇の茶屋の床几に腰をかける。矢張り清播にて、向うより丹助、茜木綿の頭巾、同じ行衣を着、懐  
を持ち、鈴を振り、半田稻荷の拵へよろしく

丹助 葛西金町半田稻荷へ代参り。抱瘡も軽い。麻疹も軽い。家内安全、息災延命。

トいひ、出て来る。仕出し二三人あとから附いて出て

□ コリヤ、半田稻荷。夜まで其やうに駈け歩いて居たか。

△ ハテ、達者なものぢや。

丹助 斯う達者でなけりやア、葛西金町へ代参り、晝は江戸ぢうの屋敷町を歩き、今日は箕輪、金杉邊  
まで日を暮らして、歸りがけに、此吉原へ晝の儲けを河岸切り見世、九郎助稻荷の近所へ行きた  
い。二朱も買はれぬ、四六も買はれぬ。お客はよければ花魁をしめる。我等もちツくり、其氣で  
錢が無い。

ト半田稻荷の通りにクリ、廻る。

會々 ハ、ハ、ハ。おつな願人であるぞ。

トいひ、皆々大門に入る。丹助浮かれて居る。此うち數右衛門そろ、側へ行て、丹助が顔をつく

づく覗き見て

數右 ヤア、其方は家來丹助ではないか。

ト丹助恠りして

丹助 イヤ、丹助ではない、半田稻荷。(ト數右衛門を見て) ヤア、お前は澤井數右衛門様。思ひがけな  
い。どうしてこれへ。

數右 先日より殿の御川に付き、當所のお屋敷へ参つたを幸ひ、丹助、其方に逢はうと、方々を尋ねさ  
せたに、知れぬも道理、今の商賣。以前の事は

丹助 サア、以前はあなたの御家來なれど、彼のお頼みの一儀ゆゑ、下野を立退き、今此江戸へ來て、  
様々の憂き渡世。

數右 成程、身共がいひつけて、佐野次郎左衛門が預り居る、彼のお家の重寶

丹助 籠釣瓶の茶入れを、首尾よう盗んで

數右 コリヤ。(ト合ひ方變り、兩人こなしあつて) 其大切の茶入れを、預け置きし其方なれば、何卒尋ね  
逢はうと思つて。

丹助 氣遣ひはござりませぬ。なんぼ斯う落ちぶれても。お前に頼まれた大切な代物は、肌身離さず、



矢ッ張り持つてをりまする。

數右 出かしたく。流石は身共が以前の家來ほどある。其方が其心底を見届けたゆゑにこそ、盗ませた籠釣瓶の茶入れ、紛失させたる其科にて、戀の意趣ある佐野次郎左衛門めも、親の勘當、浪人致して、今此江戸に流浪のよし。時に身共が惚れて居る、奥女中萩野も、此吉原で角町の万字屋にて、八つ橋といふ女郎サ。

丹助 エ、聞えた。それでお前も、其やうに。ハテ、執心な。

數右 忍んで通ひ、様子をどくと見届けたけれど、まだ八つ橋には逢はぬ。所詮、逢うてからが、得心はせまいが、女郎になつたこそ幸ひ、其方に逢うて右の茶入れを受取り、當所仲通りの道具屋、唐物屋小兵衛といふ者を頼み、賣り拂ひ、其金にて、八つ橋が身受けの相談。

丹助 そりやよい都合ぢやが、茶入れをお前に渡せば、此丹助にも

數右 以前のよしみ、捨て、は置かぬ。幸ひ、まだ外にいひ聞かす事もあれば、身共が行く茶屋、伏見町まで、何と、歩まんか。

丹助 成程、参りませうが、おれが此形で、連れ立つては異なるもの。お前はお先きへ。

數右 然らば丹助。

丹助 數右衛門様。

ト又清掻になり、數右衛門こなしあつて、ツイと大門へ入る。丹助も思ひ入れあつて

葛西金町半田稻荷へ代参り。家内安全の祈禱。疱瘡も軽い。癩疹も軽い。

ト鈴を振つて、クル／＼廻つて、大門へ入る。これにて返し、本舞臺かはる。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、見附け塗り骨障子、一面に青すだれを掛け、二重舞臺蹴込み、縁付き、下家へ人の出入りあり。よき所にかどり屋といふ懸け行燈。すべて仲の町茶屋の景色。矢張り清掻にて、道具とまる。  
ト向うより下男、高崎の紋附いたる箱提灯ともし出る。あとより高崎、女郎の拵へ、新造難波津、かむる筆彌、附添ひ出る。次ぎに、同じく下男、菊蝶の箱提灯にて、八つ橋、女郎の拵へ、新造初梅、同豊久野、かむる文字野、同久野、附添ひ、皆々花やかに出て、本舞臺へ来る。内より縁屋の女房お時、太鼓持彦八、同升吉、一しよに出て

とき これはく、おいらんお早うござりました。

升吉 彼の萬字屋に名にしおふ八つ橋様

彦八 今を盛りの花のいてたち。サア／＼、これへ。

とき 申し、お二人さん。



高崎 八つ橋さん。行きやんせうか。

八橋 勝手にしなんし。(トつんとする思ひ入れ)。

初梅 おいらん、マア、ようござんすわいなア。

とき 何か様子は知らねど、マア、此方へ。

升彦 八つ橋様。高崎様。サア、

ト八つ橋こなしあつて、二重舞臺へ腰掛ける。高崎も右の通り、皆々並びよく、下男兩方へ箱提灯を直す。此うち始終清極にて、皆々腰を掛ける。

とき おいらん。常に似合はぬ、どういふ様子で。

升彦 モシ、高崎さん。

高崎 わつちやアかまひいせんが、何だか八つ橋さんが、焦れなんすよ。

八橋 アイ。御盛ごまかんの高崎さん。なんぼ突出しの此八つ橋でも、あんまりしたいやうに、踏み附けてく

んなんすよ。

高崎 何をわつちが踏み附けやんしたえ。

八橋 そりや覚えがあらう。お前の心に問うてくんなんし。

高崎 イ、エ、何も覚えはござんせぬ。お前さういひなさんすは、大かた何ぞ聞き間違ひておざんせう。

八橋 ほんに、聞き間違ひもよいわいなア。

高崎 イ、エ、覚えはない。知りいせん。コレ、八つ橋さん。お前と次郎さんの仲は、誰知らぬ者は無いぞえ。それにマア、疑ぐりなんして、わつちに氣を廻して。

八橋 廻すとは。若イ衆ぢやあるまいし。オ、ヤ、馬鹿らしい。

高崎 馬鹿にかまうてくんなんすな。

八橋 イ、ヤ、わつちやアカまひいすわいなア。

高崎 かまひたきや、釜出しや。

八橋 釜は西へ飛んで行た。

高崎 知つたかよウ。

ト兩人せり合ふ。お時、兩人の仲へ入り

とき これはしたり、おいらん。どうでござりますぞいなア。

彦八 モシ。何事のおはしますか。益やくたい體もない。八つ橋様も、高崎様も、同じ店で、常から同胞おやうだいのやうに睡すいじいぢやござりませぬか。







トしつほりとなる。次郎左衛門も思ひ入れあつて

次郎 イヤ、おれよりは其方も勤めの……ハテ、愚痴な。そんな事を思つては、一日も此里には暮らされぬ。何事も今暫く。

八橋 歸參して國へ歸れば

次郎 コレ、吉原詞は止めにならぬぞ。

八橋 そりやよう承知してをりんす。

次郎 アレ、矢ッ張りをりんすとは。

八橋 イヤ、わつちよりお前が、習はうよりは慣れろとやらて

次郎 大分通になつたらうがの。コリヤ、おいらんめ。(ト引寄せ)

八橋 そんなら、いひなんすないなア。

次郎 ハテ、爰に居る間の楽しみさ。

八橋 おつな事を。

ト兩人こなしあつて寄添ふ。此真中へ數右衛門踏み越える。

オ、怖……誰ぢや。

次郎 めつさうな。人の真中を踏み越えて。

數右 何だ、めつさうな。何がめつさうだ。コリヤ、爰は廓の往來。心まかせに歩むが、どうぢや。

次郎 でも、おれが足を踏みにじつた。

數右 ヤイ〜。踏みにじつたら、何とする。邪魔になりや用捨は無いぞ。此往還に蚊蜻蛉を見るやうな野郎が目にか、らうか。往來の道を塞ぐ馬鹿者め。それに何だ。却つて物言ひ附けるのか。面白い。こりや一番相手にならうわい。

ト仰山にいふ。此うち八つ橋こなしあつて、次郎左衛門を連れ、逃げようとするを、數右衛門引ッ捕へ待て。うぬらは身共がいふ事を相手にならず、何處へうせるのだ。憎い奴だ。

ト次郎左衛門を打つ。八つ橋留めるを突き通す。此うち丹助、通りかゝりのやうにして

丹助 マア〜、待たつしやりませ〜。こりやお二人を、どうするのだ〜。

トわざと次郎左衛門を留めて打たす。此うち向うより縁屋松藏、茶屋の亭主の形、浴衣を持って出て來る。

數右 さては汝も此者の同類ぢやナ。

丹助 イヤ、同類ではない、道通り。たしかに、萬字屋のおいらん、連れは客人と見えた。それで挨拶







と薪ざつぼうにてさんどくに打つ。丹助ひいやりとする。次郎左衛門、八つ橋喜ぶ。松藏こなしあつて  
コリヤ、半田稻荷、汝も先刻てまへまじきにから手傳うたが、此騙りと近附きか。

丹助 どうして近附き。イヤ、つひぞ見た事も無い人。わしや毎日此五丁町を修行に歩くゆゑ、あのお  
いらんに怪我でもあつてはわるいと存じて、それで今のは、取りさへてをりました。ナア、お一人。  
松藏 さうありさうなものぢや。此座を修行に廻れば、處の者は皆、いはうなら、マア旦那。商人なら  
得意ぢや。

丹助 さやうともく、お得意同然。

松藏 お出入りの旦那が言ひ附けた。其騙りめを、此薪ざつぼうで打ちのめせ。

丹助 エ、い、い。

松藏 ハチ、旦那のいひつけた。早うぶて。

丹助 ぢやというて、それが。

松藏 コリヤ、減多に骨は盗まぬ、祝儀をやるワ。

丹助 祝儀とあれば、打つても見るものぢや。

數右 ヤイ、丹助、イヤ、半田稻荷。うぬ、身共をぶたうとは、コリヤ、慮外すると免さぬぞ。

丹助 コレ、其氣遣ひがわるい。コレ、お前は丸腰、ナ、たか、町人、騙りぢやないか。サア、ナア、

侍ひらしい事いうて、強い顔すると、却つて、イヤサ、今おれがぶちのめすほどに。

ト數右衛門をこかし、いろく打つ眞似をする。

次郎 コレ、それではどうやらこたへぬやうぢや。ノウ、松藏。

松藏 成程、手ぬるい半田稻荷。とてもぶつなら、斯う。

ト薪ざつぼうを取り、丹助を打つ。

丹助 アイタ、い、い。そんなら、斯うぢやな。

ト數右衛門をほんに打つ。

數右 コリヤ、さうでは無いわい。

松藏 イヤ、斯うぢや。

ト丹助を打つ。又數右衛門を打ちのめす。數右衛門、丹助こなしあつて、向うへ逃げて入る。

ハ、ハ、ハ、ハチ、馬鹿な奴ではある。

八橋 申し。今のは國での朋輩、澤井數右衛門であらうがな。

次郎 サア、頼かむりて顔は隠して居たれど、さうと思つたゆゑ、それわざと控へて居たが、松藏が



仕返し心地よき。

松藏 イヤ、これも御懇ろして下さります、紀文様のお庇で、お前がた、今日二人の事を、くれぐれも。サア強いをいがめ、弱いを肩持つ吉原氣質。なんぼ茶屋でも、此の仲の町縁屋松藏。人さんに頼まれたら、金輪際、まさかの時には、……ハテ、これも何の役に立たぬ味噌。……ほんに味噌吸ひ物で一つ上げませう。モシ、おいらん、今夜のお客はあの唐小様、氣障なお客ぢや。ナ、ソレ。……せくほど間夫が可愛うて、都合よう……ドレ、お酒でもあげませうか。

ト唄になり、松藏思ひ入れあつて、奥へ入る。兩人跡見送つて

八橋 ほんにマア、あの松藏さんも、男氣に二人が事を。

次郎 サア、それも文藏が頼みやつたゆゑ。

八橋 それはさうと、申し、次郎さん、今の仕儀、お前はどこも痛みはせぬかえ。

次郎 イヤ、さして痛みはせぬが、どうしてもぶちをつたによつて、それでどうやら、此脊骨が。

八橋 オ、めつさうな。

トいひ、介抱して、擦つてやる。又清掻になり、向うより唐物屋小兵衛、着附け、羽織、町人の拵へにて、出て来て、本舞臺へ来て、これを見て居る。兩人は知らずに

次郎 コレ、八つ橋、もうよいわいの。

八橋 エ、黙つて居なんしいなア。

ト矢張り深切に揉んだり擦つたりする。此時小兵衛ムツとして、八つ橋を引き分け

小兵 おいらん。おれも擦つてもらはうか。

八橋 ヤア、お前は唐小さん。いつの間に。

小兵 今の間に。コレ……八つ橋。ありや汝の客人か。

八橋 エ、。

小兵 これは綺麗な色男。きつう親しうしやるが、其方の客人かといふ事ト。

八橋 イ、エイナア、此お方は、アノ、何ぢやわいなア。オ、ソレ、誰ぢややら、知らぬお人。

小兵 知らぬ人を、又何で、撫てたり擦つたり。

八橋 サア、それは、今の、オ、さすりさんぢやによつて。

小兵 ムウ。シテ、わが身が撫てたり擦つたり、そりやどうやら方角が違つたやうな事ぢやの。ハ、ハ、

ハ、。そんなら汝は、コレ、按摩取りか。

次郎 エ。



八橋 ア、コレ。

トこなしある。次郎左衛門呑込み

次郎 ハイ。……さやうぢやさうにござります。

小兵 ムウ。按摩とあれば幸ひ、おれもいかう肩が張つてある。爰で一つしてもらはうかい。

次郎 アノ、按摩を。(ト八つ橋と顔見合せ、こなしあつて)どうなりとも致しませう。

小兵 そんなら、八つ橋も、(ト八つ橋の手を取つて、二重舞臺へ上り)サア、按摩。療治をしてもらはう。

次郎 さやうなら、お肩を揉みませうな。

ト二重舞臺へ上り、後ろへ廻り肩をよう揉めぬこなし。

小兵 ア、コレ〜。もつとこたへるやうに、きつうグツ〜とやつてもらはう。

次郎 ハイ〜。斯うてござりまするか。

トこなしある。八つ橋もこなしあつて

八橋 申し、唐からこ小さんえ。

小兵 ヤ。

八橋 お前はアノ、仲通りの道具屋さんぢやな。

小兵 道具屋ぢやが、何とした。

八橋 サア、わたしは茶が稽古したいによつて、あの茶入れのやうな物が欲しいわいなア。

小兵 それでおれをねだるのか。

八橋 イ、エ、さうぢやなければ、ちつと急になア。

ト次郎左衛門へこなしある。

小兵 商賣で取扱ふ茶道具、入用なら何なりと差上げようが、八つ橋、此小兵衛がねだつた事はどうだ。

(ト八つ橋が手をヤツと取つて)これまで度々たびたび通うても、今夜は障りがある、イヤ、精進ぢやの、心持ちがわるいのと、兎角おれに逢はぬやうにするも、とつくりと聞き合せたところが、佐野の次郎左衛門といふ間夫まぶがあるげな。こいつ待ひの浪人で、殊の外貧窮と聞いたが、さうか。コレ、さうであらうがの。そんな者に心中立て、は、身が詰らぬぞや。ふつつりと思ひ切つて、此小兵衛に乗り替へぬか。おそらく吉原で、人も知つた唐物屋小兵衛。唐小からこと言や、大門も打たすといふ大盡ぢやが。

ト此せりふのうち、次郎左衛門もムツとして、小兵衛が頭をかぶ殴る真似をしたり、いろ〜とこなしある  
八橋 ほんに、お前の是までの深切、思ひ廻せば、わつちも、早う此麻が出たいと思つて居れば、爲に



ならぬ人の事は、ふツつりと切れてしまつて、お前が世話をしてくれなさんすれば、どうとも。

トこれを聞いて、次郎左衛門ムツト腹を立てるを八つ橋

ちやつと、サア、此やうな利いた風な、(ト小兵衛を教へ)サア、此やうな、イヤ、あのやうな侍ひの利いた風は、あやなしてなア……サ、切れてしまふ氣ぢやわいなア。

ト次郎左衛門に吞みこます。次郎左衛門うなづく。

小兵 汝がさう心が走まりさへすれば、おれが世話をする氣ぢや。なんと、道具屋のおかみさんになつてくれるか。どうぢや。

ト八つ橋の手を取つて引き寄せる。次郎左衛門、小兵衛の肩をつかまへ後ろへ引きこかす。

こりや、どうする。

次郎 イヤ、あんまり肩癖が凝つてあるゆゑ、擦りおろすのでござります。

小兵 エ、仰山な。もつと靜かにやつてもらはう。

次郎 ハイ。 (ト揉みかける)。

小兵 コレサ、八つ橋。いひかはした奴を思ひ切れば、金輪際世話してやるが、今いうたに違ひはないか。

八橋 アイ。通なお前に、馬鹿らしい。なんの嘘をいはうぞいなア。

小兵 エ、有り難い。

ト八つ橋に抱き附かうとする。次郎左衛門頭をピツシヤと叩く。小兵奮然して

アイタ、い、い、こりやどうするのぢやぞいやい。

次郎 ハテ、お前は頭痛はしや致しませぬか。

小兵 エ、誰が頭を叩けというたぞい。大事の髪を、コリヤ、らりにしをつた。

三姉 大分 町も賑やかなわい。何でも色の世界ぢや。時に、娘めは何處に居るかしらぬ。  
ト眩きながら、又擦らして居る處へ、向うより大木場の三姉、随分しゆだ世話親仁にて、出て来て

トいひひく本舞臺へ来て、八つ橋を見て

オ、娘。爰に居たか。

八橋 ヤア、父さん。いろくの處まで尋ね廻つて、よう來なんしたなア。

三姉 尋ねいで。用がありやこそ尋ね廻つて來るのぢや。われが親方の角町へ行きや、舟の町を張つて居ると聞いた。それでわざと尋ねて來た。コリヤ、ちよつと來い。 (ト八つ橋を前へ連れて行って) 此中もいいておいた、金は調うたか。大かた出來たであらうな。サア、其金を、早うたも。



ト此うち小兵衛實のみながら、肩を揉ませて居る。次郎左衛門は三姉に顔を隠して揉んで居る。

八橋 お前が其やうにいひなさんすによつて、どうぞ金を拵へておかうと思つても、どうも都合がわるさに

三姉 金が出来ぬか。

八橋 サア、又此間にどうぞして。

三姉 イヤ、娘。わりや金がある苦ぢやがな。

八橋 お前も氣のわるい。なんのわつちが。

三姉 イ、ヤ、ある〜。きつとある。

八橋 そりや、どうしてイナア。

三姉 なぜ切れてしまはぬ。

八橋 エ、。

三姉 イヤサ、汝は自體、死んだ妻が連れ子で、おれが爲には繼子。まだ越ヶ谷に兄があるげな。こりや打ツちやつて汝が身の上、縁があつて下野の國、舟橋のお家へ腰元奉公。屋敷勤めの其内に、同家中の佐野次郎左衛門とやらといひかはして、剩へ其男めは、屋敷をしくじり、勘當うけて、

二人づれて此江戸へ来て、身がつまらぬゆゑ、どうぞ勤め奉公にやつてくれいと、此親への頼み。金を取つて、親判するわ、持つて来いと、此角町の萬字屋へ、突出しの勤め奉公。相應に繁昌して、おいらん株になつて居るも、これ皆親の庇ぢやぞよ。それに、コレ〜、斯う着物を上下引ツ重ね、酒は飲み次第、旨い物は食ひ次第、男は抱いて麻次第になるも、これ皆親の庇ぢやぞよ。殊に、國から腐りついて居る、次郎左衛門めを思ひ切れば、身請けの大盡があるとやら。すりや、出世して、どんな榮耀もし次第。これ皆親の庇ぢやぞよ。其恩を思つて、なぜ身請けしられて、此親へ存分に、養ひ金はおこさぬぞ。

八橋 サ、其やうにいうてくれるお客人もあれど、さうしては、アノ……イヤ、アノ、オ、一生の方付き、相性の八卦を見てもらうたら、其方へ行くと、親も子も崇るとやら。ひよつと父さん、お前に崇るやうなことがあつては、どうもならぬによつて、それでわたしが

ト愚圖々々いふを打消して

三姉 ぬかすなく。たとへ崇らうが、死なうが、金になるほど結構な事があらうか。此方親子に崇る貧乏神といふは、いひかはした佐野次郎左衛門が事ぢやわやい。

八橋 ア、コレ。そんな事を人中で、大きな聲でいふものかいなア。



三婦 いうたら、何ぢや。オ、大きな聲でいふのが、どうぢやい。イヤ、人の聴くやうにいふのぢやわい。

八橋 そりやお前、あんまりな。

三婦 そんなら、汝、佐野めと切れるか。

八橋 サア、それはな。

三婦 切れにや、おれに、金寄越すか。

九橋 サア、

三婦 切れるか。

八橋 サア、

三婦 金寄越すか。

兩人 サア、

三婦 エ、面倒な、女郎め。

ト踏まうとする。小兵衛つゝと行つて、三婦を留める

小兵 コレ、親仁。汝は此八つ橋が親か。

三婦 大木場の三婦といふ、彼れが親ぢやが、何としました。シテ、こなさんは。

小兵 おりや八つ橋が客ぢや。

三婦 エ、……さては娘が身請けのお大盡か。これは、マア、イヤ、申し、お客様。此親が腹が立つが無理か、尤もか、聞かつしやれて下さりませ。いひかはして居る次郎左衛門といふは、宿無しの人浪人。それにぞつこん惚れぬいて、離れくさらぬゆゑ、よいお客がござつても嫌ひをるゆゑ、今では客なしの貧窮、親には金を寄越さず、借銭は次第、親方は小言八百。それでわしが腹が立つまいものか。ぢやによつて、彼奴が土性骨を踏み直してやります。

ト踏まうとする。

小兵 コレサ。それは聞えたが、今夜はおれが約束なれば、マア女房。なんぼ親の威光でも、減多に自由にはなるまい。

三婦 成程、尤もぢや。理窟ぢや。お前が彼れを女房ぢやとあればおれは舅。其舅に、こりや、初めての御挨拶が、こりや、有りさうな處ぢや。

小兵 それも承知、(ト紙入れより小判一兩出し、三婦にやる)イヤ、初めて逢うた舅殿。これは些少ながら。

三婦 これは、マア、御きんたう。イヤ、モウ、畢竟、今のやうに叱るのも、實は彼れが不便さ。コ



リヤコリヤ、娘よ、あなたを随分大事にせいよ。必ず、次郎のならず者の事は思ひ切れよ。……  
：ほんに結構なお客、イヤ、掣様ちや。コレ、大事にしや。ヤレ、嬉しや、思ひが  
けない此お金を貰うて、歸りはすぐに山鯨、獨りかもしか飲み明し、顔は紅葉や牡丹汁、奢り次  
第にして、いとお客……おさらば。

ト清掻になり、三婦こなしあつて向うへ走り入る。小兵衛こなしあつて

小兵 なんと、八つ橋、見たか。金の威光といふものは、結構なものぢやないか。今、親仁がいうた、  
天竺浪人と引ッ附いて居ては、一生笑ひ顔を見る事はなるまい。とつくりと合點して、おれがい  
ふ通りに承知したがよからう。

ト此うち向うより、男一人走り出て

男 モシ、あなたは中通りの道具屋、唐物屋小兵衛様ではござりませぬか。

小兵 アイ。小兵衛はおれぢやが、何ぢや。

男 どなたやら、あなたにお目にかゝりたいというて、待つて居ります。

小兵 そりや、どこから。

男 伏見町の丸屋に。

小兵 ムウ……成程、大かた茶入れの、イヤ、茶屋の丸屋、知つて居る。八つ橋、おりやちよつと  
伏見町へ行くほどに、必ずともに何處へも行かずと爰に……コレ、按摩。汝にちつとの間預  
ける。なんと、唐物屋小兵衛は、通な者であらうが。

男 サア、お出てなされませ。

小兵 エ、忙しない。ドレ、行つて來うか。

ト唄になり、小兵衛、男を連れて向うへ入る。あと合ひ方になり、次郎左衛門、八つ橋こなしあつて

次郎 八つ橋。

八橋 次郎さん。

次郎 今のやうに親仁が腹立ち、無理ではなし。

八橋 お前の手前も恥かしい。あのやうな悪黨な父さんゆゑ、ひよつと愛想が盡きようかと、思へば苦  
勞になるわいなア。

次郎 ナニガ、不自由な勘當の身の上。なんぼ其方が思つても、親甲斐といひ、金づくても、も  
し別れねばならぬやうにならうかと思へば、おりやそれが苦勞な。

八橋 氣遣ひして下さすな。たとへどんな事があつても、わしや歸りませぬ。殊に、越ヶ谷に居やし



やんす實の兄さんにも、今の身の上は、文ふみで知らしてやつたれば、おツつけ二人ふたりが思ふ通りに。  
モウく、なんにも案じずと、幸ひ小兵衛が歸らぬうち、ちよつと。

ト嘆く。

次郎 ハテ、とんだ事を。

八橋 イ、エイナア。ツイ、話す事があるわいなア。

次郎 大事ないか。

八橋 なんの。マア、來なんし。

ト手を取つて二重舞臺へ上り、簾おろす。合ひ方。向うより丹助うるく出て来て、そこらを探れ廻り  
丹助 たしか爰らの縁の下に、入れておいたといはれたが。

ト尋れ廻り、ふと簾の側へ行て、聞き耳して、恠り、

ヤアく、何奴どいつだ。

ト眩きながら、思ひ入れあつて

ありや慥かに八つ橋めぢやが、相手はてつきり次郎左衛門め。數右衛門様のいひつけて、彼奴おいつを  
爰で締めてやらうと思つたに、おのれ。

ト此うち内に

次郎 コレ、もう簾をあげようぢやないか。

トこれにて丹助縁の下へ入る。見物の方へ尻を出して隠れて居る。簾上がる。

八橋 申し、ては高崎さんは、紀文さんに違ひはないかえ。

次郎 ハテ、疑ひ深い。文藏が男氣を見込んで、高崎が頼み。おれが取持つてやらうと思へど、兎角文  
藏は色にはあまり凝らぬ性しやうと見えるが、こりや皆もよう知つて居るわいのう。

八橋 さうとは知らず、最前も、高崎さんに……面目ない。どうせうのう。

トこなし。奥より高崎、お時、初梅、雞波津、下女お種、かむろ、皆々來て

初梅 おいらん、まだ爰にかいなア。

とき 高崎さんに付き合つて、揚屋町ひやまぢで暇取つたゆゑ、大方お前は内へと思つたが、唐小さんは見えた  
かえ。

八橋 アイ。今、伏見町へ行たわいなア。

と此うち高崎、次郎左衛門を見て

高崎 そこに居なさんすは、次郎さんぢやないかいなア。申し、先刻さつごも八つ橋さんが、わつちをな。



八橋 コレ、申し、高崎さん。もういうてくれなんすな。今、次郎さんに様子を聞いた。お前を疑つた  
わつちが誤り。これぢやノ。(ト拜む)。

高崎 八つ橋さん。そんなら疑ひは晴れたかえ。

八橋 晴れた段か。今までよりは猶仲よう、ほんまの同胞分きやうだいになつてくれなんし。

高崎 そりやわつちが方ほうから頼むのぢやわいなア。

八橋 アイ。同胞分きやうだいの固めに、幸ひ爰て、起證を書いてあげやんせう。

ト硯箱を取つて来る。

高崎 イエ〜。同胞分きやうだいの起證なら、わつちに先きへ書かせなんし。

八橋 ハテ、わたしから先きへ書いてあげるわいなア。

高崎 イエ〜、わたしが方ほうから。

ト兩人せり合ふを

次郎 コレ、二人ふたりともに起證を書くのを、何を其やうにせり合ふ事がある。

ト中へ入る拍子に、硯箱を打ち返す。

皆々 ソレ〜、こぼれたわいなア。

禿 ほんに、爰らが墨だらけになつた。

ト襦をからげる。八つ橋、高崎、紙にて拭く。

初梅 次郎さんが邪魔しなさんすによつて、

離波 お前の手が、ソレ、墨だらけになつたわいなア。

とき モシ、水を掛けてあげませう。これへ。

次郎 オイ〜。

ト縁端へ出て、手桶の側へ行つて手を洗ふ。お時、水を掛ける。黒い水、丹助の尻へかゝる。尻をヒコ

ヒコさせる。此うち八つ橋、高崎起證を書きしまひ

高崎 エ、小刀か針が欲しいなア。

八橋 ほんに、何ぞ切れ物は無いかいなア。

次郎 おれが脇差しがそこらにあらう。其小柄で

皆々 アイ〜。

トそこら尋ね廻り、懐剣を持て来て

脇差しは見えぬが、こんな物が。



次郎 こりや懐劍。マアノ、これにて同胞分のしるしに。

八橋 血を絞つて此起證を、

高崎 互ひに取替へるわいなア。

ト八つ橋、懐劍を取て

八橋 わしから先きへ。

ト指を切り、起證に血を附ける。

高崎 サア、わしも此やうに。

ト同じく指を切つて

オ、たと血が出たわいなア。

皆々 高崎さん、痛うは無いかえ。

高崎 イエ。

次郎 ソレ。マア、手を洗うたがよい。(ト懐劍を方附ける)。

高崎 アイ。

ト手桶の側へ行つて、手を洗ふ。又丹助が尻へ赤い水がひける。以前の通り、尻をロココとする。

八橋 これからは、高崎さん。

高崎 八つ橋さん。

二人 仲ようぢやえ。

次郎 マア、これで丸う納まつた。

高崎 八つ橋さん、唐小さんが歸らぬうち、次郎さんをちつとのうち、二階へ。

次郎 さうぢや。いつもの通りに、新造買ひになつて行かう。

といひ、二重舞臺より下りしなに、丹助が尻を踏まへる。

丹助 アイタ、。

ト皆々悔りして

皆々 誰ぢややら、縁の下に、居るさうなわいなア。

ト下を覗く。丹助尻から段々出て、氣味わるさうに、手拭ひにて尻を拭く。

ヤア、其方は半田稻荷、どうして此下に。

丹助 おきやアがれ、べら棒め。おれが此下に隠れて、様子を聞いて居る内に、氣味のわるい、大事のお情け所をよう三色に色分けしをつた。



ト吹き／＼、矢張り尻を拭いて居る。皆々笑ふ。

これといふも、思へば彼奴から。

ト次郎左衛門を捕へにかゝる。高崎皆々、次郎左衛門、入つ橋を圍ひ、子をとり／＼になる。

ヤア、こりや何ぢや。

ト烏さしの合ひ方になり、仕組みよろしく

皆々 コレ、半田稻荷。

高崎 斯うすれば、お二人さんは

皆々 息災延命。

丹助 イヤ、汝を。

皆々 疱瘡も軽い。癩疹も軽い。

ト合ひ方に合せ、逃げ廻る。丹助おはへ廻るうち、入つ橋、次郎左衛門を連れ、暖簾口へ入る。あとに皆々よろしくあつて、逃げて入る。向うより數右衛門走り出て、縁の下より最前入れて置いた大小を取出し、しんと腰に差して

數右 唐物屋小兵衛を頼んだれば、茶入れの捌け口はあれてよいが、丹助にいひつけた、次郎左衛門め

が邪魔になれば、いつそ。

ト尻引ツからげ、身拵へする。此うち奥より松藏出かけ、見て居る。數右衛門こなしあつて、奥へ行かうとする。松藏つか／＼と出て、突き廻し

松藏 待つた。そちや最前の

數右 騙りて無いぞ。コリヤ、見い。兩腰を挟めば、まことの侍ひ。身は武士だ。

松藏 其武士が、何て此方の内を窺うて

數右 ヤ。

松藏 どうでも、次郎左衛門様が邪魔になるか。

數右 なんと。

松藏 色男を拒む侍ひ。いつも有る格。テモ久しい脚色。

數右 イヤ、ところを新らしう、最前の意趣といひ、佐野が肩持つ汝を。

トちよつとかゝるを、よろしく引き廻して

松藏 こりやちつと時代過ぎる。よしにさんせ。

數右 イヤサ、汝を。



ト又かゝる。

松藏 何を。

トこれより騒ぎにて、兩人よろしくタテあつて、敷右衛門を押へつけ町人でこそあれ、縁屋の松藏。こんな事では、滅多にゆかぬ。敷右 ところを身共が。

ト又かゝる。奥より丹助出て、松藏にかゝる。三人立廻りあつて、ト松藏、兩人を繩にてグル／＼巻きにする。兩人其形にてころげる。

松藏 こいつは面白いわえ。

トよろしく ひやうし 幕。

造り物、平舞臺、見附け奥への廊下、兩方奥深に女郎の座敷、間毎に障子はめ、よき處に大入方吊し、平舞臺橋が、リの方に、二階上り口、切り穴にてぐるり高欄。下座の方、遣り手部屋。爰に遣り手お杉、火鉢に薬罐を掛け、養花を拵へて居る。側に彦八、升吉、最前の太鼓持にて、火鉢にあたり、話をしてゐる。此見得、すべて吉原女郎屋二階の景色、二挺鼓にて幕明く。  
ト廊下の奥より客の仕出し一人、かむろ久野連れ立つて

久野 モシ、どこへ行きなんす、わつちがおいらんに叱られます。

客 イヤ、どこへも行かぬ。手水ぢやく。

久野 アレ、馬鹿らしい。手水なら此方へ來さつしやりませ。

ト奥へ連れて入る。遣り手部屋にて

すぎ サア、養花が出來た。彦八さん。升吉さん。

ト茶碗に汲んでやる。

升吉 こりや有り難い。お杉大明神。餘所の遣り手衆と違つて、どうしても大店の茶は格別ぢや。ナア、彦は。

彦八 さうともく。我等酔ひ醒めの所へ、此養花。甘露々々。

すぎ どうでもお前方は、酒が過ぎるであらうのう。

彦八 過ぎるから、悉皆奈良漬同前。

ト此うち手水に行つた客、久野附いて臆病口へ戻つて來て、此方の障子を明けようとする。久野留めて久野 コレ、めつさうな。お前は奥ぢやわいなア。

客 ありやアおいらんの座敷ぢやアないか。

久野 知りません。來さつしやりませ。



トいひく久野、客を連れて奥へ入る。此内始終騒ぎ、二挺鼓、奥より又客一人、初梅、上着かひどりにて、アしよに出て来て

初梅 是非お前は歸りなんすかいなア。

客 歸らいてぢや。宵から待つて居るのに、何處へ往つて居た。

初梅 おいらんと一しよに仲の町へ。

客 ドレ、仲の町も凄まじい、歸らうく。

ト行かうとするを捕へて

初梅 エ、じれつてへ。泊りなんしよ。

客 イヤく。もう引けを打つたれば、是非歸らねばならぬ。

初梅 お杉どん。引けはまだぢやの。

升吉 イエく、引けはもうとうに打つて、大方もう八つでもあらう。ナア、彦八。

客 アレ、あの通り、夜が更けたれば

初梅 エ、それでも、わつちやアまだ、いふ事がありんすわな。

すき 初梅さん、客人はお歸りなんすかえ。マア、ようござりますわいなア。

客 イエく、歸らねば都合のわるい事がある。

初梅 そんなら、何時來なんすえ。

客 都合して明後日の晩に來よう。

初梅 ほんにかえ。

客 違ひなしに、明後日々々々。

彦八 ア、ありや神田の紺屋町のお客ぢやな。

初梅 必ず明後日の晩は仕舞つてをりんすぞえ。

客 どうともく。お杉殿。さらば。

トいひく、初梅もろとも切り穴へおりる。

すき あんまりお早うござりますなア。

ト捨ぜりふある。

彦八 ドレ、おいらも座敷へ行かうか。サア、升吉。

升吉 萬事、よろしく。

彦八 又蛇か。久しいものぢや。



トいひく、奥へ入る。

すぎ 子供やく。これはしたり。又何處ぞへ往つて寐て居るのか。喜助どんく。これも聲がせぬ。今晚の不寐の番は誰ぢや知らぬ。

といひく、これも切り穴へ、おりる。引違へて初梅、切り穴よりバタ／＼と上つて来て

初梅 辰さんは歸したが、これからはほんに難波津さんは、何處に居なさんす知らぬ。龍田、呼んでたも。龍田やく。

ト升吉、遣り手部屋よりそろ／＼出て

升吉 コレ、初梅さん。(ト抱きつく)

初梅 エ、誰ぢやく。

升吉 おれぢやく。色男の升吉ぢや。

初梅 エ、升吉さん。コレ、からかはつしやるなよ。

といひく、引退け、起きあがる。

升吉 ハテ、客人は歸つてしまふ。おれをお前の座敷に寝かしてもらはうと思つて。

初梅 否ぢやくわいなア。馬鹿らしい。

升吉 そんなら、ツイちよつと。

ト又寄るを

初梅 エ、廊下蔭めが。

ト頭をピツシヤリ叩き、ツイと奥へ走り入る。

升吉 コレく、初梅さんく。

ト追ひかけ入る。これよりしつぽりとした合ひ方になり、奥より八つ橋、小兵衛連れ立つて出て

小兵 コレ、八つ橋。おれを爰へ呼び出して來たは、何ぞ用があるか。

八橋 アイ。小兵衛さん。今座敷でちよいと噂しなした、籠釣瓶の茶入れとやらを、いよくお前が、持つて居なんすかえ。

小兵 イヤ、持つては居ぬ。

八橋 エ、。

小兵 サア、持つては居ねど、賣つてくれいと、さる人に頼まれて、世話すれば、マア、持つて居るも同前。

八橋 サア、其茶入れが急に欲しい。どうぞわつちにくんなんし。



ト急せいたる體にていふ。

小兵 ヤア。

ト悔り。八ッ橋ちやつと思ひ入れあつて

八橋 イ、エイナア。ソレ、最前もいひした通り、わつちやア茶が稽古したいによつて、ナ、サア、其籠釣瓶とやらの茶入れが欲しい。小兵衛さん、どうぞ其茶入れを。

小兵 貰ひたさに、おれを爰へ呼び出して

八橋 折入つての頼み。

小兵 籠釣瓶の茶入れを。

八橋 後生ぢや。どうぞ。

小兵 ムウ。望みなら、やるまいものでもないが、八ッ橋、おれに抱かれて寝るか。

八橋 エ、。……サア、それはな。

小兵 ハテ、茶入れの返禮。おれが頼みを聞いたうへ、其方そつちの頼みも聞いてやる。

八橋 そんなら、抱かれて寝ずば。

小兵 おれも否いやぢや。

八橋 ハテ、そりや……どうともするわいなア。(トこなしある)。

小兵 イヤ、恐ろしい。これまでおれがどのやうに説いても、振り通した八ッ橋。早速寝ようと早合點、のみこまれぬ。佐野次郎左衛門といふ間夫がある汝てまへ、滅多めったにふはとは、乗られぬく。

八橋 エ、。

小兵 サア、そこを又、たとへ間夫があらうが、色があらうが、おれに承知してひつたりと隣いてくれる心なら、成る程、茶入れをほつかりと、やるまいものでもないが、人に知られた唐物屋小兵衛、女郎にやられては男が立たぬ。

八橋 そんなら、いひかはして居る、次郎左衛門さんと

小兵 おれが見る前で、さつぱりと切れてしまへば、望みの茶入れをやらう。

八橋 ムウ。……成る程、切れませう。

小兵 慥かな證據を見た上で、

八橋 籠釣瓶の茶入れを

小兵 汝てまへにスツバリ。

八橋 必ずともに。



小兵 今宵のうちに、  
八橋 わたしが心底、  
小兵 八つ橋、  
八橋 小兵衛さん、  
小兵 コレ、……待つて居るぞや。

ト五大力ごたうりきのめりやすになり、小兵衛こなしあつて奥へ入る。跡に入つ橋残り、いろ／＼と思ひ入れあつて  
(めりやす坂田仙十郎)

八橋 アレ、あの唄は一昨年流行つた、五大力のめりやす。とつくりと話しを聞いたが、堺町の春狂言、藝者の小萬を薩摩源五兵衛が、五人斬りとやらで、むごう殺したげな。其小萬は矢ッ張り源五兵衛が爲に。……これを思へば、ひよつと次郎さんが……(トいろ／＼思ひ入れあつて)さうぢや。

ト硯を取つて来て、これより文を書く。唄の切れに、菊之丞の聲色にて

「コレ、申し、源五兵衛さん、わたしやお前が否になつた。アイ、思ひ切つて三五兵衛さんの心に随ひますほどに、さう思つて、下さんせいな。」

奥にて大勢、ヨウ／＼、濱村屋ア。ト又、唄になり、八つ橋思ひ入れあつて、状を書きしまひ、封をし

て上書をするうち、又奥にて、宗十郎が聲色にて

「何をいうても廓の女に戀なし 寶を以て戀をする。小萬。此源五兵衛は、もう歸るぞよ。コリヤ／＼。」

奥にて多勢、「紀伊國屋ア。有り難い／＼。」と八つ橋これを聞いて

八橋 アレ、あのやうに、次郎さんがわたしを、(ト泣かうとして、思ひ入れあつて)イヤ／＼、たとへ突かれようが、殺されようが、これまで二人を世話して下さい、紀伊國屋文藏さんに、此文を。……これてわたしの心が……ア、誰ぞに持たせてやりたい。

トこなし。奥より彦八出て来る。

彦八 オツトよし。承知々々。我等一走り行てくるぢや。

八橋 モシ／＼、彦八さん。お前もう歸らしやんすかえ。

彦八 イエ／＼。水道尻まで、用があつて参ります。

八橋 そりや幸ひ、わつちが頼む處へ、ちよつと寄つてくれませんか。

彦八 エ、そりや仲の町の縁屋へかえ。

八橋 アイ。松さんに屹度さういうて、急な事ぢやほどに、此文を、紀文さんにしつかりと届けてと、



渡しておくんなんし。

彦八 よし／＼。よい序でぢや。随かに縁屋へ渡しませう。

八橋 大事の文ぢや。必ずともに。

彦八 ハテ、合點あてんてござります。

ト状を受取り、切り穴へ入る。八つ橋いろ／＼あるうち、次郎左衛門、今まで寝て居たといふこなしにて出て来る。

次郎 コレ、八つ橋。もう遣り手婆アは寝たか。

八橋 ヤア、次郎さん。コレ。……籠釣瓶の茶入れはな。

次郎 何ぢや。茶入れは、知れたか／＼。

八橋 氣遣ひしなさんすな。其茶入れは、随かにな。

次郎 コレ、何處どこにある。

八橋 サ、思ひがけない

ト此うち小兵衛出て来て、八つ橋と顔見合せる。八つ橋思ひ入れあつて  
エ、次郎さん。

ト次郎左衛門をむごく突き放す。次郎左衛門悔りして

次郎 コレ、八つ橋、何をするのぢや。

八橋 サア、それは。

次郎 コレ、今言やつた茶入れの事は、どうぢやいの。

八橋 其茶入れは……茶入れて……もうお前は否いなになつた。わしや切れてしまふぞえ。

ト思ひ入れ。次郎左衛門こなしあつて

次郎 な、何をいふのぢや。

八橋 サア、ふツつりとお前の事を、思ひ切つたほどに、さう思うて……くれなんし。

ト次郎左衛門ムツとして

次郎 すりや、どうして。(ト胸ぐら取つて、じつと思ひ入れあつて)エ、聞えた。俄かにさういふのは、矢ツ張り高崎の事をおれぢやと疑うてか。コレ、最前もいふ通り、あれは紀文に惚れて居る。それにマア、エ、愚痴な八つ橋。嫉妬やまやまどころか、コレサ、おぬしの事は、おりやモウ身に代へ、知行に代へ、思うて居る。其證據は、今の勘當の身の上。恩に着せるてはなけれど、佐野次郎左衛門とて、舟橋の家中では、家柄といひ、親おやの庇て、式日の登城に上座した身の上。こりや其方そなたもよう



知つて居ようかの。

八橋 サア、其以前のお身にお前をしたいゆゑ、(ト小兵衛へ心遣ひして)わたしが……イエ、わたしが否になつたほどに、切れて下さんせ。(ト思ひ入れ)

次郎 ムウ。八つ橋。そりやじやれてはないな。

八橋 アイ。眞實、奥のお客が大事。

トついと立つて行かうとする。小兵衛奥へ入る。次郎左衛門、八つ橋の裾をとらへ

次郎 すりやおれを突き出すのか。

八橋 コレ。いひたい事は、此胸に。……サア、山川の、先きに流るゝとちがらも、身を捨て、こそ浮む瀬もあれ。

次郎 以前の事は打忘れ、わりや女郎になつたか。

八橋 アイ。勤めの習ひ。

ト振り切り、思ひ入れあつて、ツイと奥へ入る。次郎左衛門キツと坐り、両手を膝に置き、奥を覗みつけ、腕まくりして、ホロ／＼泣く思ひ入れ。ところへ、切り穴より若い者、拍子木打つてあがる。これにて心付き、立上がり、ちやつと小蔭へ隠れる。若い者拍子木打ち／＼奥へ行つて又戻り、矢張り打ち打

ち切り穴へおりの。次郎左衛門小蔭を出て、キツと思ひ入れあつて、奥へ行かうとする處へ、高崎、紙を持って、手水に下へ行く心にて、出て

高崎 次郎さん。まだそこにかえ。

次郎 ヤア、高崎どの。(トちやつとこなしあつて)コレ、定めて八つ橋と一座であらう。奥の客といふのは、矢ッ張り最前の小兵衛か。

高崎 アイ、さうさ。申しえ。どういふ事か、八つ橋さんと小兵衛さんが、何やら小蔭でしつぽりと、話して居るぞえ。

次郎 ムウ。そんならいよく。

高崎 日頃に似合はぬ八つ橋さん。今宵俄かに小兵衛さんを客にしなんすは、よもやと思へど、わつちもどうも合點がゆかぬ。

次郎 こりやモウいつそ。(ト屹度なり、思ひ入れ)。

高崎 コレ、次郎さん。必ず急かすと、マアとつくりと様子を見届けた上、お二人を世話にしなんす紀文さん、わつちも待つて居る、大かた見えるであらうほどに、それまでは虫を殺して、何事も。

次郎 いかさま。これまでの志し、文藏が手前を思へば……ムウ。



高崎 もう来て居なんすか。縁屋へちよつと見せにやらうほどに、次郎さん、待つて居なんし。

ト高崎こなしあつて、切り穴へ入る。此うち始終合ひ方。次郎左衛門思ひ入れ。奥より久野出て来て、切り穴の側へ行つて上より

久野 喜助どんく。早く八つ橋さんの座敷を方附けて下され。喜助どんく。

トいひ捨て、又奥へ入る。次郎左衛門始終思ひ入れあつて、胸をさすり、ふと最前の懐銀を見て

次郎 思ひがけない。こりや最前縁屋で起證の時、初梅が取つて来た懐劍。思はずおれが懐へ入れておいたが、丁度幸ひ、八つ橋を

トこれより好みの合ひ方になり、次郎左衛門こなしあつて、奥へ窺ひ行くところへ、女耶一人出る。次郎左衛門は八つ橋と思ひ捕へる。女耶恟りする。次郎左衛門苦笑ひして、突き離し

コレ、八つ橋は。

女耶 今座敷に。

次郎 さうぢや。

ト血相して、奥へツイと走り入る。これより潮來騒ぎになり、小兵衛生酔ひにて、升吉、初梅、かむろ連れて出る。切り穴より高崎上つて来て

高崎 こりや小兵衛さん。きつい御機嫌ぢやな。

小兵 これが嬉しうなうて堪るものか。おツつけ日頃の思ひも晴れ、益體もない。どうぢやく。

ト宗十郎の聲色。

升吉 まことに訥子と見えます。

小兵 其筈ぢや。今ての色男ぢやもの。

皆々 小兵衛さん、評判がよいぞえ。

ト奥よりマタムにて、油つぎの男走り出て

男 モシく。今奥の小座敷で、八つ橋さんと若い客人とが、ひどうせり合うてござりますぞえ。

トいひく、油注しを持って、切り穴へおりる。

高崎 そりや大かた次郎さんが

トはッとなしある。

皆々 こりや只事ぢやあるまいぞえ。

小兵 其筈。我等少し當りがあるぢや。

ト無性に喜ぶ。切り穴よりお杉あがつて来る。



すぎ 今聞いたが、八つ橋さんと若い客人とがせり合うて居るとは、小兵衛さんは爰にござるのに、合あ點てんがゆかぬ。

ト行かうとするを高崎留めて

高崎 コレ、お杉どん、それには及ばぬ。

すぎ イヤ、こんな事を吟味するが、遣り手の役ぢやわいなア。

高崎 イヤ、それでも

すぎ のきなんせ。

ト行かうとする。高崎留めるを、振り切り、お杉奥へ駈けて入る。小兵衛こなしりつて

小兵 サア、八つ橋が座敷は方附いたか。寢にやならぬぞ。オ、ぐつと寢ようと、待ちかねて居るわい。

升吉 ハテ、通に似合はぬ、床急ぎぢやなア。

ト又バタ／＼にて、奥より客二三人逃げて出る。引き續いてお杉、あわてゝ走り出て

すぎ コレ／＼。今奥で次郎左衛門とやらが、八つ橋さんを懐劍で突いたわいなア／＼。皆々 ヤア／＼。

ト大怖り。

小兵 こりや斯うしては居られぬ。

ト奥へ駈けて入る。これよりバタ／＼。

皆々 どうせうぞいなア／＼。

高崎 マア、次郎さんの身の上を。

ト奥へ走り入る。これより騒動の體。お杉うろたへて、切り穴へ、おりようとしたり、奥へ行かうしたり、いろ／＼思ひ入れあつて、奥へ走り入る。始終バタ／＼にて、奥より次郎左衛門、懐劍逆手に持ち、手負ひの八つ橋を追つて出て、兩人立廻りある處へ、小兵衛出る。次郎左衛門、小兵衛へ突いてかかる。小兵衛摺りぬけ、逃げ廻る。次郎左衛門追ひ廻して、ト奥へ追つて入る。始終バタ／＼。八つ橋いろ／＼苦しき、次郎左衛門を尋ねるところへ、小兵衛引返して来て、八つ橋を介抱して

小兵 コレ／＼、八つ橋。心底見えた。おれが女房にするぞ。創きずは浅い。氣を慥かに持つてたも／＼。

トいたはり、さま／＼こなし。八つ橋苦しきながら

八橋 小兵衛さん。早う茶入れを／＼。

小兵 エ、此場で茶入れどころかいやい。

トうろたへるところへ、次郎左衛門皆々を追つて出て、又立廻り、此うち八つ橋苦しき、こける。小兵衛



次郎左衛門立廻りよろしく、小兵衛を取つて投げ、懐剣を振り上げる。小兵衛恐れ、屏風を隔て、兩人よろしく立廻りのうち、キツカケにて此道具ぶんどす。

造り物、萬字屋表のかりり、大格子、門口滑り戸締め、よき處に用水桶。たそや行燈に火をともし、すべて角町角の景色。格子の中にて物騒がしく

ト道具留ると、向うより紀伊國屋文藏、最前の八つ橋の状を持つて駈けて出て、門口へ寄り、無性に戸を叩き

文藏 傳馬町の紀伊國屋文藏でござる。八つ橋殿に急に逢ひたい。こゝ、明けてもらはう〜。

トいろ〜叩いても答へず。中の様子バタ〜に、文藏心を附け、耳を寄せ

ヤア〜。内は殊の外騒動の様子。そんなら、もう。

トこなしあつて状を擴げ、たそや行燈の側へ行つて

「わざ〜書残しり〜、これまでいひかはせし次郎左衛門様の今のお身の上、なんぼう悲しく存じり〜ところに、今日お國の阿母様よりのお便りに、紛失の籠釣瓶の茶入れ、詮議仕出し差上げなば、歸參も叶ひ、勘當も免すとのお文と承り、嬉しく存じり〜、右茶入れの行方知れず、兎や角案じ候ふところ、今宵思はずわたくし客人、唐物屋小兵衛といふ道具屋、所持致し候ふ由、とくと承り候ふゆゑ、段々頼み候へば、心に随ひ候ふやう口説き候ふを幸ひに、色で仕掛けて右の茶入

れ、取りたき心にて御座候ふも、あとで物の間違ひにて、次郎左衛門様のお心に障り、もし又わたくし身の上になり候はば、死んだ跡にて、そもじ様より、とくと心底御申し下され、茶入れは小兵衛が持つてをるに違ひなく」……サア〜、これぢやによつて

ト又戸口へ来て

ちよつと、明けてもらはう〜。紀伊國屋文藏ぢや。紀文ぢや〜。コリヤ〜。

ト戸を叩きても、初めの通り物騒がしきゆゑ、うろ〜して又行燈の側へ行つて、状を見て

「色で仕掛けて右の茶入れを取りたき心にて」……エ、内の騒動が、どうやら心元ない。

ト又行つて戸を叩き、明けぬゆゑ、又立戻つては状を見て

「もしわたくし身の上になり候はば、死んだ跡にて、そもじ様」……コレ〜、此様子、ちよつとなりと旦那次郎左衛門様に

ト戸口へ行つて戸を叩き、元の處へ来ては状を讀み

「紀伊國屋文藏様まるる、八つ橋より。」

ト始終こなしあつて、又戸口へ来て、手ひどう戸を叩き

傳馬町の紀伊國屋文藏ぢや。何でもこゝ、明けて



ト無性に叩く。中より大きな聲にて

男 イヤ／＼、誰でも明ける事はならぬ。佐野次郎左衛門といふ浪人者が、おいらんの八つ橋を殺して、内は亂騒ぎぢや。大取込みぢや。

トこれを聞いて

文藏 ヤア／＼。すりやもう……チエ、

といろ／＼あつて、又状を見て

ホイ。

トばつたりと下に居る。よろしく、ひやうし 幕

大 切  
紀伊國屋の段  
兩國三河屋の段  
紀伊國屋の段  
柳原の段

登場人物 文藏女房、お賤。紀伊國屋下女、お芳。文藏一子、文吉。手代、吉兵衛。醫師、畑道益。手代、善六。丁稚、與茂太。伯父、善右衛門。八つ橋兄、伊平次。大木場の三婦。澤井

數右衛門、唐物屋小兵衛。紀伊國屋文藏。

造り物、三間の間、二重舞臺、見附け重れ戸棚、小袖簾筒直し、正面に納戸口。橋が、りの方、綿店。よき處に紙屑籠掛け、長押に傘一本吊し、下座の方、板塀、切抜く仕掛け。いつもの處に門口。すべて傳馬町綿屋の體にて、幕の内より右二重舞臺上の方に、善右衛門、紙子羽織、頑丈なる親仁にて、目鏡掛け、算盤置いて居る。真中にお賤、世話女房にて、帳面控へて讀んで居る。下の方に善六、手代にてこれも算盤持つて、善右衛門と合ひ算をして居る。平舞臺に仕事師△、×、綿の荷を拵へて居る。通り神樂にて幕明く。

しづ 三百六十匁。……五百三十匁。

善右 三百六十匁。……五百三十匁。

ト算盤におく。お賤段々讀むうち

△ どうでも春の日は長い。晝からか、つて綿荷は大方拵へてしまつた。

仕× 其筈ぢや。煙草も服まらずに、精を出したものだ。

△ そして此荷を、何處へ送るのでござりますな。

しづ アイ。二丸とも、芝の日蔭町の、古着屋へ廻して下さんせ。

仕× ハイ／＼、畏りましたが、モシ、旦那は何處にござります。



しづ 旦那は、今朝上方の船が着いたと知らせたゆゑ、磯砲洲へ入札に行かしやんしたわいなア。

△ イエ、旦那は慥か昨夜から吉原へ行つて、まだ歸らずでござりませう。

しづ ア、コレ。何をお前が。(ト善右衛門へ氣兼ねして)ちやつと其荷を、芝へ遣つて下さんせ。

善右 文藏が留守に店の勘定、とつくりとしぬかにやならぬ。お賤、其帳面此方へ。(ト引つたくる)。

しづ 申し、それは。

善右 ハテ、動きは取れぬ。……サア、善六、間違はぬやうに置けよ。

△ ドリヤ、芝へ持つて行かうか。

ト綿荷をかけたげ、向うへ入る。此うち善右衛門帳面を繰り

善右 二百二十匁。

善六 二百二十匁。

善右 六百八十匁。

善六 六百八十匁。

ト段々讀む。善六算盤に置くうち、お賤いろ／＼心遣ひの思ひ入れ。

善右 どうぢや、善六。入りと出が合うたか。

善六 イヤ、どう置いても、先きの算用とは勘定が合ひませぬ。

善右 其筈ぢや。文藏が吉原通ひ、内は投げやり、店は益體。二進が三進、商賣の桁外れ。お賤といふあの美しい女房といひ、文吉といふ子を持ちながら、聞きや、吉原の万字屋の女郎に馴染みを拵へて、片時内には居ず。今日此頃は女郎を、身請けの相談とやら。それを知つて今日來たは、何もかも此家のせいらくせう爲ぢや。

しづ 何のいなア、伯父御さん。主に限つて、女郎を請出すの何ぞとは、ほんの人の噂。現在連れ添ふ、わたしが證據。そんな事は、微塵も無い事でございます。

善六 イヤ、お賤さん。滅多にさう執成しなさんな。此善六は文藏殿の伯父、善右衛門の息子なれど、上方をしくじつて歸つて、今では此家の、居候ふやら、手代やら、常の奉公人とは違ふ。殊に、同じ内に居るもの、文藏殿の身持ち、吉原通ひに夜泊り日泊り、何もかもよう知つて居るぞ。しづ サア、それはな。

善右 コリヤ、死んだ文藏が父親は、おれが兄貴。其佛の遺言で、此家のかんぼう。別家に居て、養はるゝがよさに、現在おれが悻の善六はあのさま。又、甥の文藏は、吉原のお大盡、紀文さんくと、もてはやさるゝげな。結構な事ぢや。お賤、なぜ、おれが常からいふ通りに、得心して



しづ エ。そりや何をえ。

善右 ハテ……ぢや、なぜ怪氣せぬぞ。(ト心意氣あるべし)。

善六 怪氣せぬ女房は馬鹿者。吉原の女郎に、見代へられて居るお賤さん。お前を世間では、女の二本棒ぢやと笑うて居るぞえ。

しづ アイ、笑はれようが、譏られようが、わしや文吉といふ子供のある仲、見代へられても大事ごせんせぬ。ほんに、文吉を最前から、與茂太が遊ばせに連れて行つたが、瘡瘡あげく、風をひかせてはわるいに、早う連れて歸つてはくれぬ事か。

ト表の方を見る。善右衛門、善六へこなし。

善右 アレ、見い、善六。何をいうても、かいしよの無い

善六 どうでも二本棒ぢや。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。

ト又通り神樂になり、向うより與茂太、下人の馬鹿にて、馬具うまがひに乗り、出て来る。

與茂 お馬が通る。ハイ~~~~。先退け~~~~。……とう~~~~内ぢや。(ト入る)。

しづ オ、與茂太か。……コリヤ、待ちかねて居たわいやい。

與茂 おれも飯めしを待ちかねて歸つて来た。(ト善右衛門を見て)南無三。又毛蟲の親仁が来て居るな。

善右 又馬鹿めが、(ト覗む)。

與茂 何を親仁め。

ト覗み返す。お賤こなしあつて

しづ コリヤ~~~~、與茂太。ほんは何處どこに居やるぞ。文吉をなぜ連れて歸らなんだ。

與茂 ほんになア。文吉さんを何處どこぞで落してのけた。ア、誰ぞ拾つたかしらぬて。

しづ エ、憎てらしい。おのれマア、大事の子を、怪我でもさしたら、きく事ぢやないぞ。

與茂 ハ、ア。おかみさん、馬鹿らしい事をいはんす。女子をんなの身てはあるまいし、怪我さすとは。コレ、

文吉さんは男の子、滅多に怪我さす事はないに。オ、をかし。

しづ ほんにマア、呆れて物がいはれぬ。おのれ、どうせう知らぬ。

ト叱るうち、向うよりお芳、下女にて、瘡瘡子の拵への、文吉を背負ひ、酒樽を片手に持つて出て来る。

よし モシ~~~~、おかみさん。道に文吉さんがたつた一人、遊あそんでござつたを、酒屋へ行いた序ついでに、連れてまゐりました。

トおろす。文吉、お賤に取附き

文吉 コレ、母様、與茂太が坊をほうつておいたによつて、お芳と連立つて戻つたわいのう。



しづ オ、よう戻りやつたく。兎角憎いはあの馬鹿め。やうく一昨日笹湯をかけたものを、ようマアほつておいたなア。

よし 與茂太どん。大事の坊さん、ろくに守をしたがよい。エ、まづい人ではある。

與茂 ハテ、まづなけりや、落しては來ぬわい。ならば、又落して見たがよい。

しづ あの口わいのう。お芳、ちつと性根の入るやうに、叩いておきやいのう。

よし アイく。ちつと性根の入るやうに、くらはすぞや。

與茂 オツト、待つたり。今、人形町で、どら焼を二つ食らはせた。おれも五つ食うたによつて、腹は丈夫な。

よし ホ、、、。あれ御覽じませ、おかみさん。

しづ ほんに、あんまりで、をかしいわいの。

善六 コレサ、親仁殿。鐵砲洲へ行つたとある文藏殿、こりや歸りがきつう暇がいる。

善右 ハテ、又吉原へ行つて居るのであらう。

しづ イエく、こちらの人はおツつけ

善六 コレく。居續けぢやもの、滅多に歸られまい。

善右 何でも文藏に逢はにやならぬぞ。

ト合ひ方により、向うより文藏、道益外科醫の形にて、連れだつて出て、花道にて

道益 コレく、文藏、昨夜から萬字屋の内へ行つたが、ありやどうも心元ない。

文藏 エ、(トこなしあつて、下に居て) モシ、道益様、彼方にも醫者はあれど、此方にもお前をお頼み申した手負ひの容體、疵口はどのやうにござりますな。

道益 サア、疵は四ヶ所、ナニガ、滅多突きに突いたものゆゑ、中に急所もあれば、かすり疵もある。

殊に、何をいうても女子ゆゑ、焼酎で洗ふのも、耐へかねて目を廻したり、癩が差込んだり、段段の弱り。それで獨參湯づくめ。あの物入りを皆こなたがするとは、ア、大層な事ぢやぞや。

文藏 それも私しが大切なお主、次郎左衛門様を助けたいばかり。八つ橋殿が死ぬれば、此方は理詰めで下手人。若しさうなつては、此文藏も、どうも生きては居られませぬ。

道益 いかにか若いといひながら、ひよんな事を仕出だした。あの手負ひは十が九まで、マア助からぬ容體。

此上は、一時も早う、身請けの相談するやうにせにや、相手の次郎左衛門は助かられまい。

文藏 サア、其相談も急に揉み立て、又、八つ橋が親元へも、手を入れて金づくで。

道益 それが肝心。明日の間も知れぬ手負ひの八つ橋。如才はあるまいが、必ず油断せぬやうに。



文藏 とつくりと心得て居ますが、何をいふにも大枚の金づく。殊に、茶入れの方も……マ、マ、マ、道益様には段々の御苦勞、此上ながら

道益 又、晩に見舞ひに行きます。

文藏 兎角宜しう。

道益 愚老如才は無けれども……ア、氣の毒なものぢや。

トこなしあつて、道益引返して揚幕へ入る。文藏跡見送り、溜め息つき

文藏 八つ橋殿の噂、聞く度々にびくびくと、おれが胸へ八寸釘。どうぞして若旦那次郎左衛門様を……ア、

ト思ひ入れあつて、しつぱりと立つて居る。本舞臺、門口より、奥茂太親いて見て

奥茂 アレ〜。旦那さんが戻つてぢや。旦那さん〜。コレ、内に毛蟲の伯父さんが来て居るわいなア。

トこれにて文藏こなしあつて、本舞臺へツカ〜と来て

文藏 女房ども。今歸つた。

ト内へ入る。

しづ オ、こちの人、よう戻つて下さんなア。(ト喜ぶこなし)

文吉 父様、歸らしやつたかいのう。(ト取りつく)

文藏 オ、文吉。抱瘡から、大分おとなしくなつたわいやい。

ト頭を撫でる。お賤こなしあつて

しづ モシ、伯父様。ハイ、主は歸られましてござりまする。イヤ、善六さん。こりや居續けてもなかつたさうなわいなア。

善六 ハテ、旦那、よう歸らつしやりました。

文藏 オ、善六。上方の船もきつう値が張つて引き合はぬ。おツつけ甲州が出て来れば、それでマア見合せて歸つた。(ト善右衛門を見て)これは伯父者人。ようござりましたな。

善右 文藏。わりや大分精が出るな。

文藏 イヤ、鐵砲洲の下り荷、廉からうと思ひの外、無駄足を引きました。

善右 コリヤ、文藏。おれが精が出るといふは、綿の買出しではない。朝も、晩も、吉原へ通ひつめ、内はほうから。揚句の果に、女郎を請け出す相談まで、此伯父の善右衛門は、よう知つて居るわいやい。



文藏 イヤ、モシ、伯父者人。そりや何おつしやる。尤も、友達に誘はれて、一二度の附合ひで、吉原へ行た事もあれど、毎日、毎晩、何の私しが。よう思うても御覽じませ。かういふ可愛い、文吉といふ子はあり、女房はあり、それに女郎を請出すとは、ハ、ハ、ハ、ハ、益體もない。そんな事があつてよいものでござりませうか。ノウ、お賤。

しづ アイ、さうでござんすとも。最前もいふ通り、現在女房のわたしが證據。伯父御さん、どうおつしやつても、主に限つてな。

善右 ア、ぬかすな。あた舌たるい。いかに男ぢやというて、文藏が面見ると、びろくと側へひつつき廻つて、あた見苦しい。

ト立上がり、お賤を無理に引分け、覗む。お賤思ひ入れ、びんとする。善右衛門、文藏へ摺り寄つて、コリヤ、文藏。色狂ひ、馬鹿遣ひせぬものが、見世の勘定は蜂の巢同前、穴だらけ。最前算用したて、見たが、五兩や十兩の喰ひこみぢやない。大枚の金の行き端。大方吉原で遣ひなくしたものであらう。殊に、甲州の間屋の、眞綿の仕切り金も、なぜ渡さぬ。

文藏 イヤ、其仕切りは、

善右 聞きや、これまで、見世から問屋へ持つて行くというて、ちよこく金を持つて出たげな。それ

を、どうして仕切りの金を、問屋から、毎日々々、内へ催促に来るぞ。

文藏 サア、それは。

善六 旦那、文藏様。誰が持つて行ていふやら、様々な事が親仁殿の耳へ入つて、ア、笑止千萬な。

トこなし。

文藏 ハテ、これまで段々仕切り金は渡しておいて、算用残りが三十兩ほど。それを問屋が仰山に、催促に来るものでござりませう。

善右 何の、三十兩が僅かな事。たとへ一兩でも、汝が親の代から、不參の無い問屋、なぜ催促しられる。綿屋仲間の名折れ。文藏、おれが見る前で、三十兩きりくと、問屋へ持たせてやれ。

文藏 エ、其金は、

善右 内には素銀一文、ありやせまいがな

文藏 サア、

ト當惑する。お賤ちやつと

しづ コレ、こちの人。お前問屋へ渡す三十兩の金を、ソレ、わたしに預けておかしやんしたぢやないかいなア。



文藏 ヤア。(ト思ひ入れ)

しづ ハテ、コレ、仕切りの金を、甲州の、問屋へ渡せというて。エ、ソレ、物覚えのわるい。ソレ、合點がゆかぬかいなア。

文藏 でも、つひに其方に。

しづ アレ、又、金を渡しておいて、其やうに、コレナア。

トいろ／＼吞込ます思ひ入れしても、文藏合點のゆかぬこなし。

これはしたり。大事の金の事を其やうに、……ようござんす、わたしが取つて來ます。

トいひ／＼、掛け硯の引出しから、三十兩の金を出して

コレ、見やしやんせ、三十兩。此金は、問屋へ仕切りにやれと、渡しておかしたぢやないかいなア。

文藏 ムウ。そんなら此金を其方が

しづ 問屋から催促に來てもなア……とんと忘れて居ました。子持ちといふものは、事多いによつてホ、……。堪忍して下さいませえ。

トこなし。文藏思ひ入れあつて

文藏 成程此金、(ト取上げて、お賤を見て、心意氣あり)問屋へ渡す事をば、ハテ、粗忽な女房ども

ト禮をいふ氣味合ひ。

善右 其金がありやまだしも。文藏、まだ汝にや尋ねる事がある。これから奥で、一せいらく。

文藏 イヤモウ、何なりとも。

しづ ほんに伯父御にあげようと、取りにやつた其酒。お芳。奥でこちの人と一しよに。

善右 又いやらしい、こちの人とは。

しづ ハテ、女夫ぢやもの。

善右 エ、いま／＼しい。いつそ酒など飲んでこまさう。早う拵へをらう。

しづ アイ／＼。コレ、與茂太どん、晝中に馬鹿らしい。エ、與茂太どん。

ト與茂太最前より居眠つて居て、此時目を覺まし

與茂 オツーシヨ。(ト立上り)今とろ／＼とまどろむうち、あの伯父の善右衛門が、頓死した夢を見た。

善六 又馬鹿つくすか。きり／＼奥へ行って、酒の拵へしをらう。

與茂 ハテ、居候ふめが、澤山さうにぬかすワ。

善六 おのれを。



打とうとするを

奥蔵 そんなぢやないわい。

ト奥へツイと走り入る。

しづ サア、こちらの人。文吉も奥へおぢや。(ト手を引く)。

文吉 母様。わしもあ、からが飲みたいわいのう。

しづ アレ、見やしやんせ。疱瘡から酒を好いて。

文蔵 矢ッ張り神の好くのぢや。大事あるまい。イヤ、女房ども、此金はおれが持つて居ても

しづ ハテ、さうぢやわいなア。

善右 サア、文蔵、奥へ。

文蔵 伯父者人。マア、ござりませ。

ト唄になり、善右衛門先きに、文蔵、お賤、こなしあつて、文吉を連れ、お芳ともに奥へ入る。跡に善

六ひとり残り、こなしあつて

善六 親仁といひ合せ、文蔵をばいまくり、此跡式をしてやらうと思ふ壺へ、いつぞやよりふざけ出して吉原通ひ。それを幸ひ、ある事ない事を親仁へ告げて、マア大かた……時に、今の三十兩。

あれをどうぞせしめて、其科を文蔵に……こりやどうぞ仕様が、ありさうなものぢやが。

ト思案しかける。向うより男一人、手紙を持つて出て来て

男 モシ……。紀伊國屋文蔵様は内方かな。

善六 オイ……。紀伊國屋文蔵は此方ぢやが、何の用ぢや。

男 イヤ、吉原仲の町緑屋から、急なお手紙持つて来ましたが、文蔵様はお前てござりまするか。

善六 成程……文蔵はおれぢや。仲の町の緑屋。覚えがある。ドレ、其手紙を。

男 ハイ……。大事の事てござりますれば、お返事を急に待つてをりますとの事、お手紙を屹度お渡し申しましたぞえ。

善六 よしく。慥かに文蔵がぢきに受取つたと、いうてもらはう。

男 そんなら、必ずお返事を。

善六 ハテ、承知ぢや。こなさんは早う。

男 ドリヤ、歸りませうか。

ト男は向うへ引返して入る。此うち始終合ひ方。善六手紙を見て

善六 紀伊國屋文蔵様へ急用。緑屋松蔵より。……ムウ。(ト封を切り開き)「わざわざ手紙を以て申し



遣はし候、八つ橋殿段々様子あしく見え候ふ間、何分身請けの相談、急々になされたく、身代は即ち五百兩と申し候へば、今宵何卒御都合なされ、百兩ばかり手付けにお遣はし下されたく、いづれにも彼人のお命は危ふく御座候……ハテ、こりやよい物が手に入つたわい。

ト思ひ入れ。奥にて

文藏 そんなら、女房ども、おりや此金、一走り持つて行て来う。伯父者人へ其方、合點か。

トこれにて善六思案して、荒繩を取つて来て、欄間へ掛け、踏み臺へ上り、首を繰るこなしにて、もう文藏は出て来ぬかと、見い／＼待つて居る處へ、奥より

サア、心得て居るワ。

トいひ／＼出る。善六、文藏を見て、ちやつと首を繰らうとする。文藏見て、悔り

マア／＼、待て。コリヤ、善六。こりや何事ぢやく。

善六 旦那、文藏さん。見遁して、殺して下さりませ。

ト又首を締めにかゝるを、文藏しつかりと留め

文藏 こりや何て死ぬのぢや。譯もいはずに、どうてもわりや、氣がふれて居るな。

善六 そんなら、モシ、此善六は、氣がふれて居るやうに見えまするか。

文藏 首縊つては、親方のおれが難儀になる。どういふ事て死ぬる。マア、其様子いうて聞かしやいのう。

善六 サア、其様子をいふも、文藏さん、お前の手前面目ないが、一通り聞いて下さりませ。何を隠さう、鐵砲町の、藪醫者の娘を、ちよつとおれがちよつてから、何か互ひにこつそりの濡れ事。其あともりが腹に言ひ分。ツイ……これそになりました。

又藏 ムウ。さうしてどうぢや。

善六 それで親仁の藪醫めが、人の大事の娘を、疵者にしやつた、料簡がならぬ、綿屋の内へ斷ると、大きな聲で喚き廻る、外聞のわるさといふものは、堪つたものではござりませぬ。

文藏 そりや喚きさうなものぢや。さうして其後は。

善六 サア、何ぼうお前とは従弟でも、表向きは手代分、知つての通りの親仁善右衛門殿なれば、おれを追出すは定のもの。どうも仕様はなし。人を頼んで挨拶に入れたれば、何がなしに産の代に、金を五十兩寄越せといふ、足元を見ての高ゆすり。やう／＼と挨拶で、三十兩でやみ切る積り。ところて、金は無し、此間にも渡す筈を、何のかのと言ひ延ばし、今夜は屹度此方に工面しておいた、明日は屹度出来る筈と、向うへいうても、度々間違うておひ／＼延すうちに、切端詰つて



合點せず、金はとんと間に合はず、明日は屹度出来るけれど、おひく延したゆゑ承知せず、それ死ぬる覺悟を極めた。今、お前に見附けられたは幸ひ、死んだ跡で親仁に、此様子をよいやうに、文藏様頼みます。色のえ身を果す、此善六が心の中を、推量して下さりませいのう。

ト實らしう無性に泣く。

文藏 ムウ。段々の様子、聞けば聞くほど、善六、汝がわるい。其金遣らねば向うは喚く筈。伯父者人の耳へ入つては、成程、安穩ではおかつしやるまい。(トちよつと思案して)コレ、善六。其方の工面の金は、間違ひなう明日出来るか。

善六 命にかゝつた金、何の違ひがござりませう。屹度明日出来ます。

文藏 ムウ。さういふ事なら、今日の所は、おれが取替へて、三十兩貸してやらう。

善六 エ、。

文藏 コレ、爰に、知つての通り、問屋へ仕切りの三十兩、今持つて行く所なれど、見すく首を繼るのを見通しにもならぬ。おれが吞込んで、明日の朝まで貸してやらう。

善六 そんなら、其金を。

文藏 必ず明日の朝まで。

善六 イヤ、モウ、屹度返します。

文藏 ソレ、三十兩。(ト出して渡す)。

善六 エ、忝い。(ト金を取つて戴く)。

文藏 コレ、おれは問屋へ行って、明日の朝までいひ延して來う。

善六 さやうなれば、御苦勞ながら

文藏 善六。

善六 文藏様。

文藏 ドレ、行て來うか。

ト眼になり、文藏表へ出る。

善六 まんまとしてやつた。

ト金を戴く。文藏ちよつと立戻り、門口にて聽き耳する。

此金をおれが持つて居ては。

トあたりを見て、紙屑籠を取つて來て、屑の中へ右の金を隠す。奥より善右衛門出て、これを見る。文藏は門口より内を見て、善右衛門とちよつと顔見合せ、文藏思ひ入れあつて、向うへツイと入る。善右



衛門も引込む。

これでよし。

ト元の處へ直して置き、こなしあつて奥へ入る。始終合ひ方にて、善右衛門そろりと奥より出て、紙屏籠の金を取出し、掛けてある傘の中へ隠し、素知らぬ顔にて思ひ入れ。奥にて

しづ こちらの人。ト呼び出て、もう文藏殿は行かしたか知らぬ。

ト善右衛門と顔見合せる。

善右 ヤア、お賤。

しづ 伯父御さん。……ドリヤ、わたしや奥へ。

善右 ア、コレ、待ちや。

ト手を取つて此方へ来るを

しづ イ、エ、わたしやちつと

ト又行かうとするを

善右 ハテ、そりや曲がない。コレ、お賤、これまでいろいろいうて口説くのに、なぜ得心せぬ。そりやあまり胴惚ぢやぞや。

しづ エ、いやらしい。お年といひ、現在わたしは

善右 甥の文藏が女房。甥嫁の其方に、惚れる事は法度か。

しづ エ、。

善右 イヤ、甥の女房に伯父が惚れないといふ、お觸れはまだ廻らぬ。神代の昔は差合ひのかまはぬ、色事を聞傳へて居るが、ほんに又、どういふ因果な縁ぢややら、お賤、其方に常から此善右衛門は、惚れたとこそいへ、死んだ婆が事は思ひ出さねど、おりや其方の事を毎晩思ひ出して、とかく思へば、老いの寢覺めの苦しさ。現在血筋の文藏めが、憎うてくならぬほど、其方が又可愛うて可愛うてどうもならぬ。せめて、ハテ年こそよつたれ、譬へにさへ、伯父が甥の草を刈るといへば

トいろくあるを、お賤叩き退け

しづ コレ、申し、こんな事がほんに世界にあらう事か、あるまい事か。

善右 イヤ、詮議したら、萬更無い事もあるまい。コレ、お賤、心無うせずと、どうぞ

ト寄るを向うへ突退け

しづ エ、馬鹿らしい。年寄りだてら、畜生といはうか、あんまりな伯父さん。こちらの人文藏殿に善右 ムウ。此事をいふか。



しづ サア、いへば現在主の伯父御なり、それでこれまで、お前に度々口説かれる悲しさ。辛さ、腹の立つのも、ちつと堪へて、よういはぬわいなア。

善右 そりや忝い。たとへいうても伯父甥の事。わるうこだわりや、文藏めをばほひまくる。オ、此家のかんぼうして居る善右衛門、どうせうとおれが儘ぢや。殊に、なんぼ汝が貞女立てしても、文藏は夜泊り、日泊り、吉原通ひ。あつたら者を獨り寝して、物淋しからうと思つて、惚れるはおれが情け。汝も情けを掛けてくれいやい。

ト突廻す。いやがり、兩人揉み合ふ所へ、向うより文藏戻つて来て、ずつと内へ入る。此體を見て、善右衛門を突きのける。

しづ ヤア、こちの人。

善右 ほんに、文藏。ハト悔りし。

文藏 女房ども。伯父者人。こりや何でござります。

善右 サア、これは。

しづ お前もなせもそつと早う歸つては下さんせぬ。わしやモウ、腹が立つてくならぬわいなア。

善右 イヤサ、お賤が腹立てるは、ソレ、文藏、汝が吉原通ひ、其嫉妬で腹が立つは、オ、尤もぢや尤もぢや。

しづ イ、エ、さうぢやない、お前がアノ

善右 サア、いろくになだめても、格氣は女子の役、それで癪起して腹立てるを、撫てつ擦りつ介抱最中。

文藏 女房ども。癪を起して腹立てるは尤もぢや。其方の志し、最前の金、イヤサ、道理ぢやが、此文藏も男、たとへどういふ事があつても、其方を袖には、ハテ、何もかも、とつくり合點のゆくやうに、晩にでも話さう。

しづ アイ、そんなら晩に、(ト善右衛門を見て)申し、お前と睦ましいが、あたりさはりて……エ、つんと、いふにいはれぬ。

善右 ハテ、女夫といふものは……エ、睦ましいものぢやなア。

トむつとこなし。兩人心意氣ある處へ、向うより吉兵衛、問屋の手代にて出て来て

吉兵 モシ、文藏様はお宿にござりますか。

ト内へ入る。文藏見て

文藏 ヤア、これは甲州の問屋のお手代。



吉兵 ハイ、吉兵衛でござります。此間から、毎日々々、催促に来る真綿の仕切り金。段々遅うなつては問屋の迷惑。今受取らねば、明日から取引きを止め、仲間中へ届けて来いと、親方のいひつけ。サア、仕切りを今受取りませうか。但し仲間へ届けませうか。文藏殿、どうでござりますな。しづ 申し、こちらの人。仕切りの金は、お前、今持つて行かしたぢやござんせぬか。それに問屋から、あのやうにいうて来るは。

善右 コリヤ、文藏、大かた三十兩の金も、女郎の揚げ代に吉原へ遣つたのか。しづ なんのマア、さういふ事がござんせう。ナア、こちらの人。

文藏 氣遣ひしやんな。其金は有る。……善六々々。ちよつと爰へ来てたも。

ト呼ぶ。奥より善六出る。

善六 アイ、文藏さん、何の用でござります。

文藏 イヤ、外の事でもない、明日までは大事あるまいと、呑込んで貸してやつた最前の金。伯父者人にもいひ譯、おれが面晴れ。金が出来ずば、貸したといふ様子を、汝の口から、ちよつというてもらはう。

善六 コレ、文藏さん、おれに金を貸したとは、何の事だえ。

文藏 ハテ、先刻に貸した金を。

善六 先刻の金とはな。

文藏 ハテ、物覚えのわるい。汝が先刻に、これの時の時、

ト首を縮る真似をする。善六とほけて

善六 これ、とは何ぢや。……とんと、おりや知らぬが。

文藏 ヤ。

善六 文藏さん。滅多無性に、貸したくとおつしやりますが、こりや何か、問屋の仕切りに渡す三十兩の金を、お前が吉原の女郎狂ひの、拂ひに遣うてしまつて、親仁殿の前へいひ譯無さに、其科をおれに塗り附けるのか。テモ、恐ろしい旦那殿。そりや事に依つたら、三十兩おれが借りたに、なるまいものでもないが、高て此家の居候ふ。手代同前。よもや人が實にしよまい。よう思つても見たがよい。三十兩の金、おれが借りて、どうするものか。但し又、貸したといふ慥かな證據、書いた物でもござりますか。

文藏 義理づくの金。何の書いた物。

善六 ないかえ。なんのあらう。お前が遣うた金を、此善六に塗り附けるのか。文藏さん、そりや旦那



に似合はぬ、お前はいかさま師ぢやなア。

文藏 ムウ。すりやどのやうにいうても、汝は覺えないか。知らぬか。

善六 オ、くど。

文藏 善六。いよく知らずば、此場の面晴れ。今こゝで、神起證が取つてもらひたい。

善六 神起證とは。

文藏 ハテ、貸した借らぬと互ひの争ひ、何方ぞ誠を顯はす誓言。疑ひ晴らしを大社の前で、神起證取つてもらはう。

善六 爰て大社とは湯島か、神田。差當つてそこまでも行かれまい。今こゝで誓言立てする、神前が無  
いぞえ。

文藏 イヤ、其神前は爰にある。

と最前の紙屑籠を取つて、善六が前へ出す。善六悔りして

善六 ア、コレく、文藏さん。其紙屑籠をどうするのぢや。

文藏 ハテ、これがすぐに、神の前ぢや。

善六 エ、。

文藏 此籠の中には、見世の反古。いろくのかみの寄つた所が、即ち出雲の大社。其社の前で、誓言  
立てさせうと思つて。

ト籠を明けようとする。善六留めて

善六 そりや勿體ないく。此中にはいろくの反古や、書いた紙や、又何やかや拭いた穢い紙もある。  
それを神さんに譬へるとは、減相な、お前、罰が當るぞえ。

文藏 イヤ、それでは。

ト兩人せり合ふ。善右衛門仲へ入り、籠を引つたくり

善右 コリヤ、待て。先刻にから聞いて居れば、善六、わりやうぢくと、どうやら手むさう見える。

文藏 もいひが、り。コリヤ、誓言せずばなるまいが、中取つて、おれが斯うして。

ト籠を打返す。紙屑バラく、とこぼれる。文藏、善六、紙屑の中をいろく探して

善六 ヤアく、金が無い。

文藏 ほんに、こりやどつぢや。(ト兩人悔り)。

善右 文藏、金は無いか。

文藏 エ、。



善右 ここな盗人め。(ト首筋取つて引きつける)。  
しづ エ、それは。

ト寄るを蹴とばし、思ひ入れ。

善右 善六。此女郎めを。

善六 合點ちや。

トお賤を引き附ける。善右衛門、文藏を捕へ

善右 汝が科を、あの正直な善六に塗り附けうと、覚えもない者に、貸したの、ヤレ、盗んだのと、さ  
まさまのいひかけひろいだ、うぬ。

トさんぐに打つ。お賤いろくあせり

しづ イヤく、こちの人を。

ト善六を無理に振切り、善右衛門を留める。善右衛門留められながら、お賤を抱く。兩人よろしく、善  
六、文藏を引き附け

善六 覚えもないいひかけひろぎやア、旦那でも、おれが

ト算盤にて打たうとする。文藏突きまはし、善六の腕を取つて

文藏 善六。すりや三十兩の金は。

善六 オ、こなたの色狂ひ、内の物を持出して、吉原へ通ふすそ貧乏。

文藏 なんと。

善六 證據は此狀。(ト最前の手紙を出し)紀伊國屋文藏様へ急用、縁屋松藏より。

文藏 ヤア、其手紙は。

ト取りに行くを、善右衛門、お賤を突きつけ、文藏を捕へ

善右 善六、早う讀め。

善六 色狂ひの化けの皮を。(ト手紙を開き)「わざく手紙を以て申し遣はし候、八つ橋殿段々様子悪し  
く見え候ふ間、何分身請けの相談急々になされたく、身代は即ち五百兩と申し候へば、今宵何卒  
御都合なされ、百兩ばかり手附けお遣はし下されたく候、いづれにも彼人のお命危ふく御座候。」  
文藏 ヤアく。そりや松藏より知らせの手紙といひ、最前道益殿の噂。是非身請けせにや叶はぬ仕儀  
……こりや斯うしては

ト善右衛門を振切り、善六を突き退け、表へ駈出さうとするを、お賤つかくと向うへ廻り、門の戸ヒ  
ツヤヤ締めて、立ちふさがり



しづ コレ、こちの人。どういふ様子か知らねども、今お前が駈出して行かしゃんしては、金の行き端は

伯父御の手前、いよくお前の越度そとになれば、其あとの事を、わしや案じるわいなア。

文藏 イヤ、サア、手紙の様子では、一時の間ときも打捨ておかれぬ。

しづ それほどまでに、女郎の事を。

文藏 イヤ、さうではなけれど、どうも

しづ 心が急いそかうが、氣を鎮めて、マア、此場の納まり。

文藏 ても。

しづ 必ず格氣かきで留めるとばし、思つて下さんな。

文藏 ムウ。(ト立戻り、今の手紙を見て)身請けは五百兩、手付けといつても百兩。(ト思ひ入れあつて)

ハチナア。

ト手を組みながら、ヤツと下に居る。善右衛門、又文藏を引付け、お賤それなと行くを、善六支へる。

善右 うぬ、マア、何ぼうあらがうても、これまでの放埒。吉原よりの其手紙に、身請けの相談。身請

けは五百兩。イヤモ、呆れて物が、いはれぬわいやい。

善六 三十兩もさらりと知れた手付けの足し。もう此上は、コレ、親仁殿。

善右 善六。

ト兩人、文藏にかゝるを、お賤留める立廻り。文藏此うち、とつおいつ身請けの思案にて、かまはぬ思

ひ入れ。三人立廻りのうち、奥茂太つかくとして、善右衛門、善六を引き退け

奥茂 盗んだ。

ト兩人を留めながら、お賤を圍ふ。

しづ 奥茂太。何にも知らずに、其方そなたが

奥茂 それでも、おれが、盗んだ。

善六 ヤイ、馬鹿め。盗んだくとは、うぬ、何を盗んだ。

奥茂 オ、金を盗んだ。慮外ながら問屋へやる仕切りの金を、おれが盗んだによつて、旦那は何にも

知らんせぬぞ。

善六 ハテ、うぬ、盗んだにしてやらうが、何の爲に三十兩といふ金を、どうして盗んだ。

奥茂 サア、それはなア。

善六 大枚の金、何にひろいだ。

奥茂 饅頭買うて食うてしまつた。



善右 エ、大馬鹿め。(ト奥茂太を引き退け、お賤を捕へ) コリヤ、お賤。なんぼう汝が文藏を思ひ込んで  
も、吉原の女郎に打込み、問屋の仕切りも中てくすね、手附けの足しにするといふやうな、馬鹿  
といはうか、極道といはうか、女房子の事は思はず、世間の外聞、伯父が面まで汚す泥棒め。其心  
の腐つた文藏めに、汝も又心中立てる無分別。なぜおれがいふ通りに……イヤ、おれが目鏡は  
滅多に外れぬ。此文藏めを

ト又算盤取上げ打たうとするを、お賤きつと留めて

しづ モシ、伯父御さん。こりや、お前、棒で當らにや針で當ると、事が叶はぬとて、こちらの人を。

善右 オ、坊主が憎けりや袈裟まで憎いと。お賤、汝の心柄ぢや。

しづ 現在血筋の甥御の女房、其わたしに、ママ、あらうことか、あるまい事か。モウいはにやならぬ  
コレ、こちらの人、此伯父御が、常々わたしに

トいはうとするを、文藏ちやつと引き廻して

文藏 コリヤ、女房。何にもいふな。

しづ イ、エイナア、わたしに

文藏 ハテ、日頃物堅い伯父御、心の中は知つて居る。ソレ、最前の仕儀といひ、何もかも皆おれが、

サア、文藏が放埒情弱から。コレ。(ト善右衛門を尻目にかけ) サ、色は心の外ではないか。

しづ エ、わるい合點。お前の事ではござんせぬ。あの善右衛門が、年寄りだてら

文藏 サ、其善右衛門様は、おれが爲には肉身の、現在の伯父。サア、伯父は親の片割れと、世間  
の恥は即ちおれが恥。わけて深切な貞女なお賤。おれを大事と思つてくれ、ば、何にもいふな。  
コリヤ。サア、此手紙といひ、吉原の事、さぞ腹が立たう。ハテ、腹が立たうが、今までさへ、  
ぢつと堪へた辛抱。又此上に、文藏が頼み。

ト善右衛門を指さして、お賤に何にもいふなと制す。

しづ ソレ、其お前の美しい、心に恥ぢてわたしやモウ、(ト善右衛門を睨め附け) エ、いひたいわいな  
ア。

ト兩人いろ／＼こなし。善右衛門、お賤をぢろりと見て

善右 ハテ、いふ事がありや、お賤、なぜいはぬ。コリヤ、おれは文藏が爲には眞實の伯父ぢやぞよ。  
今彼奴がいうた通り、伯父は親の片割れ。すりや親同前の善右衛門。ハ、ハ、ハ。伯父ぢやぞよ伯  
父ぢやぞよ。

しづ エ、それぢやによつて



文藏 ハテ、血て血を洗ふ

善右 伯父は親。

しづ ほんに、モウくく。(ト善右衛門をキツと見て)エ、あた憎てらしい。

ト文藏が膝へ取り附く。

文藏 可愛い、坊主に、免じてくれいやい。(ト兩人思ひ入れ)。

吉兵 モシく、文藏様、最前から待つてをりますが、仕切りの金はどうぞござります。出来ずば、仲間へ取引きならぬと届けませうか。

善右 どうでさうせずばなるまい、内のせいらく。仲間の取引き差留めの届けも、おれがぢきに廻つてとつくりと。イヤ、幸ひ問屋のお手代、同道致しませう。

吉兵 さやうなれば、あなたと御一しよに。

善右 成程、コリヤ、善六。所詮役に立たぬ文藏め。此上はおれが思案がある。問屋中へ廻つて来るうち、必ず油断すな。

トお賤、文藏こなしある。

善六 呑込んで居る。随分早う歸らつしやりませ。

善右 そりや合點ぢや。サア、お手代、ござりませ。

ト唄になり、善右衛門こなしあつて、吉兵衛を連れて向うへ入る。奥茂太あを見送つて

奥茂 ア、ならう事なら、こちの内にも、あの伯父と此奴が居らねばよいに。(ト善六を見る)。

善六 何を。又しても馬鹿な癖に差出やアがつて、すつこんでをらう。

奥茂 すつこむわい。

ト又片脇へ小さくなり居る。善六こなしあつて

善六 ほんに、何でもない事て氣を揉んだ。其加減か、殊の外草臥れた。どうて親仁の歸りも遅からうそれまで奥で、一つ飲んで待つて居ようか。

ト合ひ方になり、兩人を覗み附け、奥茂太を蹴散らし、奥へ入る。

奥茂 ハテ、親子といふものは争はれぬ。二人ともに憎らしい奴等ぢやなア。

ト奥より文吉走り出て、お賤に取附き

文吉 母様。坊は眠たいわいのうく。

しづ ほんに、抱瘡揚句で、草臥れて居やるによつて、オ、眠たいは道理ぢやが、今から寝かしては又晩に目が覺のよう。



ト文藏此うち思案して居て  
文藏 もう七つ下り。

トすつと立上る。お賤は文吉を抱きながら、矢張り下に居て  
しづ こちの人。お前又何處ぞへ行かしやんすかえ。

文藏 ヤ。(ト心付き、わざと)氣遣ひしやんな。どつこへも行きはせぬ。もうとんと、吉原もやめく。  
ト又下に居て、糞盆を引き寄せる。

しづ なぜになア。大事ござんせぬ。折角これまで行かしやんしたお前、俄かにさういはずと、矢ッ張り行たがよいわいなア。

文藏 イヤく、伯父者人の手前、其方の深切、世間の聞えもあれば、ふつつりと思ひ切つて、内に居て、商賣に精出さにやならぬ。それに付き、おりやちつと爰に居て思案せにやならぬ事がある。わが身は坊を奥へ連れて行て、ちやつと寢さしてやりや。

しづ アイく。そんならわたしや此子を寢さしてやりませう。與茂太、汝も來て、蒲團出してくりや。與茂 オット合點。サア、おかみさん。  
しづ そんなら、こちの人。

ト文吉を抱いて奥へ行かうとすを、文藏思ひ入れあつて

文藏 ア、コレく、女房ども、ちよつと待ちや。

しづ エ、何ぢやえ。

ト立戻る。文藏座りながら抱く。お賤こなしあつて

馬鹿らしい。何さしやんすぞいなア。

文藏 斯うしたところは、吉原の女郎より、又馴染みの女房。

ト腰に觸れて、お賤の巾着の鍵をそつと取出す。これを知らぬ振りにて  
しづ なにをじやらくと。(ト思ひ入れ)。

與茂 旦那さんをかし。

しづ アレ、與茂太が。

文藏 ヤ。(トちやつと離し、鍵を袂へ入れ)ソレ、坊主めを寢かしてやりやれ。

トこなし。お賤氣味合ひあつて

しづ ドレ、坊を寢かしてやりませうか。

ト唄になり、お賤、文吉を抱き、與茂太を連れて、奥へ入る。これより好みの合ひ方になり、文藏愛り



こなしあつて、最前の手紙を出して、とつくと讀み、又懐ろへ入れ、袂より今の鍵を取出し、思ひ入れあつて、そろ／＼二重舞臺へ行つて、下戸棚の引出しを鍵にて明け、中より袋入りの脇差しを取出し、目をほどき、ちよつと改めて見て、袋に入れ、腰へばつこみ、つか／＼と表へ出ようとする。此前よりお殿納戸より出かけ、窺ひ居て、此時

しづ こちの人、待つた。

文藏 ヤア、女房ども。(トはつとこなし)。

しづ お前、死ぬる覺悟かえ。

文藏 なんと。

しづ コレ。(ト胸ぐら取つて、入れかはり) わたしは格別、あの文吉は、可愛うはござんせぬかいなア。

文藏 ヤ。

しづ ほんに、これまでお前の身持ち、いつぞやより夜晝どなく、綿の買ひ出し、問屋へ行くのと、さまざまと嘘ついて、吉原ばかり。わたしやよう知つて居るわいなア。をさな馴染の女房の事は思はず、今日此頃は廿日の上も、内にとては寝て下さんせぬ。それをいはずに、見世の事から、伯父御へ氣兼ね、問屋よりは仕切りの催促、お前に知らさず、内證で、やう／＼拵へた最前の三十兩。わけて苦勞は文吉が瘡瘡、殊に、子供の大役と聞けば、身に代へ、命に代へ、神佛様のお庇に

て、輕うしまうて、ア、嬉しやと、喜ぶ間もなう今日の仕儀。ソレ、最前、善六が出した手紙の様子、慥かに身請けの金は五百兩。手付けは百兩とやら、雖まで取つて氣のわるい、文藏殿。此脇差しは親御の譲り、お前の物。それを隠して、我物を我手に盗み出すやうな、身の持ちやうがござんすかいなア。今まではさうも思はなんだが、お前が死ぬるとまで思ひ込ました、吉原の女郎づらが、わしや憎い。コレ、怪我ほどの事も、これまで随分、いはぬ嗜み。わたしも同じ女子に生れたもの、見かへられては腹が立つて、角も生える。そこをぢつと堪へて、格氣もようせぬは、文吉が可愛さ。お前に愛想をつかされてはと、遣る瀬涙が寝どころの、夜着の襟にくひついて、毎晩泣いてゐるわいなア。それに引きかへ、胴慾な文藏殿。女房の事は微塵も思はず女郎ばかりに養理を立て、なぜ死なしやんす、なぜ死なしやんす。コレ、跡に残つて、文吉やわたしや何とせう。どうせう。そりやあんまりぢや。聞えませぬ。聞えませぬわいなア。

ト續り附いて大泣き。文藏思ひ入れあつて

文藏 お賤。尤もぢや。道理ぢや。其方の日頃の深切、何といはうやうもない仕儀。併し氣遣ひしやんな。此文藏、これまで吉原へ通ふというても、さら／＼色には迷はぬ。其譯は、死なしやつた親仁様の、大恩あるお主の、其若旦那の佐野次郎左衛門様、おれが大事に世話するは、常々其方に



も話した通り。其次郎左衛門様が勘當受け、國を立退くほどに、深ういひかはしてござる吉原の女郎八つ橋を、此廿日以前に、思ひ違ひの譯あつて、万字屋の二階で手を負はせ、處の習ひ、ソリヤ、心中、無理殺しぢやと、ぱつと噂のあるところを、押し鎮め、段々おれが頼み廻つて、随分世間へ知らさぬやうに、八つ橋が疵養生。本復するまで、次郎左衛門様は、廓に人質。其八つ橋が生さぬ仲の親は、大の悪黨。金づくで願はさぬやうと、又吉原の親方も取り鎮め、手入れ、足入れ、金の入る事ばかり。色は表に、心の底は、御主人へ忠義。手負ひの八つ橋心許なく、早う身請けをすれば、次郎左衛門様は人殺しの科を免れるとの知らせ。それに又、紛失の籠釣瓶の茶入れ、詮義し出さねば、お國へ立たず。詰まるところは、何でも若旦那を、元の武士にせねばならぬ。歸參さへ叶へば、元の舟橋の御家中。さすれば、たとへ八つ橋が死んでも、御身に凶事はないと、人に語らず、一人して、毎日駆け歩く文藏が身の上。現在女房の其方をはじめ、釋迦ても、放埒情弱と思はにやならぬ。おれが本心明かすからは、必ず疑ひ晴らしたも。コレ、お賤、此頃の心算は、中々口でいふやうな事ではないわい。

とお賤様子を聞いてこなし。

しづ そんなら、お前は、死ぬる覺悟ではござんせぬかえ。

文藏 めつさうな。今いうた通り、次郎左衛門様を世に出すまで、滅多に死んでたまるものか。  
しづ それに又、脇差しは。

文藏 仕盡したこれまでの金の工面、千法盡きて、親の譲りの此備前國行。是非なう代なして、彼の籠釣瓶の茶入れを。

しづ ソリヤ、お前、眞實、ほんまに。

文藏 たとへ死ぬるといっても、勿體ない、親の譲りの脇差しを、なんの死なう。

しづ アレ、又、いまはしい、そんな事。

文藏 氣遣ひしやんな。命が大事、死にはせぬ。此脇差しを、打ち殺すのぢや。

しづ ア、嬉しや。聞いて心が落ちつきました。さうとは知らず、女房の身で、勿體ない、男に異見。あやまりました。コレ、堪忍して下さいませえ。

文藏 何の堪忍。あやまるはおれが方から。お賤、これまではさぞ

しづ モウく、何にもいうて下さるすな。此上は、若旦那のお身の上。さうして、モシ、籠釣瓶とやら、大事の茶入れの有り所はえ。

文藏 仲通りの道具屋、唐物屋小兵衛といふ者が、慥かに持つて居る。それで脇差しを、道具屋なれば



しづ 又肝心の八つ橋殿の、身請けは五百兩。手附けは百兩とやら、今背中に。  
文藏 そりや又、思案があらう。ヤア、茶入れの方から、ちよつと行つて来よう。  
しづ そんなら、お前は。

文藏 仲通りの道具屋……ア、又留守でなければよいが。

ト雨車になる。

しづ アレ、雨が降るさうな。

文藏 イヤ、時雨ぢや。大事あるまい。

しづ でも、傘持つて行かしゃんせ。

ト掛けてある傘を取つて、「コレ、もうし」トひろげる。善右衛門が隠した金、亂れてバラ／＼と落ちる

文藏 取り上げ

文藏 ヤア、こりや最前の三十兩。

ト善六出かけ居て

善六 其金は。

ト取りにかゝる。文藏見事に投げる。

しづ どう廻つても、お前の爲に、わたしの志し。それも一しよに。

文藏 女房ども。

ト戴き、門口へ出る。

善六 イヤ、滅多に文藏

ト又行くを、お賤よろしく押へ

しづ こちの人。

文藏 よう留守しや。

ト門の月ヒツシヤリ。傘さして向うへツイと入る。善六起き上がる。お賤、紙屑籠を冠せる。よろしく

幕

造り物、三間の間、上の方に臺所口、正面に誂への大連子、これに御貸し座敷と書きし板看板を掛け、  
下の方玄關先の模様、先も、夜の景色にて、懸け行燈、軒吊りの提灯あり。爰に仲通り道具屋仲間、  
と書いたる提灯。すべて兩國元山町三河屋の、り。幕の中より喜助、木綿やつし、股引の形にて、風  
鈴蕎麥の荷を下し、火木場の三姉は序幕の形、頬冠りして蕎麥を食つて居る。時の鐘にて幕明く。  
ト仕出し大勢あつて入る。三姉、蕎麥を食ひながら



三婦 蕎麥屋どん。三河屋も普請が出来て、強氣に賑やかだノ。

喜助 さやうサ。今夜はそれに道具屋仲間の、寄合ひてござります。

三婦 道理で宵から弾きたてるワ。イヤ、又、今ぢやア兩國で、出し物はよし、座敷は廣し、三河屋三河屋といふ筈よ。

喜助 イヤモウ、向う兩國では、きつい繁昌てござります。

三婦 貴様の蕎麥は旨い蕎麥だ。もう一杯下さい。

喜助 がうせいにあがりますな。

三婦 ちつとぎがあつて傳馬町まで行くのだが、これから腹を丈夫にして 居催促と出にやならない。

ト喜助蕎麥をこしらへ出す。三婦がつかいめて掻ッ込み、財布より小銭を出し

五膳ぶりだノ……五に足りない。負けて下さい。

ト錢を渡し、行かうとする。

喜助 ア、モシノ。めつさうなお客だ。五膳ぶりて丁度八十。こりやアたつた廿七文しかござりませぬ。(ト留める)。

三婦 なんだ。五膳ぶりだ。腹がへつたから食ふやうなもの、水雑炊の煮がらしを見るやうな蕎麥が

三膳と食へるものか。

喜助 それでも、お前、五膳つけて廿七文。あまつさへ仙臺錢が二文まで。夜の商ひだ。ぢらさすと、丁度拂つて行きなさい。

三婦 いけ外聞のわるい。食ひ物の事だと思つて、料簡して行きやア、猿唐人め、おれを食ひ逃げにしやアがる。

喜助 錢を寄越さにやア、食ひ逃げだ。

三婦 五膳ぶり拂つて、まだ不足か。たは事つくつと、荷ぐるみ爰へぶツ倒すぞ。

喜助 氣の強い親仁だ。高飛車を怖がつて、夜の商賣が出来るものか。一文缺けても、逃がしやアしないぞ。

三婦 いひかけを吐かす大騙りめ。

喜助 食ひ逃げ親仁め。待ちやアがれ。

ト兩方立ちかゝり、捨ぜりふ宜しく、摺み合ひにかゝる時、三河屋の中より小兵衛、序幕の形、數右衛門刀を提げ、出て来て

數右 小兵衛。大きに馳走になりました。



小兵 イヤ、まだお話しもござりますれど、何を申すも、仲間の寄合ひ。明日は是非お屋敷へ、私しが上りますてござります。

数右 必ず来ておくりやれ。(ト行かうとして、三婦を見附け)三婦ではないか。何事の口論。マア、待ちやれ。(ト引き分ける)。

喜助 口論ぢやアない、食ひ逃げだ。親仁め、其處を動きやアがるな。

ト叫ぶるを、小兵衛見兼ねて喜助を留め

小兵 コレサ、商人。おとなしくもない。マア、靜かにして譯をいやれサ。

三婦 恐れ多い奴だ。大木場の三婦様に向つて食ひ逃げとは、イヤ、怪しからぬ野郎だ。踏み殺すぞ。

ト蕎麥の茶碗を取つて打ち附ける。数右衛門留めて

数右 これはしたり。聊かの事に大人氣ない。料簡しやれ。

喜助 いやだ。料簡もへちまも無い。食ひ逃げの上に、商ひ道具をぶち毀されちやア、濟まされない濟まされぬ。

小兵 ハテ、往來で聲高に。また間違ひもあるものだ。い、ワ。商人は相互ひ、これて料簡してゆきやれ。

ト紙入れより南鐐一つ出して、喜助にやる。

三婦 モシ、小兵衛さん、馬鹿々々しい。彼奴は騙りてござります。

小兵 ハテ、ようごんす。細元手の商人。こなさんも萬更知らない顔でもない。不思議な縁で、仲の町の縁屋で、近附きになつた大木場の三婦殿。外の者のやうにも思ひませぬ。

三婦 イヤモウ、面目次第もござりませぬ。併し彼奴は皿一枚で南鐐一つ。うまいものだ。

ト喜助氣の毒さうに

喜助 親方。これには及びませぬ。いけツ太いあの親仁め。

ト又寄らうとするを、数右衛門下の方へ引き分け

数右 コレサ。小兵衛が志し、四の五といはずと持つて行け。

喜助 でも、あんまりな我慢親仁。

数右 ハテ、裁人に入つた身共も武士。いひ分あらば、相手にならう。

喜助 ナニサ、お前。お庇で元値に致しました。(ト蕎麥の荷を擔ぎあげ)ほんに、危なく蕎麥五杯

小兵 無駄をいはずと、早く行きやれ。

喜助 大平しつぽく。にうめんや素麵。



ト通り神樂になり、喜助向うへ入る。三人残つて

三婦 外聞のわるい。小兵衛様、彼奴も物師でござりますな。

小兵 イヤ、あの男より、こなさんの手際はかねて知つて居る。八つ橋が親判、大木場の三婦殿。シテ萬字屋の出入りは、どうなりました。

三婦 イヤ、モウ、どうのかうのものなし。てんどへ出せば、下手人は佐野次郎左衛門。兎も角も身請けさせてくれろと、縁屋からの挨拶で、養生代も五十兩、傳馬町の紀文から受取る筈で、其出入りに、今行くところてござります。

數右 ハテ、さうなつては、日頃から、佐野に意趣ある此數右衛門。小兵衛はいよく茶入れの事を。

小兵 コレサ。聲高に、門口で、滅多な事をいはつしやりますな。幸ひ、三婦にも折入つて、話しておきたい事もあり、數右衛門様、座敷を替へて、飲み直さうてはござりませぬか。

數右 いかさま、親仁も久し振りだ。一つ飲んだら、どうあらう。

三婦 御馳走ならば、お辭儀なし。……併し、紀文に五十兩、養生代を受け取るまでは、今夜はちつと大事の體、滅多に酔うてはなりません。

數右 サア、其事に附いても、密々に話しておきたい。

小兵 數右衛門様。マア、お先きへ。

三婦 飲まないも損だ。お二人様。

數右 親仁、來やれ。

ト唄になり、數右衛門、小兵衛こなしあつて、三婦附いて奥へ入る。時の鐘になり、花遣より以前の文藏、傘をさし、袋入りの一腰を差し、思案しながら、出て來て

文藏 宵の口はばらついたに、思ひの外に、空も晴れた。晴れぬはおれが胸の中。三方四方取り亂したせめて一方方附けてと、仲通りまで尋ねて行たに、又出違うて折わるう、此兩國の三河屋とやらに、道具屋仲間の參會との事。……オ、まだ寄合ひも果てぬかして、きつう座敷も賑やかな様子。取込みにはあらうが、誰ぞにちよつと呼出してもらはう。さうぢや。(ト本舞臺へ來て)モシ。ちつと物が尋ねたうござります。お頼み申すく。

男 ハイく。どなたでござりますな。

ト若い者出て來る。

文藏 イヤ、卒爾ながら、内方へ、仲通りの唐物屋小兵衛様が、來てはござりませぬか。

男 ハイ、寄合ひは道具屋仲間、承つてあげませう。



文藏 モシ、さやうなら、御面倒ながら、ちつとお目にかゝりたいと、呼び出さつしやれて下さりませ。  
男 ハイ、畏りました。

ト奥へ入る。

文藏 嬉しや。どうぞ間違はぬやうに、唐小にちよつと逢ひたいものぢやが。

ト合ひ方になり、小兵衛、楊枝を遣ひながら、出て来て

小兵 誰も尋ねる筈はないが、唐物屋小兵衛に逢ひたいとは、モシ、こなさんでござりまするか。

文藏 ハイ、此間中たびお宿へお尋ね申したれど、お留守でお目にかゝりませぬが、紀伊國屋の文藏でござりまする。

小兵 ヘイ、傳馬町の紀文さん。何ぞ商賣向きの御用で。

文藏 されば、ちと折入つて、お頼み申さにやならぬわけ。

小兵 商ひ口とあれば、まづ耳より。(ト奥へ思ひ入れあつて)シテ、お頼みの様子はナ。

文藏 サア、別の事でもござりませぬが、其許様の方に、籠釣瓶の茶入れを、御所持なされてござるよし。どうした仔細で。

小兵 成程、わしが商賣で、籠釣瓶でも活けたごとも、賣り買ひするが道具屋仲間。商ひ物で持つて居

るに、不思議な事はござんすまい。

文藏 イヤ、其籠釣瓶の茶入れの事は、もと下野の舟橋家に、代々傳はる重寶にて、佐野次郎左衛門様の預り。何者に盗まれさつしやれたか、其越度にて浪々の身の上。御苦勞なされでござれども、荒立て、詮議すれば、何處からどう廻つて、幾人の難儀にならうも知れぬ。ぢやによつて、ひそかに取戻し、あなたのお身の申し譯、明りを立てる大切な茶入れ。幸ひ、こなさんの方に御所持なさると聞いて

小兵 イヤ、どこの何處の何方の重寶かは知らぬが、わしが見世へふりに持つて来て、賣らうといふのを、買つておいた籠釣瓶の茶入れ。ハテ、賣らうと思つて買つておいた代物、金にさへなりや、どなたでも。しかも今日は仲間の寄合ひ。もし望み手もあらうかと、幸ひ持つて來た此茶入れ。(ト袋入りの茶入れを出し)さういふ譯なら、こなさんへ、成程、賣つて進ませせう。

文藏 イヤ、それは千萬忝い。(ト嬉しきこなし)此方でも心當てに、持ち合せた三十兩。暫くこれを手附けにして。

小兵 イヤ、それぢやア渡されぬ。値段は小判で二百兩。何と、廉いものか。外ならもつと値賣りもしようが、譯を聞いたら見知り越し。めつさうな事もいはれまい。二百兩で手を打ちませう。



文藏 成程、値段は望みの通り。

小兵 御承知ならば現金賣り。大事の代物、掛けにはならぬ。

ト持つて行かうとする。

文藏 でも、途中なり、二百兩の大金。(ト留めて)成程、金子渡しませう。(ト腰に差したる脇差しを出し)御不肖ながら、小兵衛さん、あなたも商賣、金の抵當に、これを預つては下さるまいか。

小兵 そりや何てごんす。

文藏 恥かしながら、此脇差しは、親の譲りの備前國行。ちつと外にも金の入用があつて、心當てには持つて来たが、何れの道にも其茶入れは、手離す事のならぬ品。どうぞ聞分けて、金才覺の出来るまで、抵當に取つて、其茶入れを、なんと渡しては下さるまいか。

小兵 ドレ。(ト脇差しを取つて見て、思ひ入れあつて)ようごんす。それほどにはつしやるなら、此一腰を三十兩の金に添へ、内取りにして、茶入れは貴様に渡しませう。併し、世間一統に、手付けは三日ぎり。三日が過ぎると、此脇差し、賣拂ひ、金にするが、其時いさくさはいはれぬぞや。

文藏 いかにも、三日のうちに金を揃へて、屹度取りに参りませう。マア、それまでは、手付けやら、質物やらに此脇差し。

小兵 三十兩添へて受取つた。

ト取上げる。此うち後ろへ三婦出て居て

三婦 紀文さんの金なら、五十兩の内取り、マア、わしが方へ貰ひませう。

ト引つたくる。文藏悔りして

文藏 モシ、こなたは、な、な、なんてわしが金子を、無理無體に。

ト留めるを、叩き退け

三婦 無體とは、何だ。忘れはしまい、八つ橋が親の、大木場の三婦を。年寄りだと思つて、馬鹿にするのか。養生代の五十兩、一文缺けても濟まないぞよ。

ト文藏當惑して

文藏 成程、其儀も此方より、御挨拶とは存じながら、

三婦 いはつしやるな、文藏どん。存じながらとは、常の貸し借り。獨參湯で繋いでおく、今をも知れぬ娘の八つ橋。養生代で料簡してくれろと、こなたの方から頼んで寄越したによつて、次郎左衛門は憎けれど、所詮疵物になつた八つ橋、こいつは料簡どころだと思つて、思案を附けた五十兩。耳を揃へて今渡しやれ。



文藏 サ、御尤もぢや。其事も、種々様々に苦勞致せば、遅うて明日。

三婦 馬鹿をいやれ。命代りの五十兩、渡さにやい、ワ。これからすぐに、お願ひ申す分の事サ。

ト立ちかゝるを

文藏 でも、そりやあんまり。此方も全く粗略には致さぬ。

三婦 そんなら、見掛けた三十兩、五十兩につばめて受け取るべい。

文藏 ぢやと申して、大切な、茶入れの手附けに致す金。

三婦 ならにやア、すぐに代官所か。

文藏 そこをどうぞ、今暫く。

三婦 そんなら、金か。

文藏 サア、それは。

三婦 サア、

文藏 サア、

二人 サア、

三婦 エ、いけ自烈たい。どうするのだ。

ト文藏を引掛ふる。小兵衛せいら笑つて

小兵 イヤ、此小兵衛も、見る前で、忽ち三十兩減りの立つた取り引きは、快くもないから、こりやモウ茶入れは賣られない。

ト取上げる。此時後ろへ數右衛門出て来て

數右 小兵衛。最前の籠釣瓶の茶入れ、二百兩で身共へ賣つてくりやれ。

小兵 いかさま、何か小むづかしく搦んだ代物。廉けれどあなたの方へ上げませう。

ト渡す。文藏あわてし留め

文藏 モシ、お侍ひ様。仔細あつて外へ渡せぬ此茶入れ。どうぞざつても、私しが買ひ求めにやアなりませぬ。(ト取附く)

數右 慮外吐かすな。此方も大枚の金子で買ひ求める。町人風情の及ばぬ事だ。(ト突き退ける)

文藏 イ、ヤ、無體に此茶入れ、人手に渡せば拙者が命。生きても、死んでも

ト留めるを、小兵衛むこく突き退け

小兵 おぬしが死ぬのを、數右衛門様や、おいらの知つた事ぢやアない。

文藏 イヤ、わしばかりが命でない、大切な







數右 備前國行。

小兵 實の茶入れ。

ト腹より出して見せる。

數右 打つておけ。しやんく。

三婦 も一つせい。しやんく。(ト三人手を打つ)

小兵 きほひ口だに、數右衛門さん。

數右 今夜もすぐに吉原へ、

三婦 柏屋から、猪牙でござりませ。

數右 三婦はあとから。(ト囁く)

三婦 呑込みました。

小兵 サア、ござりませ。

ト唄になり、小兵衛、數右衛門こなしあつて、花道へ入る。文藏氣が附いて起きあがり

文藏 小兵衛め。汝を。

ト立ちかゝるを、三婦むこく引据ゑ

三婦 動きやアがるな、大騙りめ。人の命が百兩や二百兩で買はれるものか。そこを情けに料簡して、

五十兩の詫び代。今取つた三十兩、あと二十兩はどうするのだ。

文藏 サ、詫代の心當てに、女房が志しの三十兩、親の譲りの一腰まで、内をくるめて持つて来て、

うまく彼等に騙し取られ、まだ其上のぶち打擲。おれは死んでも、生きてもちやが、大切な茶

入れを打割られ、よう安穩で二人の奴等。

ト又立ちかゝるを、上の方へ突き廻し

三婦 茶入れくと澤山に、それをおれがかまふものか。娘の敵を取らせるとも、詫び代揃へて渡すと

も、方を附けやれ。どうするのだ。

ト胸ぐらを取つてござり廻す。花道より序幕の遣り手お杉、小提灯を提げ、出て来て

さき 向う兩國の三河屋とやら。……オ、爰だく。(ト本舞臺へ来て、文藏を見附け)ヤア、紀文さん。

お前はマア、今日の約束をどうしなさる。待つてもく沙汰がないによつて、船て出て来た。た

つた今唐小さんや數右衛門さんに、橋の下で逢うて聞けば、爰にござるとの話し。八つ橋さんの

身請けの金は、どうだなく。出来やしたかえ。

ト文藏うろくして物のいはれぬこなし。三婦、お杉、兩方より立寄つて



三婦 命代りの五十兩。

すぎ 身請けの五百兩。

三婦 きよろしくせすと、物をいやれ。

ト突ツかゝる。文蔵ちつと思案して

文蔵 成程。八つ橋殿の身請けの五百兩、養生代の五十兩、身を粉に砕いても渡しませう。なれども、

不慮に大切な茶入れを失ひ、思案も智慧も、途方に暮れた今此時。このところを今暫く。

すぎ エ、小自烈たい。又待つてかえ。コレ、縁屋の兄さんも、手紙でいつて寄越しなかつた通り、死

にか、つて居る八つ橋さん。金が出来にやア否でも應でも、てんどへ出さにやアならない出入り。

幸ひ爰に親判の三婦さん。料簡附けて見なさい。

三婦 料簡といつて、此上に、四の五といやア代官所。次郎左衛門めをどうするか。堪忍袋の緒が切れた。

ト行かうするを、文蔵纏つて留め

文蔵 いかにも道理。親判の其許、お腹の立つはお道理なれど、どうぞ、とても御料簡に。

三婦 もう否だわえ。今日まで待つた養生代。

文蔵 サア、そこをどうぞ、今暫く。

すぎ 此方は身請けの五百兩。

文蔵 それも何卒明日まで。

すぎ 待たれやせまい、紀文さん。ゆるりとした話しぢやアござりやせぬわな。

ト向うより道益、以前の形にてあわて、出て来て

道益 ヤレ〜、文蔵殿。今吉原から戻りましたが、気の毒や八つ橋殿は、とう〜臨終致されま

した。

文蔵 エ、。

ト驚く。お杉、三婦も恟りして

杉三 それを聞きやア、片時も

ト行かうとするを、文蔵うる〜して、兩人を留め

文蔵 モシ、道益様 そりや實正。

道益 ハテ、臨終まで膏藥を打ち替へたり、獨蓼湯を飲ませたり。ア、いぢらしい目を見て來ました。

三婦 可愛や、娘。

すぎ モシ、三婦さん。うろたへて居るところぢやない。



ト又行くを、文蔵いろ／＼して留める。三婦、お杉はあちこち突き廻し、道益も留めるを、兩人むこく振り切り

すぎ なんでも敵は次郎左衛門。

三婦 下手人に出るを、待つてうせろ。

ト文蔵を突き退け、三婦、お杉向うへ走り入る。道益もうろ／＼して

道益 テモ、氣の毒な文蔵殿、ひよんな事になりましたの。

ト文蔵が顔を見る。文蔵しほ／＼と立上り

文蔵 せう事がござりませぬ。定まる因果、覺悟の前。……コリヤ、文蔵が身の上も。

道益 どうしました。

文蔵 イヤ。一思案致しませう。

道益 コレ、其やうに氣を落す事はない。もう四つ前だ。サア、これから連れ立つて行きませう。

文蔵 ハイ。私しはまだちつと、横綱に寄る處が。

道益 そんならあとから、……ア、ヤレ／＼。いかい苦勞をさつしやるのう。

トこなしあつて、道益引返し花道へ入る。文蔵ちつと思ひ入れあつて

文蔵 いかにも因果の寄合ひでも、思ひし事も賜の味、ア、つれないは、命だなア。

ト時の鐘、読への唄になり、文蔵しほ／＼と向うへ入る。道具廻る。

もとの紀伊國屋の道具になり、門口の戸を締め、二重舞臺ずつと上の方に、お芳、寢所に蒲團着て寢て居る。はるか下の方に與茂太、これも蒲團がぶつて寢て居る。九つの鐘、合ひ方にて道具留る。

ト暫くあつて與茂太、蒲團の中より頭を持ちあげ、あたりを見て起きあがり、禪を長うしてそろ／＼とお芳の方へ行つて、寢息を窺ふこなしあつて、戸棚を明け、菓子盆を出し、菓子を掴み、もとの寢所へ歸り、ぐづ／＼と蒲團の中へ入り、煙管を蒲團の突ツ張りにして、菓子を食つて居る。奥にて

善六 馬鹿よく／＼。

トこれにて與茂太ちやつと煙管を外し、蒲團をかぶる。善六奥より出て

與茂太めはもうふさつたか。コリヤ／＼。

ト引摺り起す。與茂太菓子を咬へて、寢た顔して居る。

馬鹿の癖に、ようふさる奴ぢや。

トこなしあつて突き放す。與茂太グニヤ／＼と他愛なき體にてこける。善六、お芳の方を見て、こなしあつて、お芳に寄り添ふ。お芳恠りして

よし 誰ぢやく／＼。



善六 シイ〜。おれぢやわい。

よし エ、善六さん。何をぢやら〜と。

善六 コリヤ〜。ぢやら〜ぢやないわさ。人は大概目元で知れる。君とわれとは有馬の松よ、藤にまかれて

トし〜とこなし。お芳振り切つて逃げるを追ひ廻す。奥茂太起きて見てをり

奥茂 ハ、ハ、ハ、ハ。

ト笑ふ。善六悔りして

善六 ヤイ〜、馬鹿め。おのれ、何を笑ひをる。

奥茂 イヤ、有馬の松ぢや。

善六 ヤ。

奥茂 藤に突かれて寝とござる。人は大概目元で知れる。

ト善六が眞似をする。

善六 エ、馬鹿め。何を吐しをる。

ト善六にて叩き廻す。

奥茂 アレイ〜。おかみさんいなア〜。

善六 汝を。

ト追ひ廻す。奥茂太逃げる。奥よりお賤出て来て

しづ これはしたり。騒々しい。何事ぢやぞいやい。

善六 イヤ、馬鹿めが寝惚けて大騒ぎぢや。

奥茂 ア、コレ〜。寝惚けたとは胴慾ぢや。人は大概目元で知れる。

善六 これは情けない。(トこなし)。

奥茂 君とわれとは有馬の松よ。

善六 べら棒め。汝の相手になつて居ては果しが無い。よい〜。もう九つ打つたから、親仁殿の迎ひに行つてかうわい。

トぶら提灯に火をとます。お賤こなしあつて

しづ ハテ、伯父御さんは、歸らしやんせいでも、大事ないわいなア。

善六 イヤ、こなさん達は勝手はよからうが、連れて歸つて、内のせいらくさせにやならぬ。

奥茂 コレ、藤に巻かれて寝とござる。



善六 エ、しつこい奴ぢや。……ドレ、行て来う。

ト合ひ方になり、善六提灯持つて向うへ入る。奥茂太矢張り煽て居る。お賤思ひ入れあつて

しづ コレ、お芳。いひつけておいた事、明日の朝と思つたが、善六が出て行つたこそ幸ひ、今の間に合點か。

よし アイ。そんなら奥の包みも

しづ 早う取つておぢや。

よし 心得ました。

トお芳奥へ入る。お賤こなしあつて

しづ コレ、奥茂太。汝は矢ッ張り其處に居て、伯父御や善六が歸つて来るから、ちやつと知らせいよ。

奥茂 おれが張り番。合點ぢや。

ト戸をピツシヤリ閉し、申より押へて居る。お賤箆筒の引出しより、小袖着物、子役のも段々に取出し

大風呂敷の中へ包み、重れる。奥茂太不思議さうに見て居る。奥よりお芳風呂敷包みを持って出る。

よし モシ。お前のお小袖、残らずこれへ。

しづ 此箆筒のも、大かたこれで。

ト右の風呂敷に包む。奥茂太そろそろ側へ来て

奥茂 ハ、ア、さてはおかみさん、これを曲げるのぢやな。

しづ こちらの人の身の上に、無ければならぬ身請けの手附け、百兩は出来ずとも、せめて半分五十兩、拵へて進ぜたい。わしが小袖を残らず、足らずば、坊が着物まで。

よし そりやおかみさん、あんまりな。現在男を寝取られる、女郎の身請けの金まで、お前さんが拵へるとは。

しづ ハテ、何をするも、文藏殿が大切さ。何にもいはずに、コレ、お芳。奥茂太も連れて、いつもの通り、出入りの婆さまを、頼んでやつてたも。

トいひく、風呂敷へ包んで渡す。

奥茂 お芳、待て。……おかみさん、そりやよしにして下さんせ。

しづ 何を馬鹿が、汝が知つた事ではない。

奥茂 イヤ、知つて居るゆゑ、留めるのぢや。(トこなしあつて) コレ、お前の物は男の爲、得心づくてさんす事ぢやによつて、かまはぬけれど、あの文吉さんの着物は、遣つて下んすな。(トいひいひ背負ひ葛籠から出して来て) 其代りに、おれが物。……コレ、こりや一昨年せと、しの仕着せ。……



れは去年の。まだたつた一度はちやせぬ禪もあり、帯もある。これを皆遣つて、坊さんの着物ばかりは、質屋へやつて下んすな。……一體、聞えぬは旦那さんぢや。女郎ばつかり可愛がつて、お前や文吉さんや、此奥茂太の事を何とも思はぬが、おりやどうした拍子の瓢箪やら、文吉さんが可愛うてならぬわいなア。

トお賤も思ひ入れあつて

しづ オ、よういうてくれた。ア、忝い。併し、汝が物を借るには及ばぬ。ナウ、お芳。

よし アイ、さうでござります。奥茂太殿の物は。……

奥茂 イヤ、お芳、大事な。コレ、おかみさん。お前はわしをあなづらんすの。

しづ なんのいやい。

奥茂 そんなら、これを遣つて下んせ。

よし モシ、あのやうにいひますによつて。

しづ 成程、あれが志し。そんなら一しよにして、早う持つて行つてたも。

よし サア、奥茂太殿。

奥茂 合點ぢや。

ト風呂敷包みを背負ふ。お芳も包みをかゝへる。

しづ 必ず道を用心せい。

奥茂 ハテ、さすものぢやない。

よし 連添ふ殿御の爲ぢやとて

奥茂 悋氣をせずに我着物を、コレ、此やうに、質に

しづ 沖津白浪、龍田山。

奥茂 さぞ旦那さんは、猪牙に乗つて、

しづ 風ひかしやんせねばよいが。

ト唄になり、奥茂太、お芳、風呂敷包みを持つて、向うへ入る。お賤跡見送り、こなしあつて、戸を締め、奥へツイと入る。これより夜更けの體、しつほりとした合ひ方にて、文藏以前の姿にて、手拭ひにて頬冠りして、兩手を組み、思案しいく出て来る。下座より番太郎時廻りにて、拍子木を打ちながら出て来て、文藏の姿を不思議さうに見て、顔をさし覗き

番太 これは兎相な。お前は文藏様。今時分に、エ、さては噂の通り、吉原歸り。それにしてお早うござります。ハ、ハ、ハ、イヤ、もうお休みなされませ。

ト拍子木を打つて向うへ入る。文藏これにて心附き、あたりを見て



文藏 最前の仕儀、もう内へは歸らず、すぐに兩國の上から身を投げやうと思ひつめ、ふと文吉が事を思ひ出して、疱瘡は仕舞ふし、常の遊び事から育ちから、手を缺いたら、どうしてあらう、斯うしてあらうと、死ぬる今でも坊主がおひ先き、思ひく、兩國橋も過ぎて、ツイわが門口。……ハテ、子といふものは詮ないものぢやな。深切に思うてくれる、お賤が事はさほどにも思はねど、坊主めが事は……ア、どうぞ寝顔など、ちよつと一生の別れ、暇乞ひして

ト本舞臺へ來り、内へ入らうとして、氣を變へ

イヤ、男のやうにも無い。

ト思ひ直し、又向うへ行かうとする。向うより人影見えるこなしにて、舞臺へ立戻り、橋が、ひやあひの戸を明け、隠れる。此うち始終合ひ方。夜更けの景色にて、向うより伊平次、泥棒の形にて、金挺を持ち、うそ、出て來て、本舞臺門口へ來て、戸口を窺ひ、明けようとして、ひやあひを見附け、明いてあるゆゑ、幸ひといふこなしにて、内へ忍び入る。向うより火の廻り、金棒引いて出て來て、すぐに下座へ入る。暫くあつて、上の方の板扉を、中よりこぢ破り、伊平次ずつと出て、あたりを窺ひ、のさ／＼と二重舞臺へ上り、簞笥へかゝる。此うち文藏、伊平次が出た穴より窺ひ出て、伊平次を見附けて、さし足にて、見世の方、橋が、りへ隠れる。伊平次こなしあつて、簞笥の引出しを抜き、胸りして、又下の引出しを抜いて見て、これも無いと驚き、又次ぎを見ても何も無いゆゑ、いろ／＼思ひ入れあつて

伊平 ハテ、見かけによらぬ。テモ、薄い内ぢや。

ト呆れたこなしある。文藏をろ／＼窺ひ出て、落ちてある金挺を取上げて、腰を掻く。伊平次胸り倒しながら、逃げようとするを、文藏捕へる。振切る。兩人立廻りのうち、行燈打返し、暗がりにて文藏、伊平次を盲ら打ちに金挺にてさん／＼に打搦るところへ、向うより善六提灯提げ、善右衛門と連れ立つて出る。

善右 文藏めは又出てうせたな。

善六 どう矯め直しても、彼奴はいけませぬぞや。

善右 あれておれが思ふ通りに。(トいひく)本舞臺へ來て)コリヤ、戻つたぞよ。馬鹿め、明けをらぬか  
明けをらぬか。

ト無性に戸を叩く。文藏胸り、うるたへ、又上の方の板扉の中へ隠れる。伊平次よろしくあるべし。表よりは

善六 親仁殿が戻つてゐるが、何奴も起きをらぬか。

二人 明けをらぬか。

トやましくいうて戸を叩く。奥より

しづ アイ／＼。今明けてあげますわいなア。……せはしない。(トいひく)二重舞臺より下りて)これ



はしたり。行燈が消えてある。(ト此拍子に伊平次に突當り、悔り)ヤ、爰に誰か寐て居るは。

：ヤア、こりや泥棒ぢや。盗人が入つてゐるわいなア。

ト飛退き、慄うて居る。これを聞き、外にて

善右 ヤア。内へ盗人が入つてゐるとは。善六。

善六 親仁殿。(ト兩人悔りして、戸をこぎ明けて内へ入り)大かた此奴ぢや。

ト肩息になつてゐる、伊平次を押へ附ける。善右衛門も立騒ぎ

善右 マア、これで縛れ。

ト最前の荒縄を取つて来て渡す。善六と二人して引き立る。伊平次足の立たぬこなしにて、ぐにやくと倒れる。

善六 ヤア、此奴は腰が立たぬが、さては屋根越しに踏み外して落ちたか。

善右 お賤、さうかく。

しづ サア、わたしやどうぢや、ら。

ト矢張り怖がつて居る。

善右 ハテ、何も其やうに怖がる事は無い。泥棒めを捕まへておいたれば、氣遣ひはない。何も失せた

物は無いか。とつくりと内を詮議せにやならぬ。マア、あの箆筒が氣ぶさいな。

ト行かうとするを、お賤悔りして、ちやつと留め

しづ ア、コレ。モシ、あの箆筒の中は、改めいごも、ようござんすわいなア。

善右 ハテ、よいでは、済まぬわいやい。

しづ それでもあの箆筒はな。

善右 どうも心元ない。

ト留めるお賤を引き退け、二重舞臺へつかくと行つて、箆筒の引出しを明け

そりやくこそ無いワ。

しづ エ。

トはつとこなし。善右衛門又下の引出しを明け

善右 これも空ぢや。此次ぎは。

ト段々明けて見て悔りする。此うちお賤、一度々々ハア／＼と思ひ入れ。善右衛門こなしあつて

テモ、早い事をしをつたナ。何でもこりや相摺りがあつてしをつたに極まつた。善六、其奴にいはせい。



善六 合點ぢや。コリヤ、何處へ逃した。相摺りを吐かしやアがれ〜。

ト善右衛門と一しよにせちがふ。お賤、ふと、こなしあつて

しづ オ、さうぢや。ほんに、あの箆筒の小袖は、幸ひその、盗人が盗んだのぢやわいなア。  
兩人 何が幸ひな事。盗んだに極まつた。サア、吐かせ。どうぢや。

ト伊平次苦しきこなしあり。

伊平 ア、モシ、其やうにむがうせずと、マア〜とつくりと聞いて下され。さりとはお奇麗な内  
方で、悉皆禿山へ柴刈りに行たやうに、最前からうろついてばつかり。まだ小裂れ一尺、箆片し盗  
つた覚えはござりませぬ。これが違ひなしのまんのわるさ。仲間はずれの同類なし。

善六 イヤ、盗人猛々しいと、こゝな横着者めが。

善右 さうぢや。おのれ、箆筒に入れておいた小袖は、残らず盗んだに違ひはあるまい。

しづ アイ、違ひはござんせぬ。箆筒の小袖はもとより、坊が物まであの盗人が

伊平 イヤ、コレ〜、女中さん。お前までが其やうに、女子だてら執成しはしてくれず、お前までが  
覚えもないおれに。

しづ サア、それでも氣の毒ながら。……お前が盗らしやんしたぢやないかいなア。

伊平 これは情けない。盗らうと思つて、明けて見たが、箆筒は皆あきながら、何にも無かつた。

しづ エ、それは。ト善右衛門を見て、ちやつとこなしあつて何の、あきながら。誰も外に盗つた者は無  
い。盗人に入つたゆゑ、大方お前が盗つたのぢや。それで、ソレ、其やうな、盗人ぢや。ナア、  
伯父御さん。

伊平 これは又迷惑な。

善右 何が迷惑。大泥棒めが。有りやうに吐かさぬと、おれが仕様があるわい。

ト伊平次を無理に引ッ立て、門口の柱に縛り付ける。

善六 親仁殿。そんなら其奴を

善右 どうで一通りでは吐かすまい。斯うしておいて、又奥も、とつくりと、吟味せにやならぬ。サア、  
お賤、汝も来て、共々に。

しづ 奥の物はまだ盗りはしよまい。もう止しにして

善六 エ、氣の弱い、お賤さん。泥棒に油断がなるかいの。

しづ ぢやというて、奥を見るには及ばぬわいなア。

善右 イヤ、及ばぬぢやない。早う来い。



伊平 こりやどいふ災難にあはうやら知れぬ。

善右 何の、災難。奥を吟味した上で、どうするか。盗人め、待つてをらうぞ。

ト唄になり、善右衛門、善六、お賤を引ッ立て、奥へ入る。跡合ひ方になり、伊平次縛られながら

伊平 なんの事ぢや。盗みに入つて何も盗らず。覚えも無いに、此さまとは、何をしても不仕合せ。泥棒も素人ではゆかぬわい。

ト投げ首して、しつぽりとなる。奥よりお賤窺ひ出て、伊平次が側へ怖々寄つて

しづ コレ、盗人殿、堪忍して下されや。

伊平 エ、。(ト恟りする)。

しづ ほんに、覚えもない今の仕儀。無實を受けて、さぞ迷惑であらうが、ひよんな處へ入つたが、こなさんの運のわるさ。何を隠さう、あの箆笥の小袖は、わしが隠して皆質においたわいの。

伊平 エ、。そんなら、お前が泥棒か。

しづ サア、それも連添ふ夫が大切さ。無ければならぬ手詰め金の金。今のは連合ひの伯父御、大の悪黨それで金の自由がならず。でも急にお主の爲に、吉原の女郎を身請けの手附けに、渡さねばならぬ義理詰めによつて

伊平 ムウ。お主のお爲、吉原の、女郎を身請けの手附け、義理詰めとは……シテ、吉原の女郎とはそりや何處の、何屋の内てござります。

しづ サア、ちつと様子あつて、儲かに角町万字屋の

伊平 もし八つ橋とはいひませぬか。

しづ ヤア、それをこなたは、どうして

伊平 アレ、あの見世の様子、綿商賣。そんなら爰は紀伊國屋、文藏様の内てござりますか。

しづ スイ、文藏殿は連合ひ。わしや女房の賤といふ者。

伊平 ヤア、これは。(ト手を打たうとして、縛られて居るゆゑ、足にて)これはしたり。

トとんと舞臺を踏んで、こなし。

しづ ハテ、思ひがけない、盗人のこなさんに、こちの人は近附きてござんすかいなア。

伊平 イエ、。文藏様といふお名は聞いて知つて居れど、まだつひぞお目にはかゝりませぬ。

しづ 何にもせよ、様子のありさうな事。

ト立寄り、繩を無理に解いてやる。

伊平 これは、。(ト兩手を擦り)存じよらぬ事にて泥棒に入り、文藏様のおかみ様のお前にも、お



初にお目にかゝります。

しづ コレ／＼、様子を早う。奥には伯父御や善六、見附けられては、爲にならぬわいの。

伊平 サア、何を隠しませう。私は彼の八つ橋が眞實の兄、越ヶ谷の伊平次といふ百姓。

しづ エ、。(ト胸りする)

伊平 親達の身の上に、ちつと謬がござりまして、妹めは小さい折に、伯父者人の方へ、私は在所へ、同胞引き分れて暮すところ、母者人は妹が可愛さ、此江戸にて再縁、成人して下野の、舟橋のお屋敷へ腰元奉公。其時に、回家中の、佐野次郎左衛門様といひかはし、……イヤ、様子はいつでも文藏様のお主筋、とつくりと判つてござりませう。(ト思ひ入れあつて)時に、妹めが今の身の上、文藏様の段々の、お世話になるが氣の毒さに、わざ／＼在所へ、くはしう書いておこした頼み状。又あとの月、門跡様へ参つた序でに、吉原へ尋ねて行て、逢うた時にも變らぬ頼み。只早く勤めを引いて、次郎左衛門様と女夫になりたいとの事。生さぬ仲の父御の強慾、實の兄ゆゑ此伊平次へ、手を合せてのくれ／＼の頼み。ア、可哀や、どうぞと思つても、高が水呑み百姓それから、何の便りもせず、逢ひに行かうと思へど、せめては金の五兩でも、十兩でも、いつそ身請けの金でも拵へてと、妹が可愛さに、ふつと悪心の出来心。道ならぬ泥棒。ちひさい此體を

斯うふつ／＼つて此江戸へ、日の暮れるを待ちかねて、出かけた處は傳馬町。お世話になる紀文様とも露知らず、ひやあひの明いて居たを幸ひ、忍び込んで此しだら、またしも文藏様のお目にかからぬが仕合せ。おかみさん、必ず此様子を沙汰無しに、お頼み申します。

トお賤、此うち伊平次のこなしに心を附けて居て

しづ ハテ、めんような。八つ橋殿の兄御なら、吉原の様子をとつくりと、

伊平 イヤ、何も存じませぬ。今朝越ヶ谷から出て來ても、妹の頼みの金が出来ぬゆゑ、わざと逢はずに、

しづ そんなら道理、八つ橋殿は

伊平 エ、。

しづ イヤ、サア、……八つ橋殿は、是非こちらの人が、身請けをさしやんす約束。

伊平 サ、其お世話を、妹めが、きつう氣の毒がつて

しづ いとしや、なんにも知らずに。

伊平 貧の盗みに此身のお話し。

しづ いうてよいやら、わるいやら。



伊平 ハテ、何もおつしやらぬが、私がお頼み。文藏様には、又追つてお目にかゝりませう。  
しづ エ、つんと……氣の毒な事ではある。

ト思ひ入れあるところへ、向うよりお芳、與茂太戻つて来て

よし モシ、おかみさん。今まで待つてをりました。

與茂 貸さぬというたを、やうく五十兩。

ト金を出す。お賤取つて

しづ オ、幸ひな處へ。コレ、兄御さん、爰に五十兩。此金持つて、ちやつとお前は、吉原へ。

伊平 エ、そんなら此お金を。

しづ 八つ橋殿の身請けの手附け。都合はあとから文藏殿が。

伊平 エ、忝い。矢ッ張りこりやお世話に

しづ これて盗人ぬすびとに入つた、志しが立たうがな。(ト吃度なる)。

與茂 エ、そんなら彼奴は泥棒。

しづ コリヤ、龜相すな。

ト留める。伊平次、なしあつて

伊平 どう廻つても、矢ッ張り紀文様の

しづ コレ、マア、無事なうちに…… ヲヤ、無事な顔を早う。

伊平 妹めも、さぞ喜びませう。

ト無性に喜ぶ。お賤ホロリとする。與茂太、「あいつな」と力むを、お賤留めるうち、奥にて

善右 お賤、何處へ行た。おぢや。 (ト忙しく呼ぶ)。

よしアレ、伯父御が戻つてゐるやら。

しづ コレ、お前は早う。

伊平 すぐに吉原へ。

しづ 大儀であつた。二人ともにおぢや。

ト唄になり、與茂太、お芳を連れて、お賤ツイと入る。伊平次、なしあつて

伊平 忝い。何でも此金を妹に。さうぢや。

ト行かうとするところへ、善六つかくしと出て

善六 待て、泥棒め。

伊平 ヤア。(トきよつとする)。



善六 今持つて居たは儘かに金。エ、さては餘所て働いたか。但し此方の品物を金に直したか。なんでも怪しい、其金おれが

ト取りにかゝるを振放

伊平 コレ、盗人ぢやというて、金持つてゐまいか。馬鹿な事を。(ト引き退げる)

善六 ヤア、此奴最前と違つて。

伊平 オ、少しはやつとも覺えて居るわい。

善六 イヤ、ちよこざいな。

伊平 一時も早う妹に。ヤ、してこいなア。  
トこれより兩人をかしみの立廻りよるしくあつて、伊平次、善六を見事に取つて投げ

ト尻引ツからげ、向うへ一敷に走り入る。善六起き上り、「汝を」と跡追ツかけて入る。これより好みの合ひ方になり、文藏右の穴より出て、向うをきつと見て

文藏 思ひがけない今の様子。八つ橋が眞實の兄、越ヶ谷の伊平次。……いとしや、あとの祭り。只何事も……せめては一筆

ト読へ、胡弓入りのめりやすになり、文藏こなしあつて、掛け紙を取つて来て、有合ふ角行燈へ書置

文吉 父様イのう。  
を書き、思ひ入れあつて、奥をちよつと拜み、身拵へして表へ出ようとするところへ、奥より文吉走り出て

文藏 コリヤ。シイ〜。  
ト取り附く。文藏ハツとこなし

文吉 コレ、父様。又吉原へ女郎買ひに行くのか。やらぬ〜。今夜は坊や母さんと一しよに、内てねんねしておくれいのう。

ト抱き上げ、顔をザツと見て、泣きながら下に居る。  
文吉 コレ、父様。又吉原へ女郎買ひに行くのか。やらぬ〜。今夜は坊や母さんと一しよに、内てねんねしておくれいのう。

ト文藏これを聞いて、物いはずに文吉に指さし、わが顔にも指さしして、握り拳にて體を叩き、兩手を組み、くひしばり泣く。文吉前へ廻り、無理に膝の上へ上り、抱附き

文吉 父様、眠たい。寢さして下されいのう。

文藏 コリヤ〜。シイ〜。(ト奥へ心遣ひあつて)コリヤ、大きな聲すないやい。

トそれなりに立上り、こなしあつてそこらなゆすぶり、二三遍歩くうち、文吉寐る。其顔をザツと見て投げ首して思ひ入れあつて、有合ふ蒲團を足にて引寄せ、其上へそつと寐させ、叩きつけ、とつくりと寐入らせ、ずつと立上り、表へつか〜と行く。後ろより抱附き



文吉 父様。なんぼうでもやらぬく。

文藏 ヤア。

文吉 なぜねんねさつしやらぬぞいのう。

ト文藏思ひ入れあつて

文藏 オ、。(ト抱き上げ) サア、ねんねぢやく。

トいろくすかして、又そこらをゆすぶり歩くうち、文吉眠る。文藏こなしあり、又寢所へ連れて行つて叩き付け、寢入らし、奥へ心遣ひ様々あつて、そつと起き上り、さし足にて表へ出かけるうち、文吉ずつと起き上り、あとより附いて行つて、よき處にて

文吉 父様。坊も行のう。

文藏 ハア、い、い。

トぎよつとして又抱き上げ、今度はせう事なしに門口へ出て、あたりを見い、思ひ入れあつてねんくねんねこや。可愛の坊を誰がした。

ト叩きながら、花道中ほどまで行くと、ゴーンと鐘の音する。文藏思ひ入れあつて、氣の急ぐ心にて、やうく寢入らせ、さし足にて本舞臺へ立戻り、又そつと蒲團の上へ寢させ、今度は外の蒲團を押へに掛

け、寢顔を見い、あとじさりして門口へ出て、それなりにサツと戸をしめよせ、ツイと向うへ行かうとするところへ、善六すこくと獨り戻つて来て、花道にて

善六 ヤア、文藏。

文藏 善六か。

善六 汝を。

トいゝる。立廻りにて、善六を本舞臺へ見事に投げ

文藏 おツつけ夜明け。さうぢや。

ト向うへ、ツイと走り入る。善六起き上り、うろたへ、内へ入り、「何處へうせた」と捨ぜりふにて、尋ね廻るところへ、奥茂太奥よりつかつかと出て

奥茂 ヤア、善六か。

善六 馬鹿め。退きをらう。

ト引きのける立廻り、此うち文吉目を覺まし

文吉 父様イのうく。

ト舞臺中を駆け歩く。



奥茂 ヤア、文蔵さんは何處へ行かした。おかみさんは何處ぢや。おかみさん、

ト奥オマ／＼にて、お殿猿轡をはめ、後ろ手に縛られながら走り出る。文吉取附く。

奥茂 ヤア／＼、これは。

ト手早く猿轡を外し、繩を解く。

しづ あたいやらしい伯父御面め、わしを縛つて心に随へと無體な事を。此身は叶はねど、やう／＼爰まで。

奥茂 そりや危ない加減ぢやあつたな。

善六 親仁の戀人お賤、

トお賤に／＼るを、奥茂太支へる。此うち行燈の書置きを見附け

しづ 「書置きの事。」(トちよつと讀み) ヤア／＼。こりや八つ橋が死んで、お主のお身の上。いひ譯なくこちの人が死なしやんすわいのう。

奥茂 エ、。

ト怖り。善六をちよつと當てる。善六倒れる。

文吉 父様イのう／＼。

ト駈けあるき、お賤に取りつく。

しづ オ、可哀や。(ト抱き上げ) こちの人が死なしやんしては、わしや此子は何とせう。どうせうぞいやい／＼。

ト大泣き。向うオマ／＼にて伊平次走り出て

伊平 コレ、お賤様／＼。今吉原へ行く道にて、藏前にて萬字屋の大勢に出合つたれば、妹は次郎左衛門様が手を負はせ、養生叶はず、死にましたといふ。

しづ それゆゑ、こちの人文蔵殿も、此書置きを残して、死ぬる覺悟。

伊平 ヤア／＼。此書置きとは。(ト行燈を見て) ほんに、こりやお主のお爲に、心盡しも水の泡。

しづ 大切の茶入れは毀れ、

伊平 八つ橋は死ぬる。

しづ お主の次郎左衛門様は下手人。

伊平 身一つに迫り、いひ譯無さに、死ぬるといふ書置き。

文吉 母様、コレ、父様は死なつしやるかいのう／＼。

トお賤、文吉を又抱き上げ、いろ／＼こなしあつて、伊平次を捕へ

しづ コレ、兄御。こりやマア、どうせう／＼。(ト振りまはす)



伊平 どうせうというて、妹は死ぬる。お世話になる文蔵様は此書置き。途方に暮れておれも……おれもく、おれもぢやわいなア。

トうろたへ、大泣き。善六起き上り

善六 もう此上は。

トかゝる。奥茂太立廻る。お賤こなしあつて、伊平次を捕へ

しづ コレ、兄御さん。まだ間の無い事、どうぞ。

伊平 さうぢや。なんでも文蔵様を。

奥茂 おれも一しよに。

しづ 坊もおぢやく。

文吉 父様イのうく。

トお賤、文吉を連れ、こけつ、まろびつ、奥茂太介抱する。伊平次、行燈を提げながら、皆々うろたへこなしあつて、花道へ行きかけ

しづ こちの人イのうく。

文吉 父様イのう。

奥茂 旦那さんイのう。

伊平 文蔵様イのう。

ト皆々よろしく、様々こなしあつて花道へ行き

コレ。おりや此やうに尋ねても、肝心の文蔵様の顔は知らぬが。

しづ そりやわたしが居る。

伊平 そんならよい。サア、一しよに。

善六 イヤ、死ぬる文蔵。尋ねさ、うよりは。

ト善六出ようとするを、伊平次ちやつと戸を締め

伊平 コレ、早う。

しづ こちの人イのう。

文吉 父様イのう。

奥茂 旦那さんイのう。

ト入り亂れに呼びく、向うへ入る。伊平次、矢張り行燈提げながら、「文蔵様イのう」とあたりを尋ね尋ね、こなしあつて、向うへ入る。 引返し



遣り物、本舞臺三間の間、柳原雪降りの體。小兵衛、數右衛門、三婦、三人して、文藏を取巻き  
數右 國て意趣ある、次郎左衛門が肩持つ文藏め。見附けた上は百年目。小兵衛。三婦。彼奴を叩き殺  
せ。

小兵 最前死ぬ様な目に遇はせたに、息の根が通ふとは、どうしてもしぶとい文藏め。

三婦 おれが爲には娘の敵。次郎左衛門めも、汝も生けてはおかぬ。

文藏 行きがけの駄賃。意趣ある三人出あうたは、此方の幸ひ。ひつくるめて冥土の供ぢや。覺悟ひろ  
がう。

數三 合點ぢや。

トこれより文藏、三人を相手に立廻り、よきところにて、向うより善六走り出て

善六 ヤア、こりや文藏を小兵衛さん。

小兵 善六か。よい處へ。汝も手傳へ。

善六 望むところぢや。

皆々 文藏。汝を。

文藏 何を。

ト鳴り物入りになり、文藏四人を相手にタチあつて、ト三人を打ち据ふる。小兵衛の茶入れを落す  
を取つて

ヤア、こりや實の茶入れ。

小兵 それを

ト斬つてかゝる。文藏一刀に斬るところへ、伊平次、與茂太走り出て

伊平 コレ、文藏様。おりや八つ橋が兄。死んだと思つた妹が、息吹き返して、又の養生。

文藏 嬉しや、此茶入れが手に入れば、若旦那のお身に氣遣ひは無いワ。

與茂 お前も死なずと、早う内へ。

ト三人起き上り、皆々にかゝるを、立廻りにて押へ附け

文藏 まづ、今日はこれぎり。

打出し

千秋万歳大々叶



右狂言去る正月十七日より相始め、五月節句前まで興行、訥子古今の大當りにて  
 吉例の曾我は幕無しにて、大評判よろしく  
 干時文化二丑のとし

霜月中旬 寫之  
 上下二册 所持  
 村田氏藏書

干時文化二丑のとし  
**干時文化二丑のとし**  
 干時文化二丑のとし



『月武藏野穂狂言』は、同巻の『青樓詞合鏡』と同じ寛政九年、七月の桐座へ書きおろされた、お家世話狂言である。小いな半兵衛の役名は院本から借用しただけで、全編が並木五瓶の創作である事はいふまでもない。三世澤村宗十郎と、三世瀬川菊之丞に、各々、老人役と若い役を早變りに演じさせる趣向が人気を呼んで、大入りを占めたので、翌年、宗十郎に随つて歸阪した後、寛政十一年一月の中座に、『傀儡淺妻船』を作つたが、其一番目は、『月武藏野穂狂言』を、半十郎を伊勢新九郎、小いなを小雪と改めただけで、其儘流用して、江戸と同じく好評を得た。三世櫻田治助は、安政三年三月の中村座に、『一曲奏子寶會我』を書きおろした際、其序幕へ此『月武藏野穂狂言』から『夕顔棚』の場だけをソツクリ借用して使ひ、半左衛門を井駒半十郎、半十郎を井駒幸次郎、磯町を江島、小いなをお八重、として、八世片岡我童と三世岩井兼三郎とに演ぜしめた事がある。

書きおろし當時の役割りは

稲野谷半左衛門、同半十郎は三世澤村宗十郎。濱田後室江島、同娘小いなは三世瀬川菊之丞。下部瀧平は市川男女藏。桃の井先次郎は中村傳九郎。藤島主計、仲間傳助は大谷廣次。東小





僧鉦八、荒川伴作は澤村東藏。桃の井典膳は松本國五郎。岩城彌源次、片田雁助は大谷友右衛門。久利勘解由、唐崎松兵衛は嵐龍藏。桃の井修理太夫は尾上雷助。傾城柏木は松本米三郎。娘おしなは岩井喜代太郎。若黨友次、母お幸は坂東三津五郎。長尾内藏之進は坂東彦三郎。

底本としたのは、帝國圖書館所藏の三冊物寫本で、早稲出大學附屬圖書館所藏の二冊物寫本を參考としたが、兩者とも三立目「吉原の場」一幕を缺いてゐる。併し重要な場面では無い。



月武藏野穠狂言

序 幕 矢 數 の 場

登場人物

濱田娘、小稻。傾城、田毎。下部、瀧平。桃の井先次郎。親方、十兵衛。松屋儀八。奴、徳助、同、土手助、同、挺平。三河屋利兵衛、藤島主計。中間、傳助。桃の井典膳、東小僧、八。荒川伴作。岩城彌源次。傾城、柏木。若黨、友次。稻野谷半十郎。  
造り物、平舞臺、深川八幡社内の體。柱より奥に西の方、本社の方を見せ、東の方に二軒茶屋、宮本の門口。見物の方へ向ひ合せに見る道具に好みよろしく、宮神樂にて幕明く。ト町人甲、乙、丙、丁、兩方より二人づつ出て

- 甲 なんと、皆、見やつしやれ。いつでも此深川の八幡様は、賑かな事ではないか。
- 乙 それく。二軒茶屋も殊の外忙しい。
- 丙 江戸はどうでも繁華。どこへ行つて見ても、人浪で大繁昌さ。
- 丁 其繁昌の序でに、これから土橋か仲町へ行つて、おいらも一しきり遊ばうてはないか。
- 甲 遊びたけれど肝心の



乙 命無き矢間重太郎。

丙 イヤ、遊ぶ事は親の事内ぢや。

丁 それぐにおりゑを見て行かうわいの。

甲 おりや心が浮橋ぢやなア。

乙 (向うを見て) コレ、皆の衆、見やしやれ。何やら面白さうなものが来るぞや。

丙 ほんに、ありや吉原の「俄」か知らん。

丁 イヤ。ありや俄ぢやない。最前夷の宮で聞いたが、どこやら大名の息子が、吉原の女郎、藝者を連れて、上方の祭り囃子をして、此八幡様へ参るのぢやげな。

甲 そりや見物ぢや。上方の囃子とは珍らしからう。

乙 そんなら、皆一所に、見ようではないか。

丁 サア、皆、ござれ。

ト又宮神樂になり、わや／＼と正面へ入ると、神樂打ちあげ、向う揚幕の中にて、囃子になる。荒川伴作、黒羽二重の着流し、大小にて、絞りの手拭を首に掛け、うしろ向きにて、屋臺の世話を焼き／＼出る。此屋臺、御殿造りにて、半すだれ。これに葵のつる方々に下り、屋臺の中に正面桃の井先次郎、傾

城田毎の太鼓、傾城柏木と藝者甲乙の三味線、太鼓持、○、△、×の摺り鉦、笛は腰より附けて、此人數皆々練りに二葉葵の模様、揃ひの着物にて、後より松屋儀八、亭主にて世話役のこしらへ。此外、若い者、屋臺を持ち、靜かに出る。花道の間、地にて、本舞臺へ直る。伴作、拍子木を打つ。これにて、屋臺正面へ直る。これより所望になる。面白き振りあつて納まる。

伴作 ヨウ／＼。若殿の太鼓、太夫殿の三味線、藝者どもの摺り鉦。どうも堪つたものではない。

儀八 左様々々。いつそ、私も呆れた／＼上方の此囃子。

先次 なんと、どんなものぢや。

トいひ／＼屋臺より出てくる。これにて柏木はじめ皆々も一しよに舞臺へ出てくる。

此先次郎が思ひ付き、今日此富ヶ岡の八幡へ、是非参詣せねばならぬ事があるゆゑ、昨夜廓へ行って今朝からの趣向ぢや。太夫をはじめ、若倉田毎、藝者どもと一しよに上方の囃子の習ひ、そこで屋臺が葵祭り。加茂の名物もやうに附けた三葉葵は、離れぬ證據。どうぢや、太夫、嬉しいか、嬉しいか。

柏木 何をいはしやんすやら。わたしか否ぢやといふものを、無理やりに三味線弾いて、こゝへ来るうらみ、どつやら恥かしくてならなんだわいなア。



田毎 それく。廊とちがうて、仲町とやら、土橋とやらは、藝者の巢と聞いて居れば、

藝甲 わたしらもよう弾かぬゆゑ、弾きごこなひばかり。

藝乙 さぞ聴きづらかつたてござんせうわいなア。

儀八 事も愚かや。なんぼう此深川に藝者が澤山でも、又吉原花の君たちの三四郎(?)のちよつかい。

伴作 こつちの若殿のすつてんてれつく。藝者共のちゃんちきちんまで、江戸で珍らしい上方囃子。恐

らく吉原の俄でも、かういふ事はあるまいく。

先次 なんのあらう。これを上方では、京で祇園、大阪で新町、島の内の美しい藝者どもが多勢出ると

その綺麗さといふものは

トこれにて柏木、ムツとこなしあつて

柏木 殿さん、お前はそれをいつ見やしやんしたえ。

先次 ハテ、都在番の時。

柏木 そんなら、其時、祇園町や新町の女郎さんや、藝子さんに。お前はく。(ト胸ぐらを取つて振り廻す)

先次 コリヤく、太夫、こりやどうするのぢやく。

柏木 お前が常住江戸の女子と違うて、上方は美しうて、物和らかなといはしやんす筈ぢやわいなア。

伴作 はつても大黄いでも、最早下つてしまつたあと、百三十里あなたの焼き餅とは、こりや太夫殿には似合はぬく。

先次 それく。此先次郎は上方に色は無い。ちよつと噂をしたばかり。

柏木 悪性なお前。合點がゆかぬわいなア。

田毎 柏木さん。其やうに氣をもまずと、うツちやつて置いたがよいわいなア。

藝甲 太夫さん。なんぼお前が其やうに腹立てさんしても、

藝乙 菅原傳授の四の口、菅丞相が怒りの段、

皆々 都の方へは届きませぬ。

先次 御持病が起つたら……又おれが癪をさすらねばならぬ。モウく、太夫、機嫌を直して、わつ

さりと

伴作 宮本へ行て、酒々。

儀八 サア、皆、一しよに。

女皆 柏木さん。

柏木 (手を取るを振り離し) エ、知らぬわいなア。



トびんとする。先次郎こなしあつて

先次 こりや酷うあしらふな。さてはなんぢやな。此方の客のくりそに、やつぱり氣があるのぢやな。

柏木 くりそとはえ。

先次 ハテ、登りつめて居る久利勘解由どの。

柏木 あた好かぬ。又、そんなこと。

先次 イヤ〜、どうでもどうしたに違ひあるまい。

柏木 そんな女郎ぢやないわいなア。

田毎 そりやわたしらが證據人。此間も、ソレ、廓で

儀八 大恥掻きの、久利勘解由様。

伴作 何を吐かす。(トむつとする)。大切なお使者の勘解由様、わるう仰せらるゝと、却つてお身のお爲になりませぬ。

先次 オツト、そりや合點ぢや。

伴作 お合點なら、早く宮本方へ。

田毎 柏木さんも機嫌直して、

皆々 サア〜、お出てなされませ。

ト又騒ぎ唄にて、右の一むれ、残らず臆病口へ入る。又宮神樂になり、向うより三河屋利兵衛と下部瀧平、連れ立つて出る。

利兵 コレ〜、瀧平殿。此利兵衛に少しも如才はごんせぬわいの。

瀧平 様子を聞いては打捨て置かれぬ大切な品。殊に、人手に渡してよいものでござるか。

利兵 イエ、こつちも質商賣。日限は、今朝から今まで、待つたは、お大名だけ、金が出来たら渡さうと、彼の硯も爰へ持つて來ました。金が出来ねば、すぐにこちらへ賣る約束。どちらへなりと、

瀧平殿、こなさん政略つけて、しつかりとした、返事を聞かして下さいませ。

瀧平 いかにも。日限は昨日切れたれば、あれは脇外へ賣らつしやれても、言ひ分はなけれども、大切なお家の重寶。殊に、其實改めとあつて、都よりお使者のお下向。是非請け戻さねば叶はぬ品。

これさ利兵衛殿、口て又々とは申さぬ。瀧平が兩手を下げる。四五日ならずば、二三日……サア、それともならずば、たつた二日。

利兵 ア、コレ〜、瀧平どの、こつちから頼みます。どうぞ料簡して下さいませ。

瀧平 すりや、二日ならずば、せめて明日一日のところを待つて下され。それまでに拙者、屹度金調達